
御徒町フィーバー3rdStation

工場長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

御徒町フィーバー3rdStation

【Nコード】

N6331F

【作者名】

工場長

【あらすじ】

山手線の駅名「おかちまち」さんの大学生活。停車駅不明行き先不明の学園ドラマ三回目のスタート！

プロローグ

多摩川を越えて数分後、車窓には真っ青な五月の空に立ち誇る東京タワーが映し出される。

その姿を確認した乗客たちは次々に降りる準備を始めた。

「あれが東京タワーか……」

一人の女性がタワーを目で追いながら呟いた。程よい大きさの胸元まで伸びた髪、ぷっくりと豊かな唇。その斜め右上にあるほくろがなんとも妖しさを感じる。

「幸子^(さいこ)は東京初めてだったな」

その隣に座る短髪の男性が彼女の肩に手を置いた。彼にとっては東京タワーとは久々の再会である。

「そうだね、中学高校の修学旅行は東京じゃなかったしね。うちと東京は遠すぎたせいかな」

やがてタワーは高層ビルの陰に隠れていった。

「ああん、もうせっかく初めての東京タワーだったのにー」

彼女は語尾を伸ばす時、その声に彼はセクシーさを感じている。もっとも他の人が聞いてもそう思うのかもしれない。

「また見られるさ。見るだけじゃなく実際に行くこともできる」

彼は自分と彼女の荷物を肩にかけると彼女に「もう行くぞ」と声をかけた。

「そうだね、これから東京で暮らしていくのだもん」

新幹線を降りる間際、彼女が小声で

「あたしたち……大丈夫だよね……」

と彼のTシャツを掴んだ。

「大丈夫だって、心配するな」

彼は振り向かず^{やまのて}に力強く言う^{やまのて}とホームへと降りた。久しぶりに踏む東京の土。ここからは山手線^{やまのて}に乗り換え、新居への最寄り駅へと向かう。

山手線に乗って七分後、突然彼は彼女に「降りよう」と彼女の肩を掴んだ。

「え、まだ途中だけど降りるの？」

「ああ、ちょっとだけな」

戸惑う彼女の手を引いた彼はドアが開くのを確認するとホームへと降りた。

車掌のアナウンスが聞こえる。

「いとおえどご購入ありがとうございますー。おかちまち御徒町ー、御徒町です。とえ都営大江戸線はお乗換えです。」

第一話 真知、選挙へいく

長細い紙にある人の名前を書く。その紙を半分に折ってアルミ製の四角い箱の小さな四角い穴に入れる。いわゆる「投票」って行為だ。

私の投じた一票がこの国を変えることになると思うと身も心も引き締まる。

……そんなわけではない。

私、御徒真知おかち まちは今、文京大学自治会ぶんけいだいがくの会長を決める選挙の投票に來ている。一大学の生徒会長の選挙など国を動かすわけが無いのだ。まあこれが本当の選挙でも、国が変わるのかどうかは分からないけどね。

「かつちゃんもう投票したの？」

私のすばやい動きに驚いたのはいいちゃんこと椎名真智しいな まちだ。背は小さいけど大きい目をしている。髪はおへその辺りまでであるかな。ちなみに名前は西武池袋線せいぶいけぶくろの池袋の隣駅いけぶくろと音が一緒である。まあ私の御徒町おかちまちと比べたら、知名度はかなり低いんだけどね。

料理が大好きでまさに理想の奥さんになりそうだけど、ものすごい格闘技―特にボクシング―が大好きで、その影響か自分で体を鍛えている。だから彼女のパンチ力や一般男性の平均を余裕で超えてしまうのだ。

「そりゃ知り合いの名前書けばいいんだもん。悩まなくてすむじゃん。はるちゃんなんかもう外に出ているし」

私はいいちゃんと投票箱を挟んだ位置に立って答える。

はるちゃん、とは私としいちゃんの親友の一人で、本名は伊井国遥いいくにはと言う。普通の名前だけど、この大学の教授であるお父さんが伊井国造いづくぞう郎なので、「鎌倉かまくらの娘」と人に揶揄されることがある。

背は私たち三人の仲では一番高く、百七十二センチある。しいち

やんとは二十センチ以上の差だ。背は高いけど髪は短い。うなじの辺りまでかな。ちなみに私は背も髪の長さも二人の中間。百六十三センチの肩までの髪。

はるちゃんは大学に入ってからダンスサークルに入り、そのせいかキックに自信を持っている。パンチのいいちゃんとキックのはるちゃん、そして私の「はったり」。

この三人の得意技がいかになく発揮されたとき、世界は救われ……ない。

「そうだね、タカビーの名前を書けばいいんだもん迷う必要は無いよね」

しいちゃんは紙を投票箱に入れると私に並んだ。

タカビー。本名、高見勝太。^{たかみ かつた}年は私たちより一つ上だけど、病に倒れたお父さんの変わりに一年間マグロ漁船を操っていたため、学年は一緒である。体格はいかにも海の男って感じでがっちりとして髪は短い。去年まであだ名は私と同じ「かつちゃん」だったけど、あだ名をめぐって私との壮絶なる小宇宙のぶつかり合いに敗れ、「タカビー」と言う新しいあだ名を持つことになった。

昨年私たちと一緒に文化祭を作った中であり、来年度の自治会会長に立候補している。私たちはその選挙の投票に来ているわけだ。

「さて、投票も済んだことだしいつもの喫茶店にでも行きますか」はるちゃんから既にその喫茶店に在るとのメールを受け取っている。

体育館を出るとひんやりとした二月の空気が私たちを襲った。体育館との温度差に私は全身を震わせた。

「さむーい、早く喫茶店に行って温かいミルクティーが飲みたい……」

私はしいちゃんの両脇に手を伸ばすと、上下に摩った。ほら、摩擦熱で暖かくなるかもしれないじゃない。

「ち、ちよつとかつちゃんくすぐりたいよー」

しいちゃんが身をよじって私の手から逃れようとする。端から見るといちゃいちゃしているみたいだ。

そんな風にしてふざけながら階段を上り中庭に出ると、背後にいきなり人の気配。誰かと思って振り向こうとしたけど、

「うわーい、私も参加するー」

と、その人物に抱きつかれてしまった。もしこの人が忍者だったら私は天誅をくらい、二十歳という短い一生を終えるところだったろう。

さて、私に抱きついてきた人を紹介しなければならぬ。

この頬を摺り寄せている人は明石真奈美^{あかし まなみ}。はるちゃんが所属しているダンスサークルの部長さんである。髪は私と同じくらいの長さだが、背は私より五センチほど高い。

いつも明るい笑顔を振りまいている彼女だが、可愛い女の子（特に女子大生と女子高生）が大好きで、私は会うたびにいつも抱きつかれている。けどしいちゃんに対してはそんなことはしない。しいちゃんにそんなことをしようものなら返り討ちに遭うと思っているのだろうか。

「人と人が触れ合えば自然と暖くなるんだよ、かつちゃん」

明石先輩は公共のコマーシャルの標語みたいなことを言ってさらに頬をくつつける。確かに暖かいけど、ちよつと痛い。

「明石先輩……もう少し離れてもらえませんか」

「もう、そんな冷たいこと言ったら心も体も寒くなっちゃうよ」

明石先輩はさらに体を密着させてくる。

不意に明石先輩は私の体に巻きつけていた右手を私の顎にそえた。そして真剣な眼差しで。

「……そういえばかつちゃんとまだキスしていなかったね」

と、今までとは違う声色で呟いた。やばい、落ちそう。

「明石先輩、ダメー！　しいちゃん助けて！！」

私は落ちる寸前のところで明石先輩の顔を押しのけしいちゃんに助けを求めた。

「いいしやない、ファーストキスしやないんだし、女のキスもたまにはいいものひよ」

私の手の力に負けじと顔を近づける明石先輩。この人と会って二年が経とうとしているけど、未だに本気なのか冗談なのか区別がつかない。同じサークルのはるちゃんは毎日のようにこんな災難に遭っているんだけど、未経験が幸いしてキスはされていない。でも私は経験済みだからね。されてもおかしくないのだ。

「明石先輩、かっちゃんが好きがっているじゃないですか。離れてください」

背の小さなしいちゃんが、私と明石先輩の手をくぐるような形で間に入った。すると、明石先輩は

「うー、しいちゃんがそう言うなら離れるよ……」

と、寂しそうな顔を浮かべて離れた。そしてふらふらと体育館のほうへと去っていった。しいちゃんに対してはやけに素直な明石先輩。いったい何がそうさせるのだろうか？

「ありがとー、しいちゃんのおかげで助かったよー」

「明石先輩……、どうして私には抱きつかないんだろう？　ちよつと寂しいな」

しいちゃんは明石先輩の去った階段を見つめてぽつりと呟いた。

「えっ！？　しいちゃん明石先輩にキスされたいの？」

もしそうであるならば、私は今後明石先輩に会ったら真っ先にしいちゃんを生贄として捧げるであろう。村のためだ、誰かが犠牲にならなきゃなるめえ。

「もーう、そんなわけないでしょ」

しいちゃんは顔を真っ赤にさせながら私の腕を掴んだ。怒っているように見えるけど、「もーう」を使っているので、大して怒っていない。

「そうだよねしいちゃん、悪かったよ。ここにいても寒いだけだから早く喫茶店に行こうか」

私はしいちゃんを引っ張るようにして喫茶店へと向かった。

と、言うわけで二度目の「御徒町フィーバー」スタートです！

第一話 真知、選挙へいく（後書き）

というわけでシリーズ通算百話目にして御徒町フィーバー三度目のスタートです。

今回も御徒真知と愉快的仲間たちをよろしくお願いいたします。

第二話 喫茶店にて

いつもの喫茶店には、はるちゃんのほかにもう一人いた。

「どうも、かつちゃん、しいちゃん」

と、はるちゃんの隣でうやうやしく挨拶するのは社会学部の真田^{さな}
^{だ あゆみ}亜由美だ。

肩までのストレートな黒髪に口元のほくろがなんともセクシーな感じ。セクシーさは顔だけではなく体にも現れており、ここにいる四人の中では一番胸がでかい。同い年なのにもうすっかり染み付いてしまった癖なのか語尾は敬語である。

社会学部と言うことは明石先輩と一緒にいる。つまり彼女は明石先輩の被害を最も受けている者の一人といえる。受け続けたせいで思考が影響されたのか、時々私たちにセクハラをするといったちょっと困ったことをしてくれる。

「お、来年の副会長候補がいる」

私としいちゃんははるちゃんと亜由美の向かい側に座った。亜由美はタカビーが会長になった時の副会長候補になっている。どこかの国の大統領候補が女性を副大統領候補にしたように話題性を狙ったことではない。彼女の実力を認めたことである。

「副会長だなんて……、タカビーが当選したらの話じゃないですか。気が早いですよ」

亜由美は左手を軽く振りながら否定をする。

「それよりもはるちゃんの次期部長の方が確実じゃないですか」

亜由美の言うとおりではるちゃんは来年度、所属するダンスサークルの部長になることが決まっているのだ。

「まあ私の場合はものすごく規模の小さなサークルですから簡単に決まってしまうんですよ」

はるちゃんがホットコーヒーにスプーンを入れてかき混ぜる。

「それでもトップに立つことはすごいことだよ」

「そういう三人だって去年は文化祭実行委員のトップだったんですよ」

はるちゃんの言うとおりで、私といいちゃんと亜由美は昨年文化祭実行委員の中心メンバーとして文京大学の文化祭を企画したのである。私のほうがトップ経験者ってことか。

「今年は新入部員たくさん入ってくるといいんだけどなあ」

はるちゃんはスプーンでコーヒーをかき混ぜながら呟いた。小さなサークルだから春から入学してくる新一年生が入ってこないということは即死活問題になってしまう。

「新入部員ね……、また絶叫と混沌の勧誘活動になるのかしら……」

私ははるちゃんのスプーンを見ながらため息をついた。うちの大学の部活・サークルの勧誘活動といったらものすごく気合が入っており、新一年生の腕をつかんで、入るまで離さない雰囲気から醸し出しながら、サークルに入るための説得を続ける。我が文京大学春の恒例行事である。

「文京春の勧誘祭」と名付けられているくらいだ。だからといって絵皿がもらえるわけではない。

「まあ私といいちゃんは別の校門から出入りしていたから難を逃れたんだけどね」

実際に見たことはないが、その場にいいちゃんが放たれたらいろいろ危険であろうことは想像できる。あ、危険なのは当然サークルの方々のほうね。

「私はその間たぶん大学行ってなかったんじゃないのかな？」

はるちゃんが思い出したかのようにスプーンで軽く円を描いた。

彼女は入学当初は卒業の意欲が無い問題児だったからね。

「勧誘祭の被害を受けたのは、私だけなんですネ……」

ハーブティーのカップを回しながら亜由美が寂しそうな声をあげる。

「やっぱり、噂通りスゴいの？」

はるちゃんが楽しそうに身を乗り出す。

「ええ、そりゃあもう……」

亜由美はたくさんサークルの方々から腕はもちろん髪の毛、果ては足まで引っ張られたそうだ。

「特に一番しつこかったのが、あの『くろ』……、じゃなくてあの明石先輩だったんです」

ん？ 今「くろ」って言いかけてやめたな。「くろ」ってなんだろう。金持ち球団の助っ人外国人のことかな？

そんなことは置いといて、明石先輩は亜由美を見るやいなや

「へーい、そのセクシーガール!!」

と、言って抱きついたそう。それ以来亜由美は明石先輩の被害を受け続けている。

「まあ、セクシーなことは否定しませんけどね……」

亜由美はうつとりとした表情で……

「自分で認めるな、それに乳を寄せるな!」

私は手を伸ばして亜由美の腕を捕らえる。

「はるちゃんは『勧誘祭』では勧誘するほうにまわるんだよね?」

しいちゃんが私の腕の下からはるちゃんへと視線を送る。

「そうね……、部員は一人でも多く入ってもらいたいし……。まあ私が頑張らなくてもあの明石先輩が力を発揮してくれることでしよう」

確かになー、「女子大生好き」の属性を持つ明石先輩のことだ、新入生を掴んでは投げ、掴んでは投げ……。って投げてどうする。

「ところで、私はサークルの部長。亜由美は自治会の副会長だけど、お二人は三年生では何かやるのかな?」

はるちゃんが私たちに楽しそうな視線を向ける。

「また文化祭を作っちゃったりして」

「え……、うーん」

私はしいちゃんの顔を見た。彼女も首をかしげている。

「今年は普通に学生かなー」

しいちゃんの言葉にはるちゃんはつまらなさそうに口を尖らせた。

「普通に学生って、大学生じゃなきゃできないことがいろいろあるのに普通じゃもったいないよ」

コーヒーマシンのついたスプーンをしいちゃんの前で振り回す。

「普通に学生していることだけでも大学生でしかできないことだと思っけどなあ」

「そうだね、しいちゃんの言うとおり。こうしているだけでも貴重な体験ですよ」

私はテーブルの上に寝そべった。一応はるちゃんと亜由美のカップにぶつからないように気をつけている。

「もう、かっちゃんまでつまらないことを言うー」

はるちゃんがしいちゃんの口調で私の頭を軽く叩いた。

「大学生もあと二年なんだから大学生らしい生活を送ろうと思う」

まあ「大学生らしい生活」とは何かと尋ねられたら答えは人それぞれなんだろうけど。はるちゃんのようにサークル活動に励むのもよし、亜由美のように自治会活動に励むのもよし、私としいちゃんのように普通に暮らすのもよし。

自治会会長の選挙はその日のうちに開票され、結果はタカビーマの圧勝となった。タカビーマはお約束の通り片目のダルマを選挙事務所（空き教室の一つ）に用意しており、当選を聞くや否や勢いよくもう一つの目を黒々と描いた。

「よっしゃー、俺がこの大学を変えるぞー！」

何の選挙でも当選した人は、最初威勢のいいことを言うけど、この勢いを続けてほしいな。そんなことを考えながら私は親友代表として乾杯の音頭をとった。

私は喜びのあまり一つの事実を忘れてしまっていた。

それはしいちゃんとはるちゃんもこの宴の席にいることだ。

第三話 当選の宴

「それじゃあタカビーの自治会会長当選を祝して、かんぱーい」

「かんぱーい」

私の掛け声とともに、たくさんのグラスが音を立てる。

今日は私の親友の一人タカビーが文京大学自治会の会長に当選したので、その祝いの宴を開いているのだ。

場所はタカビーの選挙事務所。事務所といったら小さな会社を想像するかもしれないけど、その実ただの空き教室なんだけどね。

しかし去年は文化祭実行委員長を務め、今年は会長に当選するだけあって、タカビーの人望はすごいものだ。私は辺りを見回した。

半分は共に文化祭を作った仲間であとは私の知らない人。まあタカビーの方も私の知り合いで知らない人いるからおかしくないんだけどね。これがみんなただの取り巻きだったら嫌だな。タカビーが落ちぶれた時もそばにいてほしいものだ。

「それではー、ここで会長に当選した高見より一言」

なぜか司会をしている姉小路現会長の言葉に促されてタカビーが教壇に立った。

「あんまり長くなるとあれなので俺からはただ一言。俺はこの大学を変える！ 変える！ 変える！」

タカビーの声に合わせてみんなから

「変える！」コールが飛び出す。これを英語で言わないのがさすがは日本人だな、って思う。別に日本とアメリカが戦争しているわけじゃないけど。

「続きましてー、次期副会長、真田亜由美より一言」

亜由美はもう酒が回っているらしい。足元をふらつかせながら教壇に立つ。

「えー、ただいまご紹介にあずかりました亜由美です。みんな、私たちに投票してくれてありがとうございます。みんな、大好きだ

よー」

酔っているためか亜由美の突然の告白。みんなこれにどう対応しているか戸惑っている。

そんな中、一人の右手が上がった。

「私もだーいしゅきだよー。亜由美ー」

……、しいちゃんだ。何を飲んだかしらないけど首筋まで真っ赤にさせた彼女はそんな小さな体を何度も飛び跳ねることで、教壇の愛しき人へ自分の存在をアピールしている。

「うわーい、しいちゃんありがとうございますー」

教壇を降りた亜由美がしいちゃんに駆け寄る。

「亜由美、あーゆーみー」

しいちゃんも周囲の人を押し退けて亜由美に近づく。

やがて二人は抱き合い、亜由美の首にはしいちゃんの手が。カンの鋭い人ならもうお分かりであろう。

「首相撲ー」

「うわああっ、目が、目がーっ」

……、やっぱりこうなるよね。

「はるちゃん、しいちゃんを止めないと……」

と、私ははるちゃんの姿を探したが、

「会長さんはー、いつまで会長さんなのー？」

はるちゃんもすっかりお酒が入っているようで、姉小路会長に絡んでいる。

「今年度中、つまり三年のうちは俺が会長だ」

会長ははるちゃんの絡みに圧倒されずに淡々と答える。

「それじゃあー、今も会長さんだー」

自分で納得の言っただるちゃんが、会長の空いたコップにビールを注いでいく。まるでホステスと若社長みたいだ。

「会長さんの言うことには絶対服従ですね」

「いや、別にそこまで強力な権限は持っていないぞ」

大学はどこかの妹さんのように絶対主義国家じゃないからね。自

治会会長の存在すら知らない学生もいるだろうし（事実一年目の私がそうだった）。

「それならばこれで皆を従えさせればいいのです」
はるちゃんを取り出したもの、それは――

「ちよっ、はるちゃん！」

「会長の言うことは絶対なのれす」

やはり私の予想通り一本の割り箸だった。その先には王冠マークが。はるちゃんは「王様ゲーム」をやるうとしているのだ。

「はるちゃん、いい加減それ古いからやめなよ」

私ははるちゃんから割り箸を取り上げる。

「えー、需要あるものに古いも新しいもないよー」

はるちゃんは背が高いので、私が割り箸を上に掲げても取られてしまう。だから私は後ろへ回した。

「必要なのははるちゃんだけでしょ。みんなこんなのやる気ないよ」

「確かにやる必要はないな」

会長が注がれたビールを一口飲んで答える。

「えー、会長さんやろうよー」

このままでははるちゃんが暴れてしまう（パート1の合コンの回を見てね）。どうしようか割り箸を握り締める力を強めたところで「会長の言うことは絶対と言っただろ。『王様ゲーム』はやらない」と、会長さんがはるちゃんのおでこをつついた。その瞬間はるちゃんはまだで「王様ゲーム」の呪いが解けたかのように大人しくなった。

「会長の言うことは絶対です……。残念です……」

はるちゃんは会長さんにはやけに素直だ。これではるちゃんの方はなんとかなりそうだけど、あともう一人……。

「うふふ、亜由美スタミナ奪われていく感覚が分かる？」

「ち、ちよっと誰か助けてー」

……、まだやってるよ。酔ったしいちゃんのタチの悪さを理解してか誰も亜由美を助けようとしなない。私が止めればいいのだけど、

私だって下手をすれば何をされるか分かったものじゃない。

はるちゃんは会長さんによって大人しくなった、とすればしいちゃん……。

「しいちゃん、イラケン選手が来たよ！」

私はしいちゃんの大好きなイラケン選手の名前をあげた。

「えっ、イラケン選手？ どこ、どこ！？」

私の予想通りしいちゃんは亜由美から離れた。

「あうー」

亜由美はその場に寝転がった。相当酔いが回っているようだ。

「イラケン選手ー、どこですかー？」

いくら叫んでもイラケン選手からの返事はない。それはイラケン選手がただの屍になったわけではなく、イラケン選手など最初からいないからだ。つまり私の嘘。友達を救うためならこのくらいの嘘も方便方便。

「ちよつとー、かっちゃん。イラケン選手いないじゃないのよー。嘘ついたのー」

しいちゃんが私に向かって絡んできた。やばい、これは予想外だ。「もーう、かっちゃんの嘘つき、怒ったからね」

そう言っけしいちゃんは近くにあったビールの缶を開けると一気に飲み干した。

「うー、うー」

もうまともな言葉を発していない。茹でダコ以上に真っ赤になったしいちゃんが足元をふらつかせながら私に近づいてくる。

「ちよつと、タカビー助けてよ」

「知らねえよ！ 自分でついた嘘の落とし前ぐらい自分でつけろ！」なんて頼りない次期会長だ。

そんなこと言っている間にしいちゃんの射程圏内に入ってしまった。私は首をつかまれまいと思いつき背伸びをする。

「むー、眠くなっちゃった……」

不意にしいちゃんが私の方へと倒れてきた。しいちゃんの頭が私

の胸にぶつかる。そしていいちゃんから安らかな寝息が聞こえてきた。

「よかった……。大人しくなった……」

私はいいちゃんの頭を優しくなでた。今なら首相撲ができるかもしれないけど、触らぬいいちゃんになんとやらで、何もしないほうがいいだろう。

「えーと、そろそろ時間なので解散するぞー」

会長さんがマイクを片手に叫ぶ。

「えっ!? もうそんな時間なの?」

「ああ、みんな気をつけて帰れよ」

「帰れて言われても……」

私の胸元で寝ているいいちゃん。会長の隣で座り込んでいるはるちゃん。そして床に寝転がっている亜由美。この三人を一体どうしろというのだ。

「遥がやっているサークルの部室に止まればいいだろう。俺と姉小路で運んでやるぞ」

「やだやだ! 学校に泊まるのは絶対にヤダ!」

去年の秋「お化けの世界選手権」開催中に学校に泊まってものすごく怖い思いをした。今日はお化けが見える明石先輩はいないけど、あんな目には二度と遭いたくない。

「といっても、下手に外に運ぶより学校にいたほうが一番安全だろ」
タカビーと会長さんは私の意見を聞かずにさっさと三人を連れて部屋を出てしまった。

「ちょっとタカビー、もしお化け見たら絶対に恨んでやるからね!」
戦国武将の霊にとり憑かれたらここを立派な城にしてやる!

こうして私は二度と泊まらなないと誓ったはずの学校に泊まることとなってしまった。明石先輩がいなかったためお化けを見ることはなかったけど、私は恐怖と不安でなかなか眠れなかった。

結局四人で最後に起きることとなり

「かっちゃん、また酔っ払ったんでしょー」

「運ぶ人も大変だっただろうねー」

「かっちゃん、宴の席とはいえ酒に飲まれなくてください」
と、三人に勝手な記憶を話されるのであった。

第四話　しいちゃんは引越す

しいちゃんが引越しをすることになった。場所は今の家から歩いて三分ほどのところ。私の家からは五分前後。

なぜこんな近距離で引越しをするのかと言うと、風水でも改名させるのが好きな占い師の影響でもない。妹である結衣^{ゆい}ちゃんが文京大学に合格し上京するので、二人で暮らせる家に変えるのだ。

しかししいちゃんの家は格闘技関連のグッズが多いこと……。しいちゃんが大ファンであるボクシングミドル級の世界チャンピオン、町田^{まちだ}イラケン選手を始めとする格闘家のポスターやぬいぐるみ、そしてダンベルなど体を鍛えるための器具……。これだけを見ると、とても女子大生の部屋とは思えない。だが彼女は立派な女子大生である。外見だけ見ると女子中学生に見えるかもしれない。

そんなしいちゃんの家の引越しの手伝いに私とはるちゃんは来ている。といっても前準備はしっかりとしていたので、まとめておいた荷物をダンボールに入れるだけなんだけどね。

「この調子だと午前中には終わりそうだね」

我が家オリジナル（うちは和菓子屋だからね）の日本手ぬぐいを頭に被った私はガムテープでダンボールの口を貼り付ける。

「それにしてもしいちゃんのこれ、ダンベルって言うんだっけ？
ものすごく重いんだけど」

はるちゃんは大きなダンベルをまるで振り子時計のようにぶら下げながらよちよちと歩く。

「片方で十キロかな？」

しいちゃんは軽々とダンベルを受け取ってダンボールに入れる。まるで世界の不思議を扱うクイズ番組の司会者のようだ。

「……」

私とはるちゃんはあきれながらその様子を見つめた。

「さーて、これでは業者さんを待つだけ」

しいちゃんは最後のダンボールにガムテープで封をした。

「よし、それじゃあ待っている間みんなでお茶を飲もう！」
はるちゃんが勢いよく右手を上げた。

「ちょっと、はるちゃん。お茶を飲もう、って言ったって何もないじゃない」

湯飲み茶碗やお茶もみんなダンボールの中だ。

「だからここはワイルドに！」

はるちゃんは私が買った二リットルペットボトルのお茶のふたを開けた。

「ちょ、直飲み!？」

女三人だから「間接キス」なんて気にすることは無いけど、直飲みなんてワイルドじゃない？ 水牛に乗ってここまで来たわけじゃないんだからさ。

「それじゃあ蓋をお猪口代わりにして飲みますか？」

はるちゃんは丁寧にひっくり返した蓋にお茶を注いだ。

「それじゃあ飲んだくれのおじさんじゃない」

そう言いながらも私は蓋を受け取ってお茶を飲んだ。ちょっとしか飲めない。

「それにしてもタカビーが会長になるなんてねえ……」

ペットボトルを片手にはるちゃんが呟いた。タカビーが選挙により自治会の会長に選ばれたのは先月のことだ。

「これからはタカビーが会長さんだね」

しいちゃんがはるちゃんからペットボトルを受け取る。

「そうになったらそれまでの会長さんはなんて呼べはいいんだろう？」

「うーん、『^前の会長さん』かな？」

「『前の会長さん』なんてまるで時代劇みたいね」

はるちゃんの言うとおりで「前の会長」なんて言ったらその証拠となる印籠がお供の方の懷から出てきそうだ。私たちは「へへーっ」と地べたにひれ伏さなければならぬ。

「『前の会長さん』もこれで暇になるのかなあ……」

はるちゃんがそばにあるダンボールを撫でる。

「次は四年生だから就職活動や卒論で忙しいんじゃないのかな」

しいちゃんがペットボトルを上下させながら答える。筋肉でも鍛えているのかな？

「そうか……、忙しいよね……」

はるちゃんなんだか残念そうだ。去年からそうだけど、はるちゃんは「前の会長さん」こと姉小路頼綱あねこうじ よりつなさんの話になると気分が弾んでいるような気がする。今はちょっと落ち込んでいるけど。

「ところで業者さん来るの何時だったけ？」

うつむき加減のはるちゃんが、気だるそうな声を出す。

「そうねー、準備に時間がかかるだろうと思って遅めに頼んだからあと二時間かな？」

しいちゃんはピンクの携帯電話を取り出し時間を確認する。

「それじゃあどこかお昼ごはんでも食べに行こうよ。二時間もあれば十分でしょ」

あ、はるちゃん復活した。

「そうだね、どこかこの辺のお店に食べに行こうか」

「なんだったら私の家に来る？」

「えっ！ いいの？」

はるちゃんがしいちゃんの足を上半身でまたぐ姿勢で身を乗り出した。

「もっとも今から電話してOKが出ればだけど……」

と、私は赤い携帯電話を取り出し家へと電話をかけた。お母さんの返事はOKとのこと。というわけで私たち三人は私の家でお昼ご飯を食べることになった。

「おお、これはこれは上杉うさぎと直参じきんの方々、久しぶりじゃのう」

家ではお爺ちゃんおかちの御徒泰蔵たいぞうが満面の笑みを浮かべて迎えてくれた。

しいちゃんの実家は上杉家うさぎの領地であった米沢よねざわ。はるちゃんのご

先祖は私の家と同じく直参旗本はたもとの出であったからである。どちらも今から百四十年前の戊辰戦争ぼしんせんそうの折には幕府側として戦ったため、お爺ちゃんにとっては味方なのだ。これが敵方のだったらものすごい剣幕で老若男女問わず叩き出すところだ。幸い私の親友たちにはそういう人はいない。

ところが同じ敵方であっても鹿児島県かじしまだけは許すのでややこしい。これは私たちのご先祖様が鹿児島出身さいごう たかもりの西郷隆盛さんにお世話になったからで（詳細は「パート1の第十三話」を見てほしい）、敵方であれ、お爺ちゃんとお父さんの御徒寛太おかち かんたは神のように崇めている。「これは今度うちで販売しようとおもっている菓子なのじゃが食べてみるかね」

お爺ちゃんは店のほうから桃色の和菓子を持ってきて居間に座る私たちに差し出した。

「えっ？ 試食させてくれるんですか？」

はるちゃんの目が輝いている。

「おうおう、味方には不義理をしないのがわしの矜持での」

なんだか分からないけど、味方してくれた方の子孫にはとことん優しくするようなことを言っているのだろう。

「おいしい……、甘さの中にほんのりと桜の味がして、まさにこれからの季節にぴったりのお菓子ですね」

しいちゃんが右頬を手で押さえて笑顔を浮かべる。私はすでに食べているけど、身内であること抜きにして美味しい。

「そうじゃろそうじゃろ、これからは桜の季節だからの」

お爺ちゃんの目じりが下がる。

「こんなに美味しい和菓子を作ってくれる職人さんにかっちゃんは今来るのですか？」

はるちゃんが勢いよく右手を上げる。

「えっ、なんで私が？」

「だってかっちゃん長女でしょ。あ、誰かお婿さん迎えるのか」

「ああ、そうか二人はまだ知らなかったね」

私にはお兄ちゃんがいる。名前は御徒清太。おかち せいたただ今我が家を継ぐべく愛知県の親戚の家へ修行中だ。あいち

「愛知の家は本家で、分家のわしらは跡を継ぐために何年も修行に出たものじゃよ」

かつて私のご先祖様は太保を名乗っていたが、徳川家康公が江戸に幕府を開く際に長年の功に報いるために私のご先祖様に御徒町に屋敷地を与えた。それに感激したご先祖様は苗字をその土地の名前を取って御徒と名乗り、それから四百年後、御徒真知という山手線の駅名の名前を持つ私が子孫にいるわけである。

「清太はこの春家に帰ってくるでの、楽しみでならんわ」
「へー、お兄ちゃんやと帰ってくるんだ」

私の家でお昼ご飯を食べた私たちはいいちゃんの家に戻り業者さんとともにトラックに荷物を積んだ。そして新居に行って荷解きをして引越し完了！……と思ったら、結衣ちゃんの荷物がちょうど届き、私たちはその荷解きもしなければならなくなった。

おかげで全ての作業が終わったのは午後十一時で、私たちはダンボールに囲まれた部屋で眠りにつくことになってしまった。

第五話 結衣ちゃん、上京

しいちゃんの引越しの二日後――。私しいちゃんはるちゃんと私の妹、真耶まやの四人はまだ肌寒い陽気どうきようの東京駅を歩いていた。

今日はしいちゃんの妹の結衣ちゃんが上京する日だ。私たちの通う文京大学を受験し目出度く合格。このたび東京でしいちゃんと暮らす事になったのである。真耶とは同級生になるわけだ。

真耶は身長と髪型は私と同じくらいだけど、目がものすごく細い。これはお母さんに似たのだ。

そんな真耶の顔を眺めているうちに、新幹線の改札口から「お姉ちゃん」の声とともに、巨大版しいちゃんならぬ結衣ちゃんの姿が見えた。しいちゃんと結衣ちゃんの身長差は二十センチほどある。これはしいちゃんがお母さん似で、結衣ちゃんがお父さん似であるからだ。

しかし顔のつくりは姉妹だけにそっくりである。ほんとにしいちゃんの背を高くしたようだ。格闘技好きという点も似ている。ただししいちゃんはボクシングで、結衣ちゃんはキックボクシングという違いはあるが。（二人がどちらの競技が優れているかをめぐって、私の家の庭で喧嘩したのは記憶に新しい）

「おーい、結衣ー。こっちこっちー」

しいちゃんがその小さな体をびよんぴよん飛び跳ねて妹に自分の居場所をアピールする。

「結衣ちゃん、合格おめでとーう」

しいちゃんを除く私たち三人は普通に手を振ってアピール。

「みなさん、どうもお久しぶりです」

大きなバックを肩にかけた結衣ちゃんは私たちの前まで来ると、丁寧にお辞儀をした。

「お久しぶり、結衣ちゃん。去年の夏以来だね」

私は結衣ちゃんの疲れをねぎらう意味もあって、彼女のバッグを

持とうと手をかけたが

「あ、大丈夫です。ものすごく重いんで、きっと私かお姉ちゃんじゃないと担げませんから」

と、断られた。いったい中に何が入っているんだろう？

「あー、うん……。それならやめておくよ……」

私はバッグを眺めながら手を引いた。バッグはもう張り裂けんばかりの量の荷物が入っているようだ。

「結衣ちゃん、我がダンスサークルへようこそ！」

私に代わってはるちゃんが結衣ちゃんの両肩を思い切りたたく。

「こらー、はるちゃん。勧誘はまだ早すぎる」

私ははるちゃんの肩をつかんで結衣ちゃんから引き離れた。

「結衣ちゃんと同じ大学に入れて渡しうれしいよ」

結衣ちゃんとはるちゃんの間我真耶が入る。

「わーい、真耶ちゃん。会いたかったよう」

結衣ちゃんは感激の声を出して真耶に抱きついた。二人は去年の夏に出会ってからすっかり仲良しさんだ。夜九時までの長時間携帯電話で話すのはしょっちゅうだ。二人は白いお父さん犬に感謝しなくてはならない。

「さて、結衣。家へ案内するよ」

しいちゃんが私たちを促したとき

「キヤーッ痴漢ー！」

と、女性の悲鳴が駅の構内に響いた。

「痴漢！？」

声のするほうを振り向くと、眼鏡をかけた薄ら禿げの中年男性が後ろを振り向きながらこちらへ走ってくる。彼が痴漢だろう。

「私に任せてください」

結衣ちゃんが私たちの前へ出ると、担いでいたバッグを片手で持ちそのまま

「そいやっ！」

と、投げた。バッグは緩い放物線を描き、痴漢の腹部を直撃。

「あべしっ！」

痴漢は悲鳴を上げて倒れた。「あべしっ！」とは言ったものの、内臓が飛び出たりしていないので安心してほしい。でも骨の一本か二本は折れているかもしれない。

「さすが結衣、力をつけてきたわね」

しいちゃんが倒れた痴漢を片目に結衣ちゃんを見上げる。

「そりゃキックボクシングは腕の力も必要だからね」

得意げに応える結衣ちゃん。この姉妹どこまで鍛えるつもりなんだろう？

「ところで米沢はどう？ 変わりない」

山手線へ続くエスカレーターに乗ったしいちゃんが後ろの結衣ちゃんに尋ねると、結衣ちゃんはよくぞ聞いてくれたと言わんばかりの表情で

「もう観光客でいっぱいよ。さすが今年の大時代劇ドラマに選ばれただけあるわ」

大時代劇ドラマとは国営放送局が毎週木曜夜八時に一年間を通して放送するドラマのことである。今年のドラマの主人公は直江兼続なおえ かねつぐが選ばれた。一昨年の桂小五郎かつら ごとろう、去年の篤姫あつひめに代わり三年ぶりに戦国時代の武将が主人公に選ばれたことになる。

その直江兼続が米沢を治めた上杉家の家老であるため街中をあげて観光客を誘致しているのだそうだ。

「お姉ちゃんの好きなお船せんも売り切れちゃって、今日は持ってこれなかったよ」

お船せんとは米沢産の日本酒のことである。これに酔っ払ったしいちゃんがどうなるかは既にご存知の人も多いだろう。

「地元が盛り上がるのはいいけど、こういう悲しい目に遭うと思うと考えものだね」

しいちゃんはお船が売り切れたことを心底残念そうなそぶりを見

せた。

エスカレーターを乗り切ると、ちょうど緑色のラインの入った山手線の車両が入ってきた。これに乗って最寄りの日暮里駅にっぽりまでは十分かかる。

東京駅から山手線内回り電車に乗って二駅目は秋葉原駅あきはばらだ。

「ここっていろいろ萌えー、ってなるスポットがたくさんあるんですよね」

結衣ちゃんなんだか楽しそうだ。

「結衣ちゃんは萌えが好きな人？」

「好きっていうか……、メイド服着るのって憧れませんか？」

姉であるしいちゃんは家の近所にある喫茶店「御団子おだんご」でメイド服を着ている。妹がそれに憧れるのもおかしくない話だ。

そんな話をしているうちに次の駅だ。

「御徒先輩の駅ですね」

二年前の私ならこの結衣ちゃんの発言に腹が立つところだが、今は平気だ。そう、秋葉原の次は御徒町。

そんな御徒町から三つ目の駅が目的地の日暮里駅である。ここからしいちゃんの家は歩いて五分。谷中銀座商店街やなかぎんざをちよつと脇に離れたところにある三階建てアパートの二階、一番右側だ。

「はい、ここが私と結衣の家だよー」

しいちゃんの家は玄関に入るとまずはガスコンロが二つあるキッチンが出迎えてくれる。キッチンを右に行くと風呂とトイレ。左に行くと部屋が二つ。片方がしいちゃん、もう片方が結衣ちゃんの部屋だ。

「うわー、このくらいの広さのキッチンなら料理が十分できそうだね」

結衣ちゃんが感激の声を出す。たしかに以前のしいちゃんの家よりキッチンが少々広くなっている。

「ちゃんと自炊できる家を選んだもん、当然でしょ」

しいちゃんは結衣ちゃんの部屋に続く扉を開けた。

「ほら結衣。届いた荷物はすでに解いているからあとは自分でやって」

「はい、ありがとうお姉ちゃん。真耶ちゃん手伝って」
「うん、分かった」

結衣ちゃんと真耶は扉の向こうへと入っていった。仲良しなお二人さんならきつとよろしくやってくれるであろう。

「さて、私たちは晩御飯でも作りましょうか」
しいちゃんは両手を叩くと冷蔵庫を開ける。中身は結衣ちゃんが来たときのために昨日買っていたのだ。

「こういうときは簡単にみんなで食べられる鍋が一番だね」
三月だけど時々寒い日があるから、まだ鍋もいけるはずだ。

「そう来ると思ってちゃんと鍋も出しておいたよ」
さすがしいちゃん。用意がいいことで。

「よし、みんな鍋だー。かつちゃんが材料切って、しいちゃんが味付けして、私が食べる役ね」

「はるちゃんだけ何もしていないじゃん！」
はるちゃん、徳川家康公じゃないんだから……。

「分かった分かった、私も何か作るからそれで勘弁して」
鍋のほかに何か一品作ろうと冷蔵庫を開けるはるちゃん。こうして結衣ちゃん上京一日目の晩御飯は賑やかなものになりましたとき。

第六話 真知の誕生日

目覚まし時計のけたたましい音に私は上半身を起こして左手で時計を叩く。目の前には日めくりカレンダー。四月四日の暦をめくると今日である四月五日が現れた。

「そうか……」

頭は半分寝ているけど、今日が何の日だか分かる。

「私の誕生日だ……」

今年も私の家で誕生パーティが行われる。今年は誰が来るのかな。去年の誕生日と比べて友達が増えたから、居間に入りきらないかもしれないな。

……なんてこと考えてしいちゃんとはるちゃんだけだったらものすごく寂しいけど。

誕生日の私にはやることが一つある。それはパーティとは関係ないけど私の年中行事の一つになっている。早速それが行われる大学に行かないと。みんなとそこで待ち合わせしているからね。

渡されたプリントの誕生日欄に「四月五日」と大きく書く。その他全ての項目を書き終えたところでそのプリントを受付の方に渡す。もらった人は十中八九私に向かって

「おめでとうございます」

と、言う。私のほうもこれで三回目だから慣れた口調で

「ありがとうございます」

と、頭を下げる。文京大学では四月五日が女子学生の身体測定の日と決まっているのだ。

身長と体重を測り終えて中庭に出ると

「あ、かっちゃんが来た」

と、しいちゃんの声。しいちゃんだけではなくはるちゃん、結衣ちゃん、かわちゃんこと河原真値^{かわら まち}、亜由美、明石先輩の六人。女子

メンバーが全員勢ぞろいである。

かわちゃんは私より一学年下の後輩で、目が大きくそして、少々つりあがっている。入学して早々に文化祭実行委員に入り文化祭を作り終えたいまは自治会の書記を務める事になっている。

「男性メンバーは先に谷中銀座へ買出しに行っているよ」

はるちゃんが楽しそうに声を上げる。

「えっ、誰が来るの？ はるちゃん」

私が訪ねるとはるちゃんは右手を腰に当てた。あ、なんか嫌な予感。

「そんなの知っているわけ無いじゃない」

やっぱり……、誰が来ているのかその全員を把握しているのはしいちゃんだけのことだ。

「まあ大体想像はつくと思うな。それじゃあかつちゃんの家に向かう」

しいちゃんは顔を微笑ませながら、歩き出した。まあ誰が来るかはいづれ分かることだから、しいちゃんの後に続きますか。

団子坂を下ると交差点の向こう側に知っている顔を発見。

「お、今の会長と前の会長と会計係だ」

向こう側ではタカビーと姉小路前会長、そしてかわちゃんの彼氏でもある、けーまこと大井桂馬おおいけいまがそれぞれビニール袋を手に提げていた。

「あの三人が男性の参加メンバーだよ」

タカビーとけーまは予想の範囲内だったが、姉小路前会長まで来てくれるとは思わなかった。

「え！？ 先の会長さんも来ているの」

はるちゃんが声を弾ませながら前に出る。

みんなが交差点の向こう側の三人を見ているが

(……?)

その中になにやら異様な視線があるのを私は感じた。しかしそれ

はほんの一瞬のことだった。

「あーあ、女の子ばかりのほうが楽しいのになー」

「明石先輩、主張は分かりましたから私に抱きつくのはやめてくれませんか」

振り向くと明石先輩が後ろから亜由美に抱き着いている。

「えーっ、だって亜由美抱き心地いいじゃん」

明石先輩がさらに力を強める。

「そりゃそうですけど……」

亜由美は否定することを知らない。

向こうもこちらの私たちに気がついたようだ。向こうの信号が青になっても渡らずに、私たちがそちらへ来るのを待っている。

やがてこちらの信号が青となり、女性陣と男性陣が合流した。私も入れて全部で十人か。家に入りきれるかな。

「そういえば、明石先輩は前の会長さんに会うのは初めてでしたよね」

確かこの二人が出会うのは今までなかった、少なくとも私は見ていない。

「そんなことはないよ、サークルの部長として会長に会うことはしよっちゅうあったわよ」

明石先輩は亜由美に抱きつきながらいつもの笑顔で答える。サークルは自治会に部室として借りる部屋の更新などいろいろな手続きをするらしい。

「あー、それじゃあもう顔なじみなんですネ」

「顔なじみ……」

明石先輩の笑顔にちよつと影が差す。

「『顔なじみ』とはおかしな表現だが、まあよく顔を合わせることにはあったということだ」

前の会長改め姉小路先輩が口を開いた。

「そうね、そういうことよ」

明石先輩の腕の力が強くなる。

「あ、明石先輩。それ以上は痛キモです」

明石先輩の腕の中の亜由美が悶えた。

我が家の居間はたいしたもので、真耶を加えた十一人をちゃんと収容できた。私から時計回りで私、しいちゃん、かわちゃん、けーま、真耶、結衣ちゃん、タカビー、姉小路先輩、はるちゃん、亜由美、明石先輩の十一人でできた円の中央には、男性陣が用意した誕生日ケーキと料理、そしてうちで作った和菓子。ケーキと和菓子には合わせて二十一本のローソクが刺さっている。

「それじゃあかつちゃんの誕生日パーティを始めます」

しいちゃんが両手を上げて小さく左右に動かす。それにあわせてみんなが「ハッピーバースデーの歌」を歌い始めた。

「かつちゃん、二十一歳おめでとー！」

みんなの拍手の中、私はケーキと和菓子に刺さったローソクの火を吹き消した。さすがに一度に全部は消せないで、四回に分けてローソクの火に息を吹きかける。

「いやー、かつちゃんも二十一かー。そろそろ女子大生が好きになるお年頃だねえ」

「そんな風になるの、明石先輩だけですよ」

明石先輩はあの交差点からずっと亜由美にくっついていて。そうしてなくてはいられないかのよう。まるで毛布を肌身離さず持っていないといられない少年のようだ。男がいるから落ち着かないのだろうか。そういえば明石先輩と男性が一緒にいるのを見るのは三年目にして初めてだな。

はるちゃんや亜由美に尋ねようにも明石先輩がいる。私は左隣に座るしいちゃんに小声で話しかけた。

「ねえしいちゃん。明石先輩って男の人嫌いなのかな……」

しいちゃんは明石先輩を一瞥すると私の耳元に口を近づけた。

「そんな話は本人やはるちゃんからも聞いたことないけど、そうかもしれないね。明石先輩には悪いことしたかな……」

今回の誕生日の幹事役だけに少し責任を感じているようだ。

「かわいそうに亜由美はすっかり明石先輩の盾の役になっているね」
男から出てくるフェロモン(?)を自分に浴びないように、亜由美でしっかりガードしている形だ。

一方のはるちゃんかというと、姉小路先輩と楽しく話をしている。きつとまた歴史の話でもしているのだろうか。

かわちゃんとけーまは周りそっちのけでラブラブな二人の世界に入っているし。真耶と結衣ちゃんとタカビーは初対面だけど、話は弾んでいる様子。タカビーの見せる力こぶに感心の声を上げている。「よかった、独りぼっちになる人がいなくて」

みんなの様子に私はオレンジジュースの入ったコップを片手にほっと一息ついた。

「かつちゃん、今日はかつちゃんが主役なんだから、そんなこと気にすることはないよ」

しいちゃんが私の肩を小さく叩く。でも主役だからこそ「みんなに楽しんでもらいたい」という気持ちがあっっておかしくはないんじゃない。

まあしいちゃんにはしいちゃんの立場があるから、と私は反論するのをやめて、フォークで目の前のケーキを切り分けた。私がチーズケーキの次に好きなチョコレートケーキだ。

結局最後まで明石先輩は亜由美に抱きつきっぱなしだった。パーティがお開きになり、明石先輩がやっと離れたのを見て亜由美に「明石先輩の男嫌い」について聞いてみた。

「男嫌い？ 特にそんなのは本人から聞いていませんけど……。男にあまり良い感情を持っていないのは言動の端々から感じられますよ」

とのこと。明石先輩は始終いつもの笑顔だったけど、内心は複雑だっただろうな。

第七話 文京春の勧誘祭り

四月の暖かな光がバスを降りたばかりの私たちに降り注いでいます。今日はいい天気です。

いつもより口調が違いますか？ みなさん、おはようございます。私、御徒真知の妹の真耶です。

パート1のときほんのわずかだけ、お姉ちゃんと伊井国先輩の視点変換がありました。それをこのシリーズでもやってみようとのこと、第一弾に私が選ばれました。

ま、そんな作者の都合は置いといて。今日から授業がスタートなのです。もっともお姉ちゃんいわく、四月はお試し期間なのだそうです。

さて、バスを降りて私とお姉ちゃんと、結衣ちゃん、椎名先輩の四人は、正門に向かおうとしているのですが、なにやらその正門が騒がしいです。

「新人生以外の方は裏門を通ってくださいーい」

詰襟の制服を着た方が黄色いメガホン片手に私たち学生に呼びかけています。

「あー、しいちゃん。今日はやっぱり」

「そうだった。あの日だね」

お姉ちゃんと椎名先輩はなんだか理解したようです。互いに笑いあいます。

「それじゃあ真耶、結衣ちゃん。私たちは裏門に回るから二人で正門入ってね」

「結衣、怪我人をだすんじゃないわよ」

「えっ!？ 何々？ お姉ちゃんたち行っちゃうの？」

結衣ちゃんが慌てて裏門へ回る二人を捕まえようとしています。二人は数歩歩いたところで、立ち止まって振り返ると、真剣な表情で「いい、二人とも。昔の人はこうだったのよ」

「『女は一本道、決して引き返してはならない』って」

お姉ちゃんと椎名先輩の声がハモります。お姉ちゃんがアルトで椎名先輩がソプラノです。というかそのセリフは昔の人の言葉じゃなくて去年できたばかりの言葉です。

「と、いうわけで二人とも他の門から入っちゃだめよー」

そう言うとお姉ちゃんと椎名先輩は裏門への道を歩いていってしまいました。

「この先にいったい何があるというの……」

「新人生は必ずこの門を通ってくださいーい」

メガホン持つ人の前で立ちすくむ私たちですが、立ち止まっただけでは話が進みません、ここは覚悟を決めて前に進むしかないです。

「結衣ちゃん、何があるか分からないけど行ってみよう」

私は背の高い結衣ちゃん（私との差は十センチあります）の肩を叩くと、歩き出し、正門の前に立ちました。

「こ、これは……」

正門を抜けた坂道では様々な格好をしたたくさんの人たちが。そこを通る人（おそらく私たちと同じ新人生でしょう）に手を伸ばして、ときには腕を掴んだり、ときには服や髪を引っ張ったりしていました。これをなんて例えればいいのでしょうか。「新人生の流し素麺」でしょうか。「新人生のバーゲンセール」といったほうが皆さんの想像がつきやすいでしょうか。

「思い出した……。これは『文京春の勧誘祭り』だ」

隣の結衣ちゃんのこめかみから汗が一筋流れ落ちます。そこまで言われて私も思い出しました。これは文京大学の全部活・サークルの皆さんが新人生を勧誘しているのです。「春の勧誘祭り」と言っても絵皿がもらえるわけじゃないですよ。

「結衣ちゃん、どうしよう……」

この人ごみの中に入ったらせつかくの服や髪がぐちゃぐちゃになってしまふのは明白です。それならまだしも、服がやぶけてしまふ

そしてベルトコンベヤーは明石先輩を結衣ちゃんの前まで運ぶと彼女を降ろしました。その動きの正確さに私は声を吞んでしまいました。

「結衣ちゃん、待っていたよ。私たちのサークルに入ってくれるんだよね」

「え、ええと……特にその件については決めていませんけど……」

明石先輩の身を乗り出しての勧誘に結衣ちゃんはたじろいでいます。知り合いなのでさっきのように蹴りで威嚇するわけにもいかないうです。

「決めてないならなおさら、入ろうよ！ 大学生活を楽しもうよ！」

「え……、あ……、はい……」

結衣ちゃんは明石先輩の迫力に負けてしまったようです。「はい」と言っしまいました。

「やったー、結衣ちゃんゲットー！」

明石先輩は満面の笑みで結衣ちゃんに抱きつきました。

「ところで、真耶ちゃん。真耶ちゃんが入ってくれるの？」

明石先輩の次のターゲットは私になりました。

「えーと、私は運動がそんなに得意じゃないので……」

去年の文化祭で明石先輩主催のダンスショーを見ましたが私にはとてもそんな素晴らしい動きはできません。

「運動が得意じゃないなら是非うちのサークルに」

「いや、私たちのサークルよ！」

私の後ろから何人もの人の声が聞こえてきます。きっと文科系のサークルなのでしょう。もともと入るなら文科系と決めていたのでこれはいいタイミングかもしれません。しかしこんな風に強く迫られると困ってしまいます。

「結衣ちゃん、とりあえずこの場を離れようよ」

私は背伸びして結衣ちゃんに呟きました。これ以上ここにいたら例え結衣ちゃんがいたとしても、私はサークルの人たちから取りたい放題されるような気がしたからです。

「そうだね、真耶ちゃんがサークル入るかどうかは真耶ちゃんがゆっくり考えて決めればいいことだし。私が言うのもなんだけどこのプレッシャーに負けちゃだめだよ」

「私がいつプレッシャーかけたというのよー」

明石先輩が結衣ちゃんに抗議します。

「明石先輩……、それ以上近づくと……」

結衣ちゃんが右ひざを上げました。明石先輩を含め再びサークルの人たちがしりぞきます。

「よし！今のうちに脱出しよう。明石先輩、手続きは今日の授業の後で」

後者への道ができたので、すかさず私たちはそこへ向かいます。

「絶対来るんだよー」

校舎内は外とはうってかわって静かでした。中までお祭り騒ぎだったら授業に悪影響が出ますしね。そういう配慮がなされているのでしょう。

「ところで、真耶ちゃんは文科系のサークル入りたいって言うたよね」

「うん、できれば絵が描けるところがいいかな」

お姉ちゃんと私は姉妹なので似ているところもあれば違うところもあります。絵に関してはその一つです。お姉ちゃんは絵が全くの下手なのですが、私は小さいころからクレヨンや鉛筆でいろんな絵を描いてみんなから褒められていました。

「絵が描きたいのなら、うちに入ってもらえませんかー」

いきなりの後ろからの声に私たちは身構えてしまいました。結衣ちゃんに至ってはひざが出ています。

「外の勧誘祭りに圧倒されちゃって……」

声をかけた人は薄い眼鏡をかけた女性でした。髪が乱れているのは外の騒ぎのせいでしょうか。新人生でもないのにそこから逃げてきたようです。きつとアグレッシブな行動が苦手なのでしょう。

眼鏡をかけているせいでしょとかどこか知的なイメージを感じます。

「自分の好きなイラストをひたすら描いているサークルです。文化祭にはそのイラストの発表会があります。大きな活動としてはそれだけです。気軽に参加できていいと思うんですが……」

申し訳なさそうに話すこの人を見て私の中で「なんとかしなきゃ」という気持ちが沸いてきました。この辺はお姉ちゃんと似ているところですよ。

「え、えっと……、プロみたいに絵が描けるわけじゃないんですけど、そんな私でよければ……」

「えっ、いいんですか？　ありがとうございます。よかったー、今日は一人もゲットできないかと思っていたのに。助かりました」

サークルにとって新入生が入らないのは死活問題だとお姉ちゃんたちから聞いています。私少しはお役に立てたようです。

というわけで、結衣ちゃんは明石先輩と伊井国先輩のダンスサークル。私はこの眼鏡の方のイラストサークルに入ることになりました。

第八話 部室のお掃除

「やんちゃ將軍江戸日記」のテーマソングがけたたましく流れる。私はその音源を求めて布団から手を伸ばす。あ、私って御徒真知のことね。

どうやら音源となる携帯電話は私の手を伸ばせる範囲の中に無いようだ。しょうがないや、と私は布団を跳ね除ける。

机の上にあった携帯電話を取って通話ボタンを押す。

「はい、もしもし」

『あーっ、私、私ー。かっちゃん大変だよ。大変だよ』

電話の相手ははるちゃんだった。何やら慌てている様子だ。

「どうしたの、はるちゃん。何が大変なの」

『とにかくいいから大学に来て、早く!?!』

「大学う? そこに行けば何か分かるのね」

私の家から大学まではバスで五分の距離だ。

『そうだよ、できれば真耶ちゃんを連れてくると助かるなー』

「分かった、分かった。真耶も連れてくるから一時間くらい待っていて」

『分かった。絶対来てよー』

バスで五分だけど、行くまでにいろいろ準備がある。私はまず始めに真耶を起こしに彼女の部屋へと向かった。

バス停にはしいちゃんと結衣ちゃんがいた。

「あれー? かっちゃんもはるちゃんに呼ばれたの?」

しいちゃんはバスが早く来ないかと背伸びして道路を見ている。

「しいちゃんこそ……、一体はるちゃんに何があったんだろう」

四人が呼ばれるなんてよっぽどのことなんだろうな、と私は近づいてくるバスを見ながら思った。

「はあ？ 部室を掃除する！？」

大学に着いた私たちを待っていたのは手ぬぐいを頭に巻いたはるちゃんと浅野先輩の二人だった。これから部室の掃除をするのだが、メンバーが二人しか来なかったのだという。

「つまり、その手伝いのために私たちが呼ばれたってこと？ 全然大変じゃないじゃん」

私はあきれた声をあげる。

「『部室の掃除』というサークルの仕事に現役メンバーが結衣ちゃん一人しか来なかったことが重要な問題なのよ。部長としての私の影響力が無いってことよ」

「まあ前触れもなく召集をかけた遙にも責任はあるけどね」

浅野先輩が興奮しているはるちゃんをなだめる。浅野先輩——フルネームは浅野いのり——一昨年のダンスサークルの部長さんだ。髪型はショートヘアで背ははるちゃんよりも高い。今は大学を卒業して「お台場テレビ」のアナウンサーに就職した。三ヵ月後はあの長い提供読みをしなければならぬ。今日はたまたま休みだったので、自分の荷物の整理に来たのだそう。

「明石先輩もいないね」

まあいないほうが抱きつかれないんで仕事が捗るんだけど。

「明石先輩はバイトよ」

はるちゃんは唇を尖らせながら答える。

「あの人一体何のバイトしているんだろう」

「『子供たちに夢を与えるバイト』としか聞いていないけどね」

しいちゃんが首を傾げる。その「子供に与える夢」を壊したくないため、私たちにも詳しいことは教えてくれない。亜由美はなぜか知っているようだけど教えてくれないし、一体何をやっているんだろう？

「まあまあいない人のことは置いといて、さっさと掃除を始めましょう」

「はい」

浅野先輩の声に私たちは答えた。

「と言っても、この八畳位の部屋で六人必要なのかな……」

「かつちゃん、文句言わない。来たからにはやってもらうわよ」

私の眩きかはるちゃんに聞こえてしまったようだ。しょうがない、ささっとやって帰るとしますか。

「うん？　これは……」

私が手にしたのは一冊のアルバム。その一枚目の写真は白い学生服を着たはるちゃん、明石先輩、浅野先輩が人前で踊っている姿が撮られている。

「あー、これなつかしー、一年のとき代々木公園で踊ったやつだー」
代々木公園では歌手志望の人たちが路上ライブをしたり、若手のお笑い芸人さんがコントや大喜利をやったりしている。それらの全てが無料で見られるので、ちよつとした時間つぶしになるのだ。

「へー、あの公園で踊ったりしたんだー」

「そう、三人で『そいや！』『そいや！』と叫んでね」
はるちゃんが次のページをめくる。三人が同じ格好をしているので、代々木公園の写真かと思いきや。

「ああ、これは渋谷のセンター街で踊ったときの写真ね」

「センター街でも踊ったの？」

センター街は普通に車も通る道で歩行者天国でもなんでもない。

「もちろん警察の許可は取ったわよ。車が来たら端に避けたし」

「へー、じゃあ次は……！！」

ページをめくる私のこめかみに激痛が走った。

「あなたたち……、写真に気を取られていないで掃除しなさい！」

浅野先輩が私とはるちゃんの間に入って必殺技「アイアンクロー」を繰り出す。隣のはるちゃんは同様「痛い痛い」ともがいている。

「これらの写真ももったいないけどある程度整理しておかなきゃね」
両手で私たちのこめかみを押さえながら浅野先輩は写真を横目に見た。

「うわー懐かしい。これ、遥が一年生のときじゃない」

浅野先輩……、写真を見てしみじみ思うのはかまわないんですが、手を離してはくれませんか？　こめかみが……痛いです。

「浅野せんぱーい、これも捨てていいですかー？」

「あー、はいはい。ちよつと待ってー」

真耶のおかげで私は浅野先輩の攻撃から解放された。実際はたいしたこと無いのかもしれないけど、ものすごく長い時間頭を締め付けられていた気がする。

「というわけで、写真に気を取られず写真の整理をしましょう」

とは言っても、知らない写真かどうかを区別するにはやっぱり写真をしっかり見なければいけないわけで……。

「ねえねえはるちゃん、これいつの写真？」

「うわー、懐かしい。渋谷で踊った次の月だね」

と、和んでいる私の背後に殺氣が！

「……はるちゃん、これもつたいないけど処分しようか？」

「……うん、そうだね。もう古いし……」

あ、殺氣が遠ざかっていった。あーよかった。二度も「アイアンクロー」を食らうのは勘弁だからね。

アルバムの写真たちをこうして見るとはるちゃんたちが今までどんな活動してきたかが手に取るように分かる。ダンスのおかげで充実した日々を過ごしていたんだろうな、って。

だからって私が充実していないわけじゃないよ。私は私なりに去年は文化祭実行委員やったし。充実した日々を送っていたんだから。とりあえず、一昨年の写真はある程度何をしていたか分かる枚数は残しておくことになった。全部処分しちゃ一昨年何やっていたか分からなくなるからね。その前年のアルバムを参考に、いらぬものに残しておくものを分別する。これで幾分かアルバムはスリムなものになった。

「さーて、次はいったんコタツを外に出して畳を綺麗にするわよー」
浅野先輩の指示の元コタツを部室の外へと運び出す。畳はそれまで掃除されていなかったせいかちよつと黒ずんで見える。このコタ

ツに入ってみんな大富豪とかババ抜きとかやっていたんだろうな。って勝手な想像を浮かべる。

「結衣ちゃんがバケツに水を汲んでくるから、そしたら雑巾で拭きましよう」

畳を雑巾で綺麗にしたところで、コタツ机を戻し、布団は押入れにしまう。今は四月、もうコタツに入っている季節じゃないからね。

「さーてと、最後は……」

と、はるちゃんの視線の先には様々な本やノートの類が置かれている一山だった。

「明石先輩の私物かー」

「さすがにこれは勝手に捨てるわけには行かないね」

しいちゃんがノートの一冊を手にする。

「とりあえず、綺麗に教科書は教科書、ノートはノートと分けておきましょう」

「了解です、浅野先輩」

すっかりみんな浅野先輩の指示に従っている。部長ははるちゃんなのに……、部員は結衣ちゃん一人とはいえリーダーシップを発揮できていない気がするなあ。

「ちよっとはるちゃん。すっかり浅野先輩におんぶにだっこ状態じゃないのよ」

私がひじではるちゃんの右手を小突く」

「う……うん、私もまずいかなーって思っていたんだけど、今日くらいはいいかなーとも思ってた」

はるちゃんも自覚はしていたようだ。

「まあ後輩や部員さんの前ではしっかり部長らしいところ見せてよ」「はい、了解しました」

そんなことを話しながら整理していた明石先輩の教科書から紙切れが一枚畳の上に落ちた。

「ん？　なんだろこれ」

紙切れの正体は写真だった。そしてそこに写っていたのは――

第九話 恋をしている

明石先輩の教科書から落ちた一枚の写真。それを拾ってみた私はその写っている人物を見て驚いた。

「こ、これって!？」

そこに写っていたのは明石先輩ともう一人、姉小路先輩——。二人とも笑顔でピースサインをしている。

「どうして明石先輩と姉小路先輩が二人っきりで写真に写っているの!？」

だって明石先輩って女の子好きじゃない。可愛い女の子見たら飛びつくし。ほら、それに私の誕生日のとき男の人がいたからちよつと機嫌悪そうだったし。

「あー、明石先輩と姉小路先輩だー」

はるちゃんの隣にいるしいちゃんがのん気そうな声を上げる。

「いやいやしいちゃんのん気になっている場合じゃないでしょ。あの明石先輩が男の人と一緒に写真に写っているんだよ。しかも集合写真じゃないんだよ、ペアで」

「どうして二人が一緒に写っているの……?」

はるちゃんも信じられないような声を上げている。

「……三人とも、その写真を見たのね」

背後から浅野先輩の声がする。私たちは見てはいけないものを見てしまったのだろうか? 明石先輩の黒歴史を——。

「……今まで話す機会が無かったし、話すことでもないから言わなかったんだけど。そこに写っている二人、一年生のときは付き合っていたのよ」

え? 明石先輩と姉小路先輩が付き合っていた!? 明石先輩

が男の人と付き合っていた!?

「それは何かの間違いじゃないんですか?」

例えば西から昇ったお日様が東へ沈むことはあろうとも、明石先輩

が男の人と付き合っていたなんて！

「残念だけど、事実よ。同じ学部ってこともあってかなり早い段階から付き合っていたみたい。別れたのは年明けてすぐかな」

少なく見積もっても半年は彼氏彼女の関係でいたことになる。

「以前真奈美がサークル活動を両親に反対されて家出してこの部室に住み着いた話をしたでしょ。その時部室の他に、姉小路君の家にも泊まっていたのよ」

「家にも泊まった!？」

彼氏彼女の二人が家に泊まったと言うことは……。

「ほにゃらとかふにゃらとかしたんだ!」

「何よ? ほにゃらとかふにゃらって」

浅野先輩が首を傾げる。ああそうか、浅野先輩は知らないか。ほにゃらとふにゃらとは……、ほ……、ほにゃらとふにゃらよ。どうしても知りたければパート1にそういうタイトルの話があるから見なさいよ。

まあとにかく年頃の彼氏彼女が一つ屋根の下に泊まったらほにゃらとふにゃらをするのは確実なわけで、二人とも大学生、子供じゃないんだから。

「————っ!!」

突然、はるちゃんがうなり声を上げて立ち上がると、部室から走り去ってしまった。

「ちよっと、はるちゃん。どこ行くの?」

「私たち、はるちゃんを追いかけます。先輩と、真耶ちゃんと結衣は掃除の続き、お願い」

しいちゃんが「行こう」と私の袖を引っ張る。

「浅野先輩、後をお願いします」

「分かったわ。こっちはあらかじめ片付いていることだし、心配しなくていいわよ。それにしても遥……」

浅野先輩ははるちゃんの突然の行動に対してある程度理由が分かっているようだ。まあ私も予想はついていることだけど……。はる

ちゃんが……、ついに……。

はるちゃんは四号館の屋上にいた。ベンチに座って顔を伏せている。空は薄い雲に覆われていて薄い光が辺りに差し込んでいる。

「はるちゃん……」

私が声をかけると、はるちゃんは少し顔を上げた。目の下が赤く腫れている。

「びっくりしたよ、はるちゃん。いきなり出て行っちゃうから」
しいちゃんがはるちゃんの隣に座る。

「私もどうして走り出したのか分からないよ……」

はるちゃんは小声で呟き、再び顔を伏せた。

「ただ……、姉小路先輩と浅野先輩が付き合っていた、ってことを知ったときからなんというか……悔しいと言うか……悲しいというか……、とにかくこれ以上その話は聞きたくないって、ここにはいたくないって、なって……」

「はるちゃん」

私ははるちゃんの左隣に座ってやさしく彼女の肩を叩いた。

「はるちゃんは恋をしているんだよ」

「!？」

はるちゃんは驚きの顔を私に向ける。

「はるちゃん、前から姉小路先輩の前では楽しそうに話していたもんね、私はたからみていて『ああ、はるちゃんは姉小路先輩のことが好きなんだな』って思っていたよ」

思い返してみれば、そうとしか思えない。

「え……、それじゃあこれが恋なの？」

「そうだよ、はるちゃんの初恋だよ」

しいちゃんが大きく頷いた。

「そうと決まったのならアタックだよ、はるちゃん」

「何をアタックするのだ」

「そりゃ、決まっているじゃな……って!!」

私たちの後ろには姉小路先輩の姿が！

「なんだ、三人でバレーボールでもするのか？」

「……っ！！」

はるちゃんが顔を隠しながら走り出した。

「はるちゃん、待って！ かつちゃん、ここはお願い」

しいちゃんが後を追う。

「え、えーと……」

私の返事を待たずに二人は走り去ってしまった。

「なんだなんだ、校内を走り回るとは感心せんな」

まずい、姉小路先輩に悪い印象を与えてしまう！

「れ、練習ですよ。練習。ほら、このキャンパスってあまり走れる場所ないじゃないですか。だから、脚力をつけるために走る練習をしているんですよ」

確かにこの白山キャンパスで自由に走り回れる場所としたら体育館ぐらいしかない。はくさん

「うむ、走る場所が無いのはもつともだが、事故のないようにしてほしいな」

ああ、よかった。なんとかごまかせた。

「ところで、姉小路先輩はどうして、この四号館にいるんですか？」

今日は日曜日、授業は無いからここににいるからにはそれなりの理由があるはずだ。

「ああ、そのことか。まあ会長職の引継ぎのようなものだ。高見のやつ、早くに就職先が決まった俺に相談役になってほしいらしい」

「へー、就職決まったんですかー、おめでとうございます」

私は期待の目を先輩に見せる。

「なんだその目は……、決まったからと言って君たちに何かをおごるわけではないぞ」

「はい、それは分かっています」

ちえっ、浅野先輩の場合を期待していたのに。

「分かりました。何かをおごる代わりに私の質問に一つ答えてくだ

さい」

「おいおい、論理がおかしいぞ」

この質問の答えによってはるちゃんは傷つくことになる。だけど、傷つくなら早いほうがいい。

「ずばり、先輩は今お付き合いしている人とか、片思いの相手はいますか！」

しばしの沈黙。

「……いきなりとんでもないことを聞くな。これは何かおこったほうが良かった気がするな……」

ああ、いらないます。とんかつ定食なんていらないます。

「だめです、これはもう決まったことなのです」

姉小路先輩は辺りに誰もいないことを確認すると口を開いた。

「……昔はいたが今はそんな相手はいない。……というか、付き合うということ自体面倒なことだと思っている」

昔の相手は絶対明石先輩のことだろう。相手はいないということにはるちゃんにもチャンスはあるってことだけど、付き合うことに抵抗があるのはあまりよくない情報だ。

「ありがとうございます。用事がありますんでそれじゃあ！」

私は姉小路先輩に丁寧な頭を下げると二人を追った。二人の行く先はたぶん部室だろう。

「転んで怪我するなよー」

私の予想通り二人は部室に戻っていた。はるちゃんはこたつ布団に頭を隠している。

「部室に帰ってからずっとこうなのよ」

浅野先輩も呆れ顔だ。

「恋をすると女性は変わる、って言うけど遙もそんな時期が来たのね」

浅野先輩もはるちゃん的心情を理解したようだ。

「どうしよう……、これから姉小路先輩や明石先輩にどんな顔して

会えばいいんだろう……」

布団の中からはるちゃんの呟きが聞こえる。
その悩みは私にも言えることなんだけどね。
しかし、はるちゃんが初恋かあ。

第十話 亜美ちゃん

四月の暖かな日差しが文京大学一号館の廊下に降り注いでいます。おはようございます。真耶です。先日は明石先輩が姉小路先輩と付き合っていたという過去と、伊井国先輩が姉小路先輩のことを好きだと知ってビックリしました。別れたから女好きになったのでしょうかそれとも元から女性が好きなのでしょう、分かりません。ともかくこの件はあの日あの部室にいた六人だけの秘密です。

そんなことを考えながら結衣ちゃんと廊下を歩いていると、後ろから人の気配です。結衣ちゃんの体が硬くなります。

「真耶ちゃん、今日もかわいいねー！」

思えば何とやら……、で件の明石先輩です。結衣ちゃんに抱きつくことと返り討ちに遭うので、私に抱きついてきました。

「あ……、明石先輩……おはようございます」

私は先ほど考えていたことを明石先輩に悟られまいと応えます。

「うん、どうした！？　いつもの真耶ちゃんと違うけど」

まずいです！　明石先輩の感は鋭すぎます。

「明石先輩のつけている香水がいつもと違うんですよ」

結衣ちゃんの声が聞こえます。そういえばいつもと香りが違うみたいです。

「そーなのよー！　さすが二人は気づいてくれたんだね」

明石先輩の頬ずりです。ちょっと痛いですが。でも私の考え事がバレなかったのも、それはそれでいいことです。

構内を授業開始のチャイムが鳴り響きました。この音を聞くと明石先輩は条件反射的に離れます。女の子好きですが、授業にはちゃんと出る真面目な方なのです。

「それじゃあ二人とも、授業サボっちゃだめだよー」

四月はお試し期間なのでサボってもいいんですが、どの授業に出るかを決めるのを考えると出たほうがいいのです。

さて、午前の授業が終わってお昼休み。私と結衣ちゃんはお姉ちゃんたちの待つ食堂へと向かいます。前の授業が七階だったため、四号館地下一階にある食堂へはかなり歩きます。

「エレベーターもいいんだけど、混んでて結局歩いたほうがいいのよ」

とはお姉ちゃんの言葉です。私たちもそれにしたがって移動にエレベーターは使いません。

「まあ体力づくりだと思えばいいのよ」

結衣ちゃんが足取り軽く階段を降ります。結衣ちゃんは体育会系サークルですが、文科系の私には体力は必要ありません。あ、でも締め切り間際に頑張る体力は必要かもしれません。

後ろに人の気配を感じたのはその直後でした。その人が私たちに触れる意思を感じた結衣ちゃんが

「何者」

と、振り向きざまに膝を上げます。当てるつもりはありません、威嚇のつもりです。しかし

「キャッ」

と、その人の手に当たって持っていたチラシが階段の踊り場に散らばってしまいました。

「あっ、ごめんなさい。当てるつもりは無かったです。怪我はありませんか」

結衣ちゃんが相手をいたわる横で私は落ちたチラシを拾います。

チラシを持っていた方は、ポニーテールの目が少々釣りあがった女子学生でした。身長は私と同じくらいでしょうか。

「劇団『神樹』……」

チラシに書かれていたのは劇団サークルのチラシでした。このポニーテールの方は劇団サークルの人のようです。

「えっと……、うちのサークルに入ってもらえないかと思って……」
チラシを拾いながら私たちを勧誘しています。

「残念だけど私も彼女もサークルに入っているのよ」

結衣ちゃんもチラシを拾います。

「そうですか……、新入生なので入ってくれればいいのです
が……」

「あれ？ どうして私たちが新入生だって分かったの？」

雰囲気が見せているのでしょうか。それとも別の要因がある
のでしょうか。

ポニーテールの方は笑いながら答えました。

「だって、同じゼミにいるんだもん、新入生だって分かるよ」

「えっ！ いしざか 石坂先生のゼミ！？」

これは驚きです。偶然にも同じゼミの人と出会うこととなりました。
石坂先生はお姉ちゃんが一年生二年生とお世話になった先生で
す。

「えー、本当？ それじゃあ一緒に演習やろうよー」

結衣ちゃんが嬉々として女の子の手を取ります。お姉ちゃんが言
っていましたが、大学生活は一緒に勉強する仲間が多いほうが得な
のだそうです。まあお姉ちゃんと同じ学部学科なので、最初から有
利なのですが、私自身のネットワークも持っていたほうが得なので
す。

「あー、私誰と演習やるか決まっていなかったから助かったー」

女の子もチラシを持っていないほうの手を結衣ちゃんの手に合わ
せます。みんな仲間が欲しいのです。

「ここで自己紹介を立ち話するのもなんだから、どこかお茶でも
しようか」

「いいねー、私もちょうど喉が渴いたとこだし」

結衣ちゃんと女の子との間でお茶することが決まりました。私は
二人についていきます。

喫茶店について私はココア、結衣ちゃんはアップルシナモンテイ
ー、女の子はカフェオレを注文します。一息ついたところで。

「まずは私から、椎名結衣です。ダンスサークルに所属しています」
結衣ちゃんが元気よく右手を上げます。学部とか学科は一緒だと既に知っているのもので、省略です。

「御徒真耶です。イラストサークルに所属しています」

結衣ちゃんに続いて私はおとなしめに挨拶します。

「結衣ちゃんと、真耶ちゃんね。私は茂木亜美^{もてぎ あみ}演劇サークルに所属しています。将来の夢はアイドルになることです！」

女の子——亜美ちゃん——は周りの人が振り向くほどの大声で自己紹介しました。演劇をやっているだけあって声がよく通るのでしよう。

「へー、アイドルになりたいんだー」

結衣ちゃんがカップ片手に興味津々の目を向けます。

「そう、アイドル。それには大学で演劇の勉強をするのが一番の近道かなと思って。あと文化祭のミスコン。これは必須条件ね」

彼女は自分の将来の夢をかなえるために大学生活をどう利用するか結びついているようです。「大学入ってとりあえず勉強して就職する」としか考えていなかった私とは雲泥の差です。思わず尊敬しちゃいます。

「なるほど、これからのアイドル可愛いだけじゃやっていけないもんね」

「そう、バラエティに出たときのボケとかツツコミとかも勉強しないと」

最近グラビアアイドルがバラエティに出て本職の方以上のボケやツツコミを見せることがあります。私が生まれた頃、よくお父さんが言っている「アイドル」とは大違いです。亜美ちゃんも、その今の時代に合った「アイドル」を目指しているのでしょう。

「というわけで、私大学休むときがあるかもしれないけど、そのときは出席とノートよろしくお願いします」

頭を下げる亜美ちゃんに結衣ちゃんが突っ込みます。

「こら、気が早いぞ。まだ授業が一緒かどうか分からないのに」

しかし、調べてみたら同じ学部、学科、ゼミなので、そのほとんどが私もしくは結衣ちゃんと同じであることが分かりました。

「亜美ちゃん、亜美ちゃんだけでなく私や真耶ちゃんもサークル関係で授業に出られない場合があるからそのときはお願いね」

そうです、亜美ちゃんはアイドル活動（？）で忙しいかもしれません。が、私たちもサークル活動で忙しいのです。

「分かっているって、三人で協力しよう」

こうして私、結衣ちゃん、亜美ちゃんの三人で協力して授業に立ち向かうことになりました。三人揃ったので、誰かがヘタレ役、突っ込み役、不思議ちゃん役と決めなくてはならないのでしょうか？その必要は無いですね。

こうして新たに茂木亜美ちゃんという友達ができました。

第十一話 亜美ちゃん（二）

四月ももうすぐ終わりに近づく頃、お兄ちゃんが修行している愛知の親戚の家から一本の電話がかかった。話によるとお兄ちゃんの希望により修行期間が延長になったと言うこと。当初予定していた五月から一転、いつ戻ってくるのかも分からなくなりお祖父ちゃんに残念そうな表情を浮かべた。

お兄ちゃんが何を考えて修行を伸ばしたのかは私の知るところではない。あ、私って御徒真知のことね。

さてそんな知らせを聞いた私はというと、四号館地下一階の食堂にいる人たちを遠巻きに眺めている。

「かつちゃん、どう？ 姉小路先輩いないよね」

私の後ろにぴったりとくつついたはるちゃんがおどおどしながら尋ねる。

「うん、いないかなー」

部室の掃除以来私たちは姉小路先輩に会わないよう以前より三十分後に食堂に入っている。おかげでとんかつ定食は食べるのはおろかお目にかかったことも無い。唯一食べている姉小路先輩を避けているからだ。

はるちゃんは姉小路先輩への恋を自覚したとはいえ、先輩にどう接したらよいか分からず避け続けている。既に恋どころかほにゃらとふにゃらを経験済みの私から見れば新鮮と言うか懐かしさも感じられる。

「私の目から見てもいないようだねー。あ、いた」
隣でしいちゃんが「いた」と言うもんだから

「えっ、嘘！ 逃げよう」

と、はるちゃん大慌て。

「落ち着いてはるちゃん、いたのは亜由美と妹たちだから」
しいちゃんに言われて探してみると……。あ、いた。真耶と結衣

ちゃんと亜由美とあと一人、女の子。

「もー、しいちゃん驚かさないでよー」

はるちゃんがしいちゃんの頭を小突く。

「ごめん、ごめん。勘違いさせちゃったね」

「姉小路先輩はいないことだし、真耶たちのところへあたしたちもいこうか」

「そうだね、行こう」

先輩がいないことに安心したのか、はるちゃんはすばやい足取りで食券販売機に向かっていった。

「あ、かつちゃんときいちゃんとはるちゃん、遅かったですね」

私たちに気づいた亜由美が隣に座るよう促す。

「うーん、最近はいつもこの時間かな」

私はカツカレーを手に亜由美の右隣に座る。私の右隣にはるちゃん、向かいがしいちゃんになる。亜由美の左隣に結衣ちゃん。その向かいに真耶が座っているけど、真耶の隣（つまり亜由美の向かい）に座っているポニーテールの子は誰だろう？ 真耶の新しい友達かな？

「亜美ちゃん、私のお姉ちゃんたちだよ」

真耶が私たちを一まとめで紹介すると、ポニーテールの子はうやうやしく頭を下げた後で、大声で

「初めまして、茂木亜美です。真耶ちゃんと結衣ちゃんとは最近友達になりました。お姉さま方、どうぞよろしく願います！」

お姉さまって……、お嬢様学園じゃないんだから。

「へー、そうなんだ。私は結衣の姉で、真智。椎名真智だよー」
彼女の右隣のしいちゃんが、いち早く自己紹介をする。

「椎名真智さんですね、よろしく願います」

うん、どうも「椎名町」の存在を認識していないらしい。次は私の番か。

「えーと、私も『真知』なんだ。御徒真知。真耶の姉だよー」

「おかち……」

彼女は一瞬呟くと手を自分の顔の前で左右に振って

「御徒真知さんですね、よろしく願います」

と、頭を下げた。うん、絶対最初「御徒町」だと思ったな。

「私は誰の姉でもないけど、伊井国遥って言うよー。よろしくねー」

「結衣ちゃんのサークルの部長さんですね。よろしく願います」
おお、そこまではるちゃんの話は進んでいたか。

「亜美ちゃん、将来はアイドルになりたいんですって」

亜由美の言葉に亜美ちゃんはちよつと照れながら

「はい、そのためには演劇とか芸能面だけではなくいろいろな知識を吸収してつぶしが利くようになりたいのです」

うーん、パツと出のアイドルじゃなくてかなり長い期間芸能界に
いることを考えているみたいだな。

「まあ大学入ったからって必ず企業に就職しなくちゃいけないって
決まっているわけじゃないですし、アイドル志望のために大学で勉
強するのも私はいと思いますよ」

亜由美の言うとおりだ。はるちゃんはダンサーになりたいと思っ
ているし。私は……、何になろう？ もうそろそろ決めなきゃいけ
ない時期なんだけどなー。はるちゃんとはともかく、しいちゃんはど
うなんだろう？

「一年のうちに自分が何をしたいか決めているのはすごいことだね
ー」

「え？ それが当たり前じゃないんですか？」

亜美ちゃんは不思議そうな顔で答える。

「まあ世の中そうじゃない人もいるってことよ」

私ってことは言わないけどね。と、私は少し冷めたカツカレーを
口に運んだ。このくらいがカレーとトンカツの味が味わえてちよう
どいいかな。

「自己紹介も終わったところで、話を元に戻してもいいですか」
私たちが来たために中断してしまった話を再開するようだ。

「私たちは別にかまわないよ」

しいちゃんが私とはるちゃんの代弁をする。

「ありがとうございます。アルバイトをです、ね、結衣ちゃんと真耶ちゃんの三人でやろうかって話なんです」

へー、アルバイト。私はやっていないけど、結衣ちゃんはいちちゃんと二人暮らしだからする必要あるし。亜美ちゃんも一人暮らしなら必須だろうし。真耶は……、する必要ないけど、社会勉強のためにやったほうがいいかな。あ、サークル活動費稼ぐためにする必要あるか。

「知っている子が一緒なら安心してアルバイトできますね」

亜由美は年下に対しても敬語なのは相変わらずだな。

「私の従姉妹の姉さんの知り合いがちょうど人が足りなくて困っているところなんです。そこに私たち三人が入ればちょうどいいかなーって」

亜美ちゃんは熱心に私たちに話す。春は生活が変わる時期だからね。辞める人も多いでしょう。そして新しく入る人も多いでしょう。

「私、ちょうどアルバイト探していたところだから、その話乗るわ」
結衣ちゃんは意気揚々と右手を上げた。

「OK、真耶ちゃんはどうする？」

亜美ちゃんすかさず笑顔で真耶に答えを求める。

「そうだね……、アルバイトは今まで一度もしたこと無いけどやってみようかな」

真耶は迷わず答えた。こうして大人の階段を一步步つ昇っていくのだな……。

「よーし、これで決まりね、それで面接はいつやるの？」

結衣ちゃんはもうやる気満々である。

「うーんと、明後日面接やって、早ければ来月から入ってもらうことになるかな？」

亜美ちゃんの知り合いの紹介だけあって手続きは早いようだ。

「来月ってゴールデンウィーク！ 稼ぎ時じゃない」

確かに来月はゴールデンウィークだけど、それが影響するアルバイトとは限らないよ、結衣ちゃん。というかアルバイトの内容まだ聞いてないでしょ。

「よし、早速コンビニで履歴書を買わないと」

お昼ごはんを既に食べ終わった結衣ちゃんは、トレーを持つと返却口へと向かった。

「ちょっとー、結衣ちゃん待ってよー」

真耶と亜美ちゃんがそれに続き、テーブルには私たち三年生四人が残った。

「なんか三人ともやる気満々って感じだね」

はるちゃんが楽しそうに三人の後姿を眺める。

「うーん、でも真耶と結衣ちゃんはアルバイトの内容知っているのかな……」

内容によっては合わない子も出てくるかもしれない。

「まあその時はその時じゃないですか。亜美ちゃんを見るに、そんなに心配することはないと思いますけど」

亜由美が眠そうな顔でお茶をすすった。

面接は三人とも合格し、五月から働くことが決まった。

「ところで真耶ー、アルバイト先ってどこなのー？」

「秋葉原だよー」
あきはばら

え！ 秋葉原！？

私の頭の中を「萌」もえの一字が支配したのは言うまでも無い。

第十二話 お帰りなさいませ

ゴールデンウィークに入って学校はお休み、まさにアルバイトし放題稼ぎ放題の時期です。

というわけで私、真耶は先週から始まったアルバイト先に向かいます。今日は入ってから初めて結衣ちゃんと、亜美ちゃんと三人一緒の日です。同じタイミングで入ったのにサークル活動やら何やらで一人だけとか結衣ちゃんか亜美ちゃんどちらか一人と一緒にの日が続きましたが、今日は三人一緒なので、嬉しいです。

外はまさに五月の青空満開で日差しも暖か、アルバイト日和です。って私のアルバイト先は屋内なんですけど。

谷中銀座で結衣ちゃんと合流して日暮里駅から山手線に乗ります。「亜美ちゃんは一足先にシフトに入っているみたい」

手すりにつかまっている結衣ちゃんが車窓を眺めます。時折外に見える木は青々とした葉をたくさんつけています。

「それじゃ開店からかー、今日もお客さん多いんだろうな」

祝日なのでおそらく多くのお客様が来ることは容易に想像できます。しかも長い連休なので、遠くからはるばるやってくる人もいるかもしれません。なぜそう言えるかって、私たちのアルバイト先は東京観光のひとつのスポットと言っても過言ではないところなのですから。

さて山手線外回りに乗って鶯谷・上野・御徒町と過ぎて目的地の秋葉原です。私たちのアルバイト先があるところです。今更言うのもなんですが、御徒町はお姉ちゃんの名前と一緒にです。昔はこの駅名を言うとき怒ったのですが、今ではへっちゃらなようです。

秋葉原で下車して電気街口に出てそこから歩いて五分ほど、中央通りと呼ばれる通り沿いにある一つのビルの七階に私たちのアルバイト先というかお店があります。お店の名前は「もえひな」です。

場所が秋葉原、そして名前に「もえ」が付いている時点で「はは

「ん」と思った方は多いかと思います。そうです、私たちの店は「メイド喫茶」そして私たちはそこで働く「メイド」さんなのです。なんでそこで働くことになったかと言うと、私は実家暮らしですが、サークル活動のためにお小遣い以外にもお金を得る必要があったのです。そこで同じアルバイトするなら友達と一緒にところが安心できるかなって思い、アイドルになるための一歩としてメイドになる方法を選んだ（メイドになる↓人気が出て秋葉原のアイドル↓そしてアイドルデビュー という青写真を描いているようです）亜美ちゃんと、メイドに興味を持っている結衣ちゃんと一緒に「メイド」になろうと思ったのです。

さて、そんな説明をしているうちにエレベーターが七階に着きました。私たちの店「もえひな」です。「STAFF ONLY」と書かれたドアを開ければお店のバックヤードです。

「あ、『まや』ちゃん『ゆい』ちゃん、待ってたよー。今日も混んでいて大変だよー」

私と結衣ちゃんの姿を見つけた「あみ」ちゃんが胸に大きな黒い蝶ネクタイをつけたピンクのメイド服姿で手を振ります。

今私たちの名前「」づけでしかもひらがな表記になっていますが、これはここ「もえひな」での私たちのメイド名です。本名をひらがなにしただけです。本名と全く違う名前をつける人もいますようですが、覚えにくいし元の名前がメイドっぽく思えたので、三人とも本名で通すことにしました。以降この店では私たちの名前はひらがなになりますね。

バックヤードでメイド服を着て「まや」と「ゆい」に変身です。お店に出るとあみちゃんの言うとおりのお客様いえ、ご主人様お客様がいっぱいいます。二十人強入れるお店ですが、空席は僅かに一つ…。

「やっぱりゴールデンウィークだからだねえ……」
席の様子を眺めながら伝票を一つ手にします。「萌えオムライス」

がちょうどできたところです。トマトケチャップでご主人様お嬢様の好きな文字か絵を描きます。

「お待たせいたしましたー。『萌えオムライス』です。サービスでケチャップで何か文字か絵を描きますが、何がいいですかー」

「それじゃあ、お団子三つ頭の主婦を」

「はい、かしこまりました」

ご主人様はストレートに名前を言っていますが、都合で修正しています。オムライスに裸足でお魚加えたドラ猫を追っかける主婦を描きます。私は絵が得意なので、こんなのは朝飯前です。

「上手いねーまさしく奥さんだよー」

ご主人様も満足顔です。

「はい、ありがとうございます」

私も笑顔で答えます。これが「萌え」ってやつですね。

「まやちゃん、チェキおねがーい」

「はーい」

ご主人様お嬢様の中にはメイドとのチェキ（写真ですね）を撮る人もいます。このチェキ、うちの店ではポイントカードを一枚満了と引き換えに一枚というシステムをとっています。他の店ではお金を払えば撮れるところもあるみたいです。

「どんなポーズをとればいいですかあ」

ポーズもご主人様お嬢様のご希望にあわせます。

「それじゃあ猫のポーズを」

「はい、『にゃんにゃん』ですね」

「それじゃ、せーの」

「にゃんにゃん」

シャッターの音とともにカメラから写真が一枚出てきました。しばらくすると私たちの姿が映りますので蛍光ペンなどで落書きしたり、シールでデコレーションしたりした後でご主人様に渡します。

「はーいご主人様、お待たせいたしましたー。どうもありがとうございます」

笑顔で写真を手渡しします。これもひとつの萌えです。

「まやちゃんレジおねがーい」

「はいはーい」

さてさて次はお出かけするご主人様お嬢様のお会計です。

「お会計は千三百円になります」

小太りしたご主人様の財布から千円札一枚と、五百円玉一枚私の手に渡ります。

「千五百円お預かりします。二百円のお返しです。ポイントカードはお持ちですか」

「あ、いえ持っていないせん」

どうも初めて帰宅されたご主人様のようにです。あ、ほとんどのメイド喫茶では来店を「帰宅」、退店を「お出かけ」と言います。だからご主人様をお迎えするときは「いらっしやいませ」じゃなくて「お帰りなさいませ」なんですネ。

「無料でお作りできますが、いかがいたしましょうか？」

「あ、それじゃあお願いします」

レジの下の棚からピンク色のポイントカードを取り出します。

「千円ごとに一ポイント押させていただきます。その他雨の日ですともう一ポイントサービスいたしますので、これから是非ご帰宅なさってください」

「あ、はいありがとうございます」

ちよつと慌てながらご主人様はカードを受け取ります。

うちのお店では千円で一ポイントですけど、他のお店では五百円で一ポイント、来店時に一ポイント（どんなに飲食にお金を使ってもポイントは付きません）、一コースで一ポイント（メイドリフレなどのマッサージ屋さんがこのパターンですね）と言ったポイントの付け方をしている場合があります。大体この四つに分けられるそうです。

ネットで何円に付き何ポイントか確認するのが一番ですけど、そのことがホームページに載っていないお店だった場合、必ず千円は

飲食に使ってください。ほとんどの場合最低でも一ポイントもらえるとあります。（と長々と説明しましたが、あくまでも私の知っている範囲なので、例外があるかもしれません）。

あ、あとチャージ代と言う席料を取ってそれはポイント対象外となっているお店もあります。うちの店はチャージ代無いです。

さらに雨の日ポイントサービスや、平日ポイントサービスと言うのもお店によって用意されているようです。まあ一度ホームページを見るのが確実ですね。

「いってらっしゃいませ、ご主人様」

ご主人様の乗ったエレベータの扉が閉まりました。これでレジの一連のお仕事は終わりです。さて、お店を回って注文を聞かないとおや、誰かご帰宅なされたようです。お嬢様の声が聞こえますね。

「あー、トイレ行きたーい」

「お帰りなさいませ、お嬢様。ただ今お席を用意いたしますので……」

あずさちゃんに対応するみたいですが……。

「すいません、先にトイレ行かせてください」

って現れたのはお姉ちゃん!? それに椎名先輩と伊井国先輩!?

「よかったー、空いてたー」

伊井国先輩が周りを無視して真っ先に「TOILET」と書かれた扉を開けます。

「もーう、はるちゃん。私が先ー!」

「だめー、しいちゃん次は私ー!」

えーと、何が起こったか分かりませんが、妹だと思われるのは恥ずかしいです……。ゆいちゃんも同じ気持ちだと思います。

「あたしが行こうか?」

あみちゃんが気を遣ってか小声で囁きます。

「あみちゃん、お願い」

ここはあみちゃんに任せて他人のふりをするのが一番ですね。それにしてもどうしてお姉ちゃんたちが来たのでしょうか?

第十三話 妹はいずこに

五月四日――、真耶機嫌良く家を出る。その後を気づかれないように追うのは私、姉の真知。

真耶のアルバイト先が秋葉原にあるので、一度どんなところか見に行こうと尾行しているのだ。

今日は結衣ちゃんもシフトに入っているとのことなので、しいちやんと合流する予定。後面白そうだからと言う理由で、はるちゃんも。

真耶を尾行すること五分。真耶、結衣ちゃんと合流。それと同時に私はしいちゃんとはるちゃんと合流した。

「尾行だなんて、刑事みたい。楽しみー」

「はるちゃん、静かに」

しいちゃんが小声で注意する。

尾行か……、確かに刑事みたいだな。私は紅茶好きだから、自前のティーセットを用意して、ズボンをサスペンダーで吊り上げようかな。

そんなことを考えているうちに日暮里駅に到着。二人は山手線の六号車に乗り、私は二人の相棒を連れて一つ上野寄りの車両に乗る。鶯谷・上野・御徒町……。妹二人を見失わないように隣の車両から視線を送る。相棒の二人は妹二人に集中して御徒町を通ったことに気が付かないようだ。まあからかわれたところでどうってことないのだけど。

そして秋葉原駅、妹たちからワンテンポ送れて下車。目標はエスカレーターを下っているところを階段でゆっくり降りながら追跡。

電気街口を北に出て、暫く歩くと中央通りに出る。ここは少し前まで休日は歩行者天国になっていた通りだ。

その通りを北へつまり御徒町方面に向かって三分ほど歩いたところで、真耶と結衣ちゃんの姿が一つのビルの中へと消えた。

「ここが二人のアルバイト先か」

薄いクリーム色の外壁に囲まれたビルを見上げて中へ入ろうとしたけど、

「だめだよかったちゃん。まだ入ったばかりだからすぐに店には出てこないよ」

と、しいちゃんに止められてしまった。そうだね、私服のまま店に出るわけがないよね。

「しょうがない、十分か十五分ぐらいどこかで時間つぶそうか」

「つと、こんなところにちょうどメイド喫茶がー！」

私から見て右側、真耶と結衣ちゃんが入ったビルの隣にちょうどメイド喫茶を発見。ガラスを通して中の様子が見える。どうやら三人入れそうだ。

「お帰りなさいませお嬢様」

出迎えてくれたのは黒いメイド服を着たポニーテールの女の子。おしとやかなメイドというよりは、ユニフォームを着てスポーツをやったほうが似合う感じがする。

三人席に通されてメニューを置かれる。

「ただ今、パソコンゲーム『先輩大好き！』とタイアップキャンペーンを行ってしまして、特別メニューが用意されています」

「『先輩大好き』ってどんなゲームなのですか？」

「え、えーと、その……」

しいちゃんが尋ねるとポニーテールのメイドさんは少々困った顔で答えに詰まった。

「テレビゲームにある恋愛ゲームのその先まで進めることがゲームと申しましょうか……」

「つまり少年少女はやるな、ってゲームなわけですね」

私がつっぱりと回答を求める。

「まあ……、はっきりと言ってしまえばそうなりますね……」

つまり好きな女の子と「ほにゃらら」「ふにゃらら」できればクリアってゲームなのだろう。「ほにゃらら」と「ふにゃらら」は既

に知っているよね。知らなかったらパート1に戻ってね。

私たちはそういうゲームには興味が無いし、食事は真耶のいる店で済ませようと思っているので、無難にホットティーもしくはコーヒーを注文した。

「紅茶は最初の一杯は私がサービスでお入れしますね」

「あ、どうもありがとうございます」

ピンク色のポットから紅茶が細い放物線を描いてカップへ注がれていく。毎回やっているからこの作業は手馴れているのだろう。

「コーヒーには何かサービスしてくれないのですかー？」

唯一コーヒーを頼んだはるちゃんが不満そうにメイドさんを眺める。

「泡の出るカプチーノとかだったらサービスで泡に絵を描くことはできたんですけど……。申し訳ございませんお嬢様」

ポニーテールのメイドさんは紅茶を注ぎながら頭を下げた。そして、カップに八割がた紅茶が満たされたところで、ポットはテーブルに置かれた。

しいちゃんも同様のサービスを受ける。薄茶色の放物線をほうつと眺めているしいちゃん。かわいいな。

「それではごゆっくりおくつろぎくださいませ」

メイドさんは頭を下げるとカウンターのほうへと歩いていった。

「さて、これを飲んだらいよいよ真耶ちゃんたちのいるお店ね」
はるちゃんが意気揚々とした顔でカップを掲げた。

「うふふ、まるで何かの出陣式みたい」

しいちゃんも楽しそうにカップを上げる。

時間としたらこれを飲み終わったらちょうどいい頃合いだろう。

飲み終えたところでさっさと会計を済ますためにレジへ行く。またポニーテールの子が対応してくれた。

「お嬢様お三方の合計で、千五百円になります」

私たちは財布の中から五百円玉を一枚取り出し、その子に渡した。「ポイントカードはお持ちですか？ 無いならお作りしますが……」

「それじゃあ、ここは代表してかつちゃんがカードゲットで
はるちゃんが私を指差す。」

「えっ、別に私は必要ないけど……」

「それじゃあ私がもうー!」

しいちゃんが勢い良く右手を上げる。

「じゃあやっぱ私がもうー!」

はるちゃんが満面の笑みで右手を上げる。

ああ、そうか。これは私がカードを手にする流れなんだな……。

二人の期待を裏切るわけには行かないので、

「じ、じゃあ……私も欲しいな……」

遠慮がちに手を上げると

「どうぞどうぞどうぞ」

しいちゃんとはるちゃんは同時に腰を低くして私に手を差し出した。
た。

「あ、あの……」

バカ殿のお側に仕える三人組のトリオが織り成すコントの前にメイドさんが困っている。

「見ての通りです。私がカードをもらいます」

私は胸を張ってメイドさんに手を差し出した。

「は、はい……、五百円で一ポイントなので、今回は三ポイントです。雨の日ですとさらに一ポイントおまけいたしますので、またお帰りください」

ハートのマークが三つ付いたカードを私は受け取る。

「それじゃあ、どうもごちそうさまでした」

「行ってらっしゃいませ、お嬢様」

時間も稼げたことだし、さあここから真耶たちのいる店へ！
っ
て思ったら……。

「このビルのだこなよいったい!」

私たちの入ろうとしていたビルの二階から七階までが全てメイド関係のお店だったのだ。

「さすがは秋葉原ね」

「はるちゃん、感心している場合じゃないって」

私ははるちゃんに突っ込みながらため息をつく。

「二階から一階ずつ上に行くしかないかな」

一番それが確実な方法だな。

「これでいるのが七階だったら大ハズレね」

はるちゃんの心配をよそに二階から行くことに決定。これが大いなる間違いだと言うことに気が付くのは後のことである。

二階――

「お帰りなさいませ、お嬢様」

ここは普通のメイド喫茶辺りを見回しても真耶と結衣ちゃんの姿は見えない模様。どうやら外れらしい。

適当に紅茶を注文して三十分ほどで退店・

三階――

「お帰りー、お姉ちゃん」

うん？ お姉ちゃん！？　なんだか変わったセリフだな。

店を見るとここはどうやらメイドじゃなくて妹が迎えてくれる喫茶店らしい。ここも外れ。

そして四階――

「お帰りなさいませ、お嬢様」

メイド喫茶だと思いきやここはメイドが足つぼマッサージをしてくれるお店だった。

「いいいっ痛い！　痛い痛いっ！」

「ここがお疲れと言うことは目が疲れているってことですね」

メイドさんは容赦なく目のつぼを押して行く。

一方のしいちゃんとはるちゃんといえは普段運動をしているせいか、悪いところはただ一つを除いて見当たらないようだ。しいちゃ

んに至っては

「すごい健康ですねー。どうしたらこんなに元気なんですかー」

と、メイドが感心していた。唯一の悪いところと言え

ば「尿管にょうかんの辺りが疲れているみたいですね」

とのこと。これは私も言われたんだけどね。

「トイレとか我慢しているとよくここがはったりするんですよ」

マッサージの後は老廃物を体外へ出しやすくするためにハーブティーを飲んだ。

五階も六階もメイド喫茶だったけど、ここもいなかった。ということは七階か……。上から行けば一発で会えたのに。しいちゃんを恨んでもしょうがない。

そんなことを考えながら七階に行くエレベーターに乗ったとたん急にトイレに行きたくなった。

「しいちゃん、はるちゃん……、私トイレに行きたくなった……」

「私もだよ、かっちゃん」

「実は私も……」

考えてみれば、この隣のビルのメイド喫茶から数えて六杯紅茶かコーヒーを飲んでいる。利尿効果抜群の飲み物を何杯も飲んでいたらトイレに行きたくなるのも当然だ。

「七階に着いたら私、すぐにトイレに行くからね」

「ずるいよ、かっちゃん。ここは公平にじゃんけんで決めようよ」

しいちゃんともめている最中、エレベーターの扉が開かれた。

「とうっ！」

「うわっ！ はるちゃん」

漁夫の利を得たはるちゃんが真っ先にエレベーターを飛び出し店へと入っていった。

「お帰りなさいませ、お嬢……」

「すいません、トイレ貸してください！」

メイドさんの挨拶をさえぎってはるちゃんは「TOILET」と書

かれた扉を開ける。

「ずるいよー、はるちゃん私も入りたいのにー」
しいちゃんが扉を叩いて抗議する。

「この世は早い者勝ちなのよ、しいちゃん」
はるちゃんが訳のわからないことを言う。

あ、真耶と結衣ちゃんの姿を発見。だけど私はトイレに行きたくてそれどころではない。二人も私たち三人の知り合いと思われるのが恥ずかしいのか他人のふりをしている。

うーん、やっぱり上から行けばよかったな。

第十四話　じゃがいもかあ

五月も中盤に入ったというのにはるちゃんの様子は相変わらずである。

姉小路先輩を意識的に避けている。おかげでお昼ご飯は姉小路先輩と時間をずらして食べることになっている。

明石先輩との仲はいつも通りだけど、このままいくとこの二人の関係もギクシャクしかねない。

「と言うわけで、『はるちゃんの恋』についてみんなで考えましょう」

亜由美がオレンジジュースの入った紙コップを持ち上げた。

「それはいいけど、どうして会場がうちのなの？」

かわちゃんが頬をちよつと膨らましている。

「いや、『現役彼女』であり『ほにゃらら』『ふにゃらら』もしている方の意見も参考に聞きたいな、と……」

こらーっ 亜由美、「ほにゃらら」と「ふにゃらら」なんて言うなー！

「なあに？ 『ほにゃらら』と『ふにゃらら』って？」

ほら聞いてきたじゃない。どう答えるんだ。亜由美よ。

「『ほにゃらら』と『ふにゃらら』と言えば、決まっているじゃないですか。こう……」

「乳を寄せるな！」

私が止めると亜由美はかわちゃんの耳元に口を寄せた。どうやら「ほにゃらら」と「ふにゃらら」について説明しているようだ。みるみるかわちゃんの顔が赤くなっていくのが分かる。

「な……！ 確かにしていることはしてはいるけどさー。それをこの場で言うこと無いんじゃないのかなー」

確かに言うことじゃないけどかわちゃん自分で認めちゃったよ。

そうか、ここで「ほにゃらら」と「ふにゃらら」しているんだ……。

「えーと、かわちゃんが状況理解できたところで本題に戻りましょう。はるちゃんの恋をどうするかということですよ」

集まったのは亜由美とかわちゃんの他にしいちゃん、そして相談者のはるちゃんだ。

はるちゃんの相談…

最近好きな人ができたのですが、恥ずかしくて一緒にいられません。振られるのも怖いし、今後どうお付き合いしていったらよいのでしょうか。

「はるちゃんが初恋ねえ……」

かわちゃんがニマニマしながらはるちゃんを見る。

「笑わないでよ。今まで恋とかそういうものに興味を持ったこと無かったんだから」

それまで全く興味を持たなかった世界に触れたはるちゃん。なんだかわいいな。

「今は普通に話せる仲なのでしょう？　まずはお友達から始めてみたらどうですか？」

「だから恥ずかしくて今は普通に話すことすらできなくなったんだよ」

亜由美の回答にしいちゃんが突っ込みを入れる。

「ああ、そうでしたか……、そこが問題なんですね」

「まずは今までどおり普通に話せるようになるう！」

恋をしていると自覚する前ははるちゃんは積極的に姉小路先輩に話しかけていた。その状態に戻すことから始めないと。

「ええー、でも恥ずかしいよお……」

はるちゃんは紙コップのふちをつつきながら顔を赤らめた。

「その『恥ずかしい』という気持ちを取り除かないと、はるちゃんこの先何もできないよ」

好きな人に近づけないまましていると、そのうちその人に平気に近

づいている人に対して嫉妬心を持ってしまいかもしれない。そうやってしまうとやっかいだ。

「要は姉小路先輩をじゃがいもかかぼちゃと思えばいいんですね」
亜由美……、それは人前で話すときに緊張しない方法でしょ。

「じゃがいもとかかぼちゃとは恋愛できないから普通に話せるかもね」
あらら、かわちゃんまで乗っちゃったよ。

「姉小路先輩はじゃがいもかかぼちゃ。姉小路先輩はじゃがいもかかぼちゃ。姉小路先輩はじゃがいもかかぼちゃ……」

はるちゃんまでその回答を信じて自分で念じている。そして立ち上がって

「よし、これからは姉小路先輩をじゃがいもだと思って話しかけてみるよ！」

勢い良く叫んだはるちゃん。いいのか？　これで。まあ本人がそう思っているのならいいんだけどさ。

「じゃあはるちゃんの悩みが解決したところで夕ご飯をみんなで作ろうか」

しいちゃんは早くも冷蔵庫を開けている。

「作りたいのはやまやまだけど、冷蔵庫の中身は私とダーリンの二人分しか入っていないから、スーパーに買い物に行かなくちゃ行けないよ」

二人分って……、このそれぞれ一人暮らししているかわちゃんとけーまはどのくらいの確率で一つ屋根の下にいるんだろう。

一つ屋根の下で夜を明かすってことは……、はっ、いけないいけない。そんな当然のことを考えてはいけない。元に戻さないと。

「それじゃあ私としいちゃんで購入物に行つて来るよ」

私は立ち上がると冷蔵庫の前のしいちゃんの肩を叩いた。しいちゃんなら五人分の献立が簡単に決まりそうだ。

「ついでにお酒も買ってこないかね」

しいちゃんが笑顔で立ち上がる。

「ダメ！　お酒は絶対にダメ！」

お酒が入ったらこの部屋が地獄絵図になることは目に見えている。

かわちゃんの家から巢鴨すがものスーパーまでは歩いて十分の距離だ。

「この時間帯になると商店街の人通りが多いね」

向こうから歩いてくる人を避けながら私はしいちゃんの手を引く。
「ほんとだね、山の手線内って家賃が高いって聞くけどそれほどじゃないのかな」

山手線の外か内かで家賃が違うと言うのは事実らしい。山手線の内側にあるかわちゃんの家と同じくらいの広さの家を山手線の外側で借りるとその差は一万くらい違うらしい。

でもよく考えてみるとかわちゃんだけじゃなくしいちゃんの家も山の手線内なんだよね。実家からの仕送りがたぶんいいんだろ
うな。あ、私の家もそうだ。でも実家暮らしだから家賃は気にしないでいい。税金はどんだけ取られているのか分からないけど。

そんなことを考えているうちに巢鴨駅前すがものスーパーに到着。

「さて先生、今日の料理はいったいなんでしょう」

私は料理番組のアシスタントみたいな口調でしいちゃんに問いかける。

「そうだね……、青葉の季節だから見た目が青々としたものがないかな……」

そう言いながら野菜売り場の商品を見続ける。私はしいちゃんに任せてただ立っているだけ。

「はははっ、ひろくんってばー」

私たちの後ろをカップルらしき二人組が通り過ぎていく。いいなあこれから二人でご飯食べた後、「ほにゃらら」……、っていい加減頭から消去しないか！

こうなったのも亜由美のせいだ。しいちゃんに酒飲ませて首相撲をまたさせようかな。

そんな考えは男性の次の一言であっさりと砕かれた。

「幸子ー、次なに買うんだー」

え！

今の声、まさか……！？

ううん、そんなはずはない。彼は今この東京にいるはずが無い。だって東京にいるならば……。

私は声のするほうを振り向いた。すでに私たちのいるところから数メートル離れているがその後姿は私の視界に入っている。

その後姿を見て私は確信した。私は迷わずその人のところへ走り出した。

「ちよっと、かっちゃん。どこへ行くの？」

後ろからしいちゃんの声が聞こえてくるが私の足は止まらなかった。

第十五話 再会

目標となる男の人を追い抜いて正面に立つ。やはり私の予想したとおりだ。

「お兄ちゃん！」

目の前にいたのは私の兄——御徒良太郎——おかち りょうたろう。髪はスポーツ狩りで目元がくつきりしている。まさに御徒家男子のDNAを受け継いだ顔だ。

彼は未だ愛知にて修行中のはずである。

なぜ東京に戻ってきたのか？

東京にいるならなぜ実家に戻らないのか？

なぜ修行を伸ばすと嘘をついたのか？

そして隣にいる女性は誰か？

頭の中で様々な疑問が浮かんでは消えていく。私は言葉をつむぎだしてやっと

「どうして……」

と口に出した。「どうして」の後に思いついた全ての疑問を集約している。

「真知……」

お兄ちゃんは私の姿を見て驚いた表情を見せた。

「良くん、妹さん？」

隣にいた女性がお兄ちゃんの右腕を引っ張る。「良くん」と呼ぶからにはかなり親密な仲なのだろう。程よい大きさの胸元まで伸びた髪、ぷつくりと豊かな唇。そして斜め右上にほくろがある。

「ん……、ああそうだ……」

そう答えるとお兄ちゃんは女性の肩を抱いて私から逃げるように通り過ぎていった。

「待って、お兄ちゃん！」

いろいろ聞きたいことがあるのに何も答えをもらっていない。

お兄ちゃんは一度立ち止まり。

「彼女は山口の出身なんだ」

そう言って再び歩き出した。

「山口……」

全部が分かったわけではないが私はお兄ちゃんが我が御徒家にとつてとんでもないことをしようとしていることが理解できた。私の予想が全て当たったらの話だけど……。

「かっちゃん、いきなりどうしたの？ お兄さんに会ったの？」

しいちゃんが私の右手を掴んだので私は我に帰った。

「うん、まあ……。ごめんねしいちゃん。買い物続きをしようか」
私はしいちゃんの持っている買い物籠を彼女の代わりに持った。

今から百四十年前——。二百六十年も続いた江戸幕府は西国の倒幕勢力によって滅ぼされた。その中心となったのが薩長土肥と呼ばれる四つの藩である。

鹿児島藩・山口の長州藩・高知の土佐藩・佐賀の肥前藩——。

この四つの中でも長州藩は最も早い時期に江戸幕府に反旗を翻し対抗した藩である。彼らは幕府に対して三度戦い、最初の二回（禁門の変および第一次長州征伐）は負けて、最後（第二次長州征伐）は大勝した。

この戦いの敗北により、江戸幕府の権威は大いに落ち、後に他の藩が幕府に逆らうようになる大きな一因となった。

倒幕勢力と幕府側との遺恨は百四十年経った今でも決して消えない。戊辰戦争最大の激戦地となり、老若男女問わずして多くの犠牲を出した会津では山口の人を今でも快く思っていないと聞くし、数年前「新撰組」が国営放送の「大時代劇ドラマ」に選ばれたときは、国会で山口出身の議員が

「賊^{ぞく}を国営放送のドラマの主人公にするのはいかなものか」

と、笑い話のような答弁が行われたと言う。最終的に倒幕勢力が勝ったため、幕府側の人間が「賊」と呼ばれるようになったのである。（ちなみに回答者の立場に立ったのは薩摩の出身だった）

我が御徒家は幕府側の家系である。私はともかくとしてお祖父ちゃんやお父さんの倒幕勢力に対する恨みは根深い。ただし、薩摩はそれに除外されるのは前に述べたとおりだ。

そのため山口こと長州はお祖父ちゃんたちにとって最大の敵なのである。その山口出身の女性を連れてお兄ちゃんは東京へ戻ってきた。つまり――

「お兄ちゃんは山口の人と東京で一緒に暮らしている」

と言う仮説が登場する。お祖父ちゃんやお父さんが聞いたら腰を抜かすところではない騒ぎだ。御徒家先祖代々に対する冒涇^{ぼうけい}だと思われるかもしれない。

私はこの事実を家族に伝えるか否か買い物をしながら考えていた。出てきた答えは「ノー」。お兄ちゃんがどこに住んでいるのか、何を考えているのか理解できない（先ほどの仮説も正しいとは言えない）以上、家族に伝えるのは問題をややこしくするだけだ。

「かっちゃん、さっきから様子がおかしいけどどうしたの？」

「うん……」

私は駅前の喫茶店でしいちゃんに先ほどの出来事と私の考えを話すことにした。

「かっちゃんのお兄さんがそんなことを……」

「しいちゃんの実家の米沢は幕府の味方だったからお祖父ちゃんたちは優しくしてくれたでしょう。だけど倒幕側の人たちだとすごく厳しい対応をするのよ」

うちの和菓子を買いに来るお客さんに実家はどこかなんていちいち聞かないから誰にでも笑顔で売っているけど、一度店での会話で

山口の出身だと言う話を聞いたとき、ものすごい剣幕で追い出したことがある。それほど倒幕側の人間には厳しいのだ。

「はるちゃんの問題のほかに大きな問題がでちゃったね」

しいちゃんが空になったコーヒークップを置く

「そうだー、はるちゃんのこともあったー」

私は頭を抱えた。というか、私たち夕食の買い物に出ているんじゃない。すっかり忘れていた！

「大変、私たちが家に出てからどのくらい時間が経ってる？」

しいちゃんは右手につけている銀色の時計を見て答える。

「えーと……、一時間ぐらい経ってるよ」

「やばいよ、もう戻らないと。みんなお腹を空かせて待ってる！」
私は伝票を取るとレジに向かって歩き出した。

「……、いったいどうしたんですかぁ。だいぶ待ったんですけど……」

家に帰るとみんな恨めしそうな目を私たちに向けてきた。みんなちゃんと待ってたんだなぁ……。

「もうしばらく帰ってこなかったら、探しにいかうかと思っていたんだから」

かわちゃんが私の手からスーパーの袋を受け取る。

「いやー、ちよつとね……」

料理はしいちゃんが作ってくれる。だから私は先ほどしいちゃんに話したことを話すことにした。

第十六話 二人の探偵

「かっちゃんのお兄さんが山口県出身の女性と一緒にいたの？ それがどういう大変なのかよくわからないんだけど……」

私が先ほどスーパーでお兄ちゃんと再会したことを話すと、かわちゃんが首を傾げた。

「幕府側の人間と、倒幕側の人間は仲が悪いってことよ」
はるちゃんが私に変わって答える。

「例えて言うなら『山奥か孤島で出会ったら殺される可能性が高くなる不吉な名探偵の孫』と、『見た目は子供の自称眼鏡探偵』ぐらい仲が悪いわよ」

「え、その二人仲が悪いんですか？」

亜由美の顔に「はてなマーク」が浮かぶ。二人が仲悪いなんて聞いたこと無いぞ。第一違う漫画の登場人物じゃないか。

「だってあの『子供探偵』テレビでこう言っていたのよ。『犯罪者を自殺に追い込ませる探偵は殺人者と同じだ』って。明らかに『名探偵の孫』に対する挑発よね」

確かに「名探偵の孫」は犯人が自ら犯人だと認めた後で自殺するケースが多い。それに対して「子供探偵」の方は……。そういうことないんだろうなあ。

「名探偵の孫」と「子供探偵」の仲が実際どのようなものかはともかく、幕府と倒幕（特に山口県）の人間の仲が悪いのは確かである。

「お兄ちゃんの彼女が長州出身の人なら、かっちゃんの家族は反対するでしょうね」

はるちゃんが言わなくても家族の反応は想像できる。お祖母ちゃんなんか「朝敵！」^{あしひ}と悲鳴を上げそうだ。なぜ「朝敵」なのかと言うと、幕末に長州藩は京都を攻めて敗北し、その罪で一時期「朝廷の敵」つまり「朝敵」となったらしい。まあ最終的に大逆転で幕府

側が「朝敵」になっちゃったんだけど、私たちの家族はそんなことを棚に上げるであろう。

「そうなのよ、だからお兄ちゃん東京に戻っても家に帰らないで『修行を続ける』と嘘をついたんだわ」

嘘について東京で山口県出身の彼女と暮らす。いったいどうするつもりなのだろう。今のままでは到底家族の前に顔を出せない。

「はるちゃんの問題のほかに、新たな問題が出てしまいましたね」

亜由美が冷静に缶ジュースをテーブルの上に置く。はるちゃんには悪いが私にとってはおにいちゃんの方が重要だ。はるちゃんは頼りにできる友達が現にここにいるけど、お兄ちゃんの問題は私たち家族の問題。友達の力が及ばないところにある。

「はい、お待ちどうさま。今日はカレーを作ってみましたよ」

しいちゃんがカレーがたっぷり入った鍋をテーブルの側に置く。

もちろんあらかじめ鍋敷き代わりに新聞紙を敷いている。スパイスの香りが私の脳から悩みを少し忘れさせてくれる。

「腹が減ってはいいいアイデアも出ないわ。先に食べちゃおう」

かわちゃんがしいちゃんと協力してお皿にご飯とカレーを盛り付けていく。お腹も空いたし夕食にしようかな。

「ジャガイモかあ……」

はるちゃんがスプーンに乗ったじゃがいもを見つめて呟く。

「さっき『姉小路先輩はジャガイモと思えばいい』って言ったじゃん。私がこれを口にするってことは姉小路先輩を食べちゃうってことだよね」

いや、はるちゃん。さっきのことそこまで真に受けなくてもいいから。

「はるちゃん何を言っているんですか。まだそんなエッチなことを言ってもいい時間じゃないですよ」

亜由美が突っ込みの手の代わりにスプーンをはるちゃんに向ける。「食べる」ってそういう意味かあ!?

「な、なにを言っているのよ。そんな『ほにゃらら』とか『ふにゃらら』する意味なわけじゃないじゃない!」

はるちゃんが顔を真っ赤にさせながら反論する。

「いや、『食べる』と言ったので、つい……」

「乳を寄せるな!」

私が亜由美の腕を掴む。

「ところで明石先輩とはどうするんですか? 今までどおり先輩後輩の付き合いができる自信ありますか?」

腕を掴まれながら急に亜由美が話を真面目に戻す。

「うーん、明石先輩自体は別に嫌いになったりはしないけど……」

「例えば姉小路先輩と明石先輩が二人で何か話している光景を見たらどう思います?」

かつて恋人同士だった二人。どのような別れ方をしたか聞いていないけど、二人で話することなんてあるのだろうか? 会長とサークルの部長という関係であった去年はそういうこともあったかもしれない。

「二人が話をしていたら? そんなの実際に見てみないと分からないよ」

はるちゃんはカレーをかき混ぜながら答える。

「確かにはるちゃんにとっては初めての体験だから実際にそうやってみないと分からないかもね」

しいちゃんがスプーンに乗ったカレーに息を吹きかける。

「でも想像したことぐらいはあるんじゃないですか? ほーらこうしている今も姉小路先輩と明石先輩が楽しそうに話をしている……」

「亜由美、いい加減はるちゃんをからかうのやめなさい!」

このままだとはるちゃんが暴走しそうなので、亜由美を止めておく。

「イマジネーションこそ問題解決の道が開けると思ったんですが……」

亜由美が残念そうにスプーンでカレーをかき混ぜる。

「私のことよりもかっちゃんのお兄ちゃんの方が問題なんじゃないの？」

はるちゃんがスプーンを私の方へ向ける。

「うーん、私的にはそうだけど……」

あくまでも私の家の問題だからな。みんなを巻き込んでよいものか……。

「かっちゃん、嫌だったら別に話さなくてもいいよ。だけど私たちに協力できることがあったら。相談に乗るから」

「ありがとう、しいちゃん」

しいちゃんの言葉に甘えて私は一つの不安を話してみることにした。

「最悪、お兄ちゃんが家を継げないかもしれない……」

「朝敵」である山口県出身の女性と結ばれることは幕府側の子孫である御徒家にとって許されることではないのだ。お祖父ちゃんたちのことだ、「家は継がせん！」と言う可能性がある。

「えー、そしたらかっちゃんの和菓子屋さんお父さんの代で終わってことになるの？」

「そうね、はるちゃんの言うとおりの展開になるのかな……」

家を継ぐために修行に出たのにお兄ちゃんは跡継ぎの資格を失ってしまうのだ。跡を継ぐものがいなくなってしまう以上、「御徒和菓子店」はお父さんの代で終わりと言うことになる。

「しかし東京にいるってことは仕事をしているってことですよね。いったい今何をしているんでしょう？」

確かに東京で女性と暮らしているからには何らかの仕事をして生活費を稼ぐ必要がある。しかしついこの間まで和菓子作りの修行をしていたお兄ちゃんに普通のサラリーマンが勤まるのだろうか？とても想像できない。

「かっちゃんのお兄ちゃんが『修行を延長する』って言ったのはつい最近なの？」

かわちゃんがカレーの付いていない白いご飯をスプーンに載せな

がら尋ねる。

「うん、先月のことだけど。どうしたの？」

「いや、今月に入って男女のカップルが一組私の隣の部屋に引っ越ししてきたのね」

「まさか……、その二人がお兄ちゃんたちだって言うの？」

かわちゃんの家のチャイムが鳴ったのは私が叫んだ直後のことだった。

第十七話 幸子さん

「はいはい」

かわちゃんが立ち上がり玄関の覗き穴から来客者を見る。

「あ、幸子さんだ」

ん！？ 幸子っ！？ お兄ちゃんが連れていた女性も幸子だったような……。

私はかわちゃんの後ろにつく。そして扉が開かれて……。

「かわちゃん、カレー持って来たよ、カレー」

「あ……」

入ってきたのはやはり私の知っている「幸子さん」であった。

「うぐっ、妹さん！」

幸子さんは私を見るなり、かわちゃんにカレーを渡して、逃げ出そうと私に背を向けた。

「待って、幸子さん」

逃がすまいと私は彼女の肩を掴む。

「嫌だー、離してー」

「話を聞かせてください」

おろおろと慌てる幸子さん。私たちの様子にかわちゃんも事情に気がついたみたいで。

「私も幸子さんの話が聞きたーい」

と、幸子さんの背後から腕を回した。

「なんにも話すことなんか無いもん！」

「そっちはないかもしれませんが、私には山ほどあるんですよ」

このまま「離して」「話して」のやりとりをしてもキリが無い。ここは少々乱暴だけど強硬手段に出ないと。

「話さないと私の友達のボディーブローをプレゼントしますよ！」
それを聞いた幸子さんは。

「嫌だ、話すからお腹はやめて！」

と、お腹を大事そうに手で隠し、大人しくなった。ボディブローを嫌がるなんて明石先輩みたいだな。

私とかわちゃんに付き添われながら、幸子さんはみんなの真ん中に座ることとなった。何か裁判にかけているみたいだな。

「かつちゃん、もしかしてこの人が……」

「そう、さっきお兄ちゃんが連れていた人よ」

「なんでも話すから、お腹は許してー」

お腹大切に行っているところを見ると、さっき冗談で言った。「しいちゃんのボディブロー」、よっぽど嫌なんだろうな。まあ誰でも殴られるのは嫌か。

「それじゃあ、まずは名前と歳と出身を言ってもらえますか？」

亜由美が冷静に尋ねる。本当に裁判と言うか、取調べのような質問だ。

「吉田幸子、二十二歳。山口県は萩市はぎから来ました」

あれ、私より一つしか違わないんだな。見た目はセクシーな大人って感じなのに。

「吉田ですって!？」

はるちゃんが驚いた声をあげた。「吉田」で何か思うところがあるのだろうか。

「山口で吉田ってことは、あなたの先祖は……、吉田松陰？」よしだ しょういん

はるちゃんが尋ねると

「はい、その通りです」

と、頷いた。

「吉田松陰か……、これはヤバイわよ……」

はるちゃんが頭を抱える。吉田松陰って聞いたことあるけど誰だっけ。

以下、はるちゃんの説明を私なりに要約してみる。

江戸幕府が開かれから最初の時期を除いて約二百年間、日本は外

国に対して「鎖国」^{こく}政策を取り続けていた。鎖国とは、簡単に言うてしまえば外国との貿易や旅行を禁止した政策のことである。

しかし二百年が経ち、幕末になるとヨーロッパの船が日本に接近してさかんに「鎖国」を辞めるよう交渉してくることになる。

当初反発していた幕府だったけど、日本と外国の実力差から「鎖国」辞めようとする声（いわゆる「開国」^{かいこく}）が出てきた。

その「開国」の声に猛反発してきたのが徳川御三家の一つ、「水戸徳川家」であった。水戸家は幕府や全国の諸藩にさかんに「尊皇攘夷」^{じようい}を叫び続け、諸藩は大なり小なりその「唾液」を被ることになる。

ちなみに「尊皇攘夷」の「尊王」とは「王を尊ぶ」こと、「『開国』」という軟弱な幕府より京都にいる天皇を大事にせよ」と言うことだ。

「攘夷」とは「鎖国を続けよ」と言うことである。

一言で言ってしまうと幕府よりもこれからは天皇の力に頼って鎖国を続けようぜ」って事。

「水戸家」の飛ばした「尊皇攘夷の唾液」がただの「唾液」でも迷惑だけど、それが可燃性の強い「油」だったからなおさら迷惑だ。幕末当初の日本は、「開国」政策を取ろうとする幕府に対する不穏な気持ちを全国の諸藩が持っていたのである。

ここでやっと「吉田松陰」が出てくる。彼は長州にいる「水戸家の唾液」を被った者たちを集めて彼らに「火をつける」役目を果たしたのだ。

吉田松陰によって長州に上がった「攘夷」の大きな火はやがて「倒幕」^{とうぼく}という炎に変わり、日本は大きく変わることになる。

吉田松陰がいなければ長州も「反幕府」の動きにならず、幕府も続いたのであろうというのが、はるちゃんの意見だ。

以上、はるちゃんの説明。

「かっちゃんたち幕府の人間から見たら『吉田松陰』は諸悪の根源、

A級戦犯モノよ」

普通の山口県人でも「NG」なのに、それほどの人物ならもつと「NG」だろう。

「私の先祖の悪口を言わないで下さい、悲しくなります」

はるちゃんの説明に、幸子さんは抗議する。確かに私も幕府の悪口言われたら、ちょっと嫌だしな。

「あ……、いえ……別にそんなつもりは……」

はるちゃんが頭を下げて謝る。

「つまり私の家族に『許されない』付き合いだから、東京に戻っても家には戻らず、二人で暮らすことにしたんですね？」

「そうです、遼くん言うには次々と『既成事実』を作っていけば、家族も折れるだろうと……」

なるほど、交渉しても無駄だから、最初から二人で暮らしてしまえと強攻策に出たのか。そういう無理に出るところが御徒家のDNAだな。

「お兄ちゃんは今、何でお金を稼いでいるんですか？　サラリーマン？　それとも……」

「愛知で知り合った、和菓子屋さんで働いています。実家の事情も理解しているそうです」

和菓子屋ね……、お兄ちゃんにサラリーマンが勤まるわけ無いしな。

ちなみにお兄ちゃんと幸子さんが出会ったのも愛知だそうな。

「まさに現代の『ロミオとジュリエット』ですね……」

亜由美、そんな縁起でもないことを言わないで！

「ジュリエットじゃないですよ、私の実家は別に反対していませんし。それに私たちは一生添い遂げるつもりなんですからー」

東京に戻る前二人は幸子さんの実家へ挨拶に行き歓迎されたらしい。もちろんお兄ちゃんが幕府側の子孫だと知っての歓迎。我が家とは大違いだ。

「でも、今のままでは到底家族の許しを得られるとは思えません。

その点、お兄ちゃんはどういう考えなんですか？」

「そうですよねー、私もそれを心配していたんですけど……、遼くんが大丈夫だと言うんで、信じています」

大丈夫って何が大丈夫なのだろう、お兄ちゃんには何か秘策でもあるのだろうか？

「……………」

いきなり幸子さんが口元を押さえた。

第十八話 幸子さん（二）

「どうしました？」

と、私が尋ねると

「ト、トイレ……」

よろめきながら立ち上がり、幸子さんはトイレへと入っていった。しばらくして苦しそうなうめき声が。もしかして何か吐いている？

「吐いているよね……」

「これは吐いているよね……」

私とかわちゃんは顔を合わせる。

「もしかして……」

はるちゃんがトイレのほうを見る。

「はるちゃん、何か分かったの？」

しいちゃんが尋ねるとはるちゃんは右手を腰に当て、

「二日酔いだ！」

と、叫んだ。

二日酔い？ 酔っているようには見えなかったけどな。というかもう夜だよ、二日酔いが夜まで続く？

「二日酔いは無いと思うけどな……」

しいちゃんも同じことを思っていたようだ。

「ボディブローに対する拒否反応、お腹に対する過剰すぎる防衛意識、そしてこの嘔吐。この三つから考えられるのは一つしかありません」

亜由美が何か分かったようだ。口調がですます調なので、紅茶好きの警部さんに見える。

「え、何なに？」

「妊娠です」

えっ、妊娠！？

「今トイレで吐いているのはつわりです」

妊娠だとしたら亜由美が出した三点全て納得にいくがまさか……。お兄ちゃんはこのことを知っているのだろうか？ 知っていて先ほど幸子さんが言ったような強攻策に出たのか？

そんなことを考えているうちに激しく水の流れる音がして、幸子さんがトイレから出てきた。

「ごめんなさい、いきなりトイレ借りちゃって……」

「幸子さん」

「はい？」

出てきたばかりの幸子さんに亜由美が尋ねる。

「あなた、妊娠していますね？」

「うぐっ！」

幸子さんの驚きを見て、私は凶星であることを確信した。

「妊娠であればあなたの今までの言動全てに説明が付きまします。なぜ、お腹を殴られたくないのか、なぜトイレで吐いているのか」

「ち、違うもん、具合が悪いだけだもん」

必死で弁解する幸子さん

「『すでに子供ができています』という事実、かつちゃんのお兄さんの実家に対する有効な交渉材料にもなります。お兄さんはそれも計算に入れた上で、東京に戻られたのでしょうか」

亜由美の言うことが確かならば、お兄ちゃんは考えた上で行動したのか、それともまったく考えずに行動したのか（行動しているんな意味が入っているからね）分からない。

「ち、違うもん、遼くんはこのことは知らないもん」

お兄ちゃん知らない？ でも今の発言って……。

「……」

「……」

部屋にしばしの沈黙が訪れる。

「……やっぱり……妊娠しているんですね」

「……やっぱり……そうだよねえ？」

「そうだよねえ？」と聞かれても、こっちはどう答えていいもの

か……。

「おや、病院へは行っていないのですか」

「まだ、行ってない。でも自分で検査したらそういう反応が出たから……。きつと子供がいるんだろうなって……」

最近はお医者さんに行かなくても自分で分かるようになっていないからな。

「病院で検査しない限り百パーセントとはいえませんがその確率は高いでしょう。どうかお体を大切になさってください」

「あ、どうもありがとうございます」

互いに頭を下げる亜由美と幸子さん。

「お兄ちゃんはこのことまだ知らないんですね？　伝えるんですか」

「落ち着いたので、そろそろ言おうかと考えていたんだけど……、機会を得ずについて……」

「どうやら「隠そう」という気は無いようだ。」

再び、かわちゃんの家のチャイムが鳴った。

「あ、はい」

扉を開けると男性の声が。

「幸子が来ていると思うんだが……」

えっ、お兄ちゃん！？

「お兄ちゃん！」

私がいることにお兄ちゃんは驚きを見せる。

「真……！　知か……」

お兄ちゃんは部屋を眺めると、どうやら状況を察したようで

「幸子から俺たちのこといろいろ聞いていたのか」

「ごめんね、全部しゃべっちゃった……」

許しを請う子犬のような視線を送る幸子さん。ほんとうにされるかどうかわからないボディীবローに怯えている話したときは、まるでヘタレな国のようだと思った私だが、妊娠していると聞いて、全部しゃべるわけだと納得した。というか幸子さんの妊娠の

こと、お兄ちゃんに伝えないと。

「お兄ちゃんに一つ、言っておきたいことがあるの」

「なんだ、幸子のことか？」

部屋の中に入り、扉を閉めるお兄ちゃん。

私は幸子さんを見て目で妊娠について話すことを伝える。

幸子さんはそんな私を見て理解したのかしていないのか分からないけど、笑顔で頷いた。

「幸子さんは妊娠しているの」

「ええっ！？ あ、痛っ」

驚いて体のどこかを扉にぶつけてしまったようだ。

「まだ病院に行っていないから確かなことは言えないけど、妊娠している可能性が高いってことだけ言っておくわ」

呆然とした表情でお兄ちゃんは幸子さんを見る。

「驚いた？ でも事実なのお兄ちゃん、受け止めて」

「え……、ああ……、うん……」

お兄ちゃんは右手で頭を小さく掻く。

途中まで食べていたカレーがすっかり乾いてしまった。みんなの分もそうだ。話しているのは私とお兄ちゃんなのだから、私たちに遠慮せず食べるというのに。

「遼くん、明日休みだね。病院に行きたいな」

「ああ……」

幸子さんの問いかけにもうわのそらだ。

「こらーっ！」

いきなりかわちゃんが、お兄ちゃんの背中を叩いた。

「げふっ、がふっ、ええっ!？」

いきなり叩かれて焦るお兄ちゃん。

「ボーツとしてないで、しっかりしろー！」

「分かった、分かったから……」

咳が止まったところで、お兄ちゃんは背をただし、

「本当なんだな」

と、幸子さんに確認する。こくんと頷く幸子さん。

お兄ちゃんはそのを見て玄関に座り、天井を見て呟く。

「俺が父親かあ……」

私もお兄ちゃんのように天井を見た。扉を開け閉めしているうちにどこからか入ってきたのだろう。小さな虫が一匹電灯に向かって飛んでいる。

「ねえ……、お兄ちゃん」

「なんだ!？」

「私は妊娠の件も含めて今日のことをお祖父ちゃんたちに話すつもりはないけど、いいよね」

お兄ちゃんの作戦だと、既成事実を積み重ねた上で家族に話すはずだからな、私から言ってしまうては台無しだろう。

「家には近々行こうと思っっていたんだが……、しばらく延期だな」
妊娠なんて計算外のことだったのだろう。延期は作戦の練り直しと言ったところか。

「お兄ちゃん」

「なんだ」

「お兄ちゃんはもし家族が反対するならば、御徒の家を継がないつもり?」

「最悪の場合はそうなるな」

想定内の質問だったのか、さらりと答える。

「安心しろ、『お前が継げ』なんて俺は言わないから」

お兄ちゃんが継がない場合、御徒の家は私が継ぐ可能性が高い。

お兄ちゃんはその言わなくても、お祖父ちゃんたちはきつと言うだろう。

部屋の中を気まずい空気が流れている。

「幸子、そろそろ帰るぞ」

「え、うん……」

幸子さんはお腹をさすりながら、お兄ちゃんのいる玄関へと歩く。
「しかし、それにしても」

「うん、なあに？」

幸子さんのお腹を見てお兄ちゃんが眩く。

「たった一回しかしていないのに、子供ができちまうんだな」
「なっ！」

この部屋にいる全員がきつと同じことを思っただろう、代表して私がツッコまさせていただく。

「か、回数の問題じゃないでしょ！ 馬鹿じゃないの！！」
回数の問題じゃなくて、避妊せずに「ほにゃらら」「ふにゃらら」したかどうかの問題でしょ。

「ほにゃらら」「ふにゃらら」って何かって？ よい子はお母さんに聞いて見なさいよ！ ……聞くんじゃないわよ！

私のツッコミを聞いて、しいちゃんが笑い出した。みんなもそれに続いて笑い出す。

大爆笑の中、お兄ちゃんと幸子さんは部屋を出て行った。

「もう、お兄ちゃんったらー」

「かっちゃんのお兄ちゃんって面白い人だね」
しいちゃんの目に、涙が浮かんでいる。

「面白いかわよ、言っていることと悪いことの違いが分からないんじゃないの」

「そうかな、私は場を和ませるための冗談かと思ったけど……」
「え……」

そうだよな、愛し合っている二人だから、一度だけなわけじゃないよな………って回数の問題じゃないっていうの。

その夜はかわちゃんの家に泊まり、朝に幸子さんがくれたカレーを食べ、家に戻ったのは翌日の正午を過ぎた頃だった。

「ただいまー」

「あら、真知ちゃん。お帰りなさい」
出迎えてくれたのはお母さんだ。

「そうそう、お祖父ちゃんしばらく家にいないからね」

「え、どこか出かけたの」

「修行を伸ばした遼くんの雄姿を実際この目で見たいんですって」
ええっ!?

第十九話 兄の味方

お祖父ちゃんが、お兄ちゃんに会いに愛知へ行ったって!?　ま
ずいじゃない!

「忘れ物した。取りに行ってくる」

私は家には上がらず、すぐにもと来た道を引き返した。

(愛知に行ったらお兄ちゃんが東京にいたことがバレる!)

お兄ちゃんと愛知の親戚との間でどう話がついているのか分からない。だから最悪の事態を考えないといけない。もちろん、お兄ちゃんが東京にいたことがバレることである。

不忍通りを歩いて来たけど、急いでいるので日暮里駅から山手線に乗車。巢鴨駅すがもで降りて国道十七号線を南へ走る。

右に曲がって一本入った路地の通りにお兄ちゃんとかわちゃんの家はある。

四階まで駆け上ってお兄ちゃんの家インターホンを押す。

「お兄ちゃん、幸子さん」

しかし返事はない。まるでただの屍のようだ。

「そうか……、病院行っただ……」

私は玄関の前で座り込む。隣のかわちゃんは既にアルバイトに行っている、中に入って時間をつぶすわけにもいかない。お兄ちゃんたちが戻ってくるまで、どこで時間をつぶそうか?

一階したまで降りると幸い部屋の主が路地を歩いているのが見えた。

「あ、真知ちゃんだー」

幸子さんが私を見るや走って来る。

「おい、走っちゃ危ないだろ」

お兄ちゃんは幸子さんを気遣って追いかけてくる。

しかし幸子さんの方が速かった。私に抱きついて。

「おめでただよー、三ヶ月だよ」

「おめ……でた?」

この状況で何が目出度いのだろう。

「そう、お腹に赤ちゃんがいるんだよ」

そうか、幸子さんは妊娠しているのだった。

「うわーっ、よかったですね」

「ありがとうございます、真知ちゃん」

微笑ましい表情で互いに抱き合う私たち。

……って喜んでいる場合じゃないっ！

「祖父さんが愛知へ！？」

「そうなの、今朝早くに家を出たみたい」

お兄ちゃんの家にあがった私は早速事態を説明する。

お兄ちゃんの家は冷蔵庫とか掃除機といった暮らしていくための家具といった類が揃っていない。コップも紙コップだ。

「お兄ちゃんは本家の人に何か言った？」

愛知の親戚は一族の本家で、御徒家はその分家になる。

「いや、何も言ってない。修行の延長はここから俺が祖父さんに電話したんだ」

何も言っていないということは、本家にしてみればお兄ちゃんはずっと家に帰ったことになっている。当然お祖父ちゃんがお兄ちゃんを訪ねて本家に来た場合、本家としては狐につままれたような事態になるであろう。

「だとしたら今日にもお兄ちゃんがいなくなることがバレちゃうわね」

お祖父ちゃんのことだ、今日のうちに家へと引き返すだろう。

「遼くん……」

幸子さんが心配そうな顔でお兄ちゃんの肩に触れる。

ズボンのポケットが振動したのはそのときだった。

「はいもしもし」

『真知ちゃん、大変よ』

電話の主はお母さんだった。

「なあに、どうしたの？」

『遼くんが行方不明なの』

「えっ、お兄ちゃんが!？」

事態の早さに私は驚いた。

『そうなの、お祖父ちゃんがさっき愛知の家に着いたんだけど……』
お兄ちゃんに会いに愛知の本家に行ったお祖父ちゃん。しかし本家にしてみればお兄ちゃんは当然東京に帰っているはずで、本家から事情を聞いたお祖父ちゃんにしてみれば驚きであろう。だってお兄ちゃんは現に家に帰っていないのだから。

『本家の話では遼くん、女の人を連れて東京行きの電車に乗ったんだって』

幸子さんの存在まで明らかなものとなってしまった。

『遼くんどうしたんだろう……、女の人にだまされたのかな?』

「お母さん、お兄ちゃんに限ってそんなわけが無いでしょ! とりあえずお祖父ちゃんが戻ってきたらまた話しよう。じゃあね」

電話を切ってお兄ちゃんの行動がバレたことを伝える。

「もう分かったのか」

覚悟していたのか、お兄ちゃんに動揺の色が見られない。

「幸子さんのことも家のみんな知ってるよ」

幸子さんが肩を上げる。まるで私が幸子さんを叱っているみたいだ。

「じゃあもう行くしかないな……」

「行くなってどこへ?」

「家に」

「えっ?」

家に行く?

「家に行って幸子のこととか……、全部話すよ」

「ええーっ!」

お兄ちゃんが長州の人と一緒に暮らしていることを知ったら……。
「家が大変なことになるわよ!」

「だからって隠しているわけには行かないだろう」

お兄ちゃんの目には迷いが無い。

「確かに……」

下手したら搜索願まで出しかねない。子供じゃないのに。

「でも幸子さんが長州の人だって知ったら……」

絶対に反対されるに決まっている。

「そのときはこの家に戻って二人で暮らす。それだけだ」

家を借りたのはきつとこのためだろう。

「お兄ちゃんがなくなったら、家の跡継ぎはどうなるのよ！」

これが重要な問題だ。長州の人を嫁に迎えようとする跡継ぎをお祖父ちゃんたちは決して認めないであろう。そうしたら御徒和菓子店を継ぐ者はいなくなってしまう。

「それはしょうがない。俺と幸子のことを認めない以上俺は後を継げない」

「そうでしょ。どうなるのよ」

「最悪潰れてもいいんじゃないか？ 時代だよ」

お兄ちゃんは意地悪そうに微笑んだ。

「えっ!？」

家が潰れる？ 跡継ぎがないから家が潰れる？ いくら時代の

せいだからって、なんて寒い時代なんだろう。

「遼くん、そういうわけにはいかないでしょう」

幸子さんがたしなめる。

「しょうがないだろう。家の人間は長州の血が入るなら家が潰れてもマシだと考えているんだから」

確かにそう考えていてもおかしくは無い。

「それについては何も反論できないけど……」

「まあ潰れるのはしょうがないとして」

お兄ちゃんは改めて私のほうを見る。

「現実的に考えてみたら……真知、お前が家を継ぐことになるな」
「えっ!？」

私？ 私が家を継ぐの？

「嫌よ、私和菓子なんて作れないもん」

愛知の本家へ修行になんて行きたくない。

「別にお前が作る必要ないだろ。正確にはお前の旦那が跡継ぎとなる。いわば婿養子だな」

「えっ、旦那が!？」

つまり私は和菓子職人と結婚しなければならないということか。

「嫌よ、そんな決められた結婚」

結婚するなら私が決めた人とするわよ。

「そうだな、そんな結婚真知はしたくないよな……」

お兄ちゃんは私の頭を軽く叩いた。

「だから、真知は俺の味方になってくれるよな」

「当たり前じゃない」

なんだか上手くはめられたような気がするけど、私はお兄ちゃんの味方よ！

第十九話 兄の味方（後書き）

三週間更新無しで申し訳ございませんでした！
また今週からよろしく願います。

第二十話 お泊りの夜に

お姉ちゃんたちはみんなで河原先輩の家にお泊りしているので、私たちは結衣ちゃんの家にお泊りです。

はい、私は妹の真耶です。

近くの商店街で牛肉が安かったので、今夜は思い切ってすき焼きにしてみました。

「先輩たちはみんな集まって何をしているんだろうね」
割り下がすっかり染み込んだ牛肉を鍋から取りながら亜美ちゃんが尋ねます。

「ええっと、伊井国先輩の初恋の話かな」

豆腐を器用に取りながら結衣ちゃんが答えます。

「恋かあ……」

亜美ちゃんが楽しそうに呟きます。

「そういえば二人って彼氏とか作ったことある？」

仲良し女の子が三人集まれば何とやらと申しますか、亜美ちゃんのいきなりの質問です。というかこういう質問ってするのにまだ時間が早いんじゃないでしょうか？ もっとお風呂入った後、そうみんなで寝るときにするものです。

「私はそういう人いなかったなあ……」

牛肉をはふはふさせながら結衣ちゃんが答えます。

「私もいなかったよ、亜美ちゃんは？」

私が尋ねると、亜美ちゃんはきりっとした眼差しを私たちに向けてきました。

「私はアイドルを目指しているのよ。そんな私が一人の男に心奪われるわけが無いじゃない」

……亜美ちゃんアイドル志向強いです。いつからそんな考えを持っているのでしょうか。そういでは学生時代に似たような思考を持った小さな漫才師さんがいましたね。「俺はみんなの俺なんだ」っ

て。

「みんなゼロなんてつまらない、それじゃあ今好きなタイプの人の話をしようよ。もちろん、私は抜きで」

亜美ちゃん、自分だけ圏外に置くトークテーマはズルいです。

「うーん……」

結衣ちゃん、悩んでいます。真剣に考えているのかそれとも思いつかないのか。

「さっきは結衣ちゃん先立ったから、今回は真耶ちゃんね」

「えっ、私!？」

困りました。好きなタイプの男性なんて「言って」と言われて「分かりました」って答えられるものではありません。一人芸能人の名前を挙げてそれで集約できる人が羨ましいです。

「えーっとそうねえ……、背は高いほうがいいかな?」

「髪は? ロングとか、茶髪とか」

亜美ちゃんが楽しそうに質問します。

「色は黒いほうがいい。あと長いのも……、思い切って短めに切ってくれたほうが……」

「体格はがっちりしたほうがいい? それともほっそり」

「うー……、がっちりしているほうが……」

だんだん私の頭の中でタイプの男性像が具現化してきました。…

…って出てきたのは誰? お兄ちゃん?

「お兄ちゃん……」

思わず私は呟いてしまいました。

「えっ? お兄ちゃん」

亜美ちゃんの箸から白滝が滑り落ちます。

「あ、ううん。なんでもない」

私は慌てて撤回します。

「好きなタイプ! 閃いた!」

先ほどまで悩んでいた結衣ちゃんが突然大声をあげました。

「なあに、結衣ちゃん思いついた?」

「寺門康文さんよ、俳優の」
てらかど やすふみ

ええっと紅茶好きで小さいことは気にしちゃう（決してワカチコなんて言いません）警部さんの相棒で有名な方ですよね。あ、でも刑事辞めて海外行っちゃったから元・相棒ですか。しかし結衣ちゃん、よく考えました。一言で現せるなんて立派です。

「ふあふ、結衣ちゃんも体格のふい人が好みなのふえ」

亜美ちゃんが椎茸を銜えながら言います。熱いのなら息をよく吹きかけてからではないと口やけどしますよ？

「なんか私たちだけ答えるのってずるくない？」

結衣ちゃん答えた後で当然の疑問です。

「ここはやっぱり亜美ちゃんも言わないと……」

お茶碗片手に私が亜美ちゃんの顔を覗き込みます。

「何によ、私はアイドルひょ？ 一人の男ひい気を取られている場合ひやないんだってば」

亜美ちゃん、まだ椎茸を飲み込めてなかったんですね。

晩御飯も終わり交代でお風呂に入った後は仲良く就寝です。とってもすぐに寝付けるわけではないので、天井見ながら三人でお話です。といっても好きな人の話はもうしてしまいました。あと定番のテーマって何があるんでしょ。

あ、もちろん足は北西の方角に向いています。御徒家代々の家訓なのです。

「ところで二人はアルバイト楽しい？」

電気を消すなり一番左で寝ている亜美ちゃんが私たちに尋ねてきました。

「私は楽しいよ。たまーに根暗なお客さんが来てどう対応しているか分からないけど」

真ん中の結衣ちゃんがほんとに楽しそうに答えます。根暗なお客さんは私もどうしていいか分からないですね。これは家族含めて周囲の人間が皆明るいからでしょうか。

「私も結衣ちゃんと同意見かな？　それほど嫌なお客さんがいるわけじゃないし……」

中には店員につきまとう人もいるそうですが、幸いなことに私たちはそのような人に会っていません。まあまだ働いて一ヶ月しかたっていないのでこれからのことはなんとも言えないですけど、そうはならないと信じてたいです。

「そう、それならよかった……」

亜美ちゃんが安堵の声を上げます。

「このアルバイト紹介したの、私の従姉妹の姉さんだってしってるよね」

「うん、知ってる」

亜美ちゃんの二つ目の質問に私たちは同時に答えます。私がソプラノで、結衣ちゃんがアルトです。

「その姉さんがね」

「うん」

「また新しいアルバイトを見つけてきたの。募集枠はちょうど三人なんだってさ」

三人とはまるで私たちに入って欲しいと言っているようなものじゃないですか。姉さんって人は私たちのことを知っていて亜美ちゃんに話を持ちかけるのでしょうか？　それともただの偶然？

「三人ってことは私たち三人全員が受かるって可能性は無いわけだよね」

結衣ちゃんがもったもたをいいます。そうでした、募集するからには面接と言うものがあって、募集イコール採用ではないのです。

「それがさ、そのアルバイトって三人一組なんだって。仲のいいほど良いらしいよ」

「へえー」

結衣ちゃんが感心した声を上げます。三人一組なんて一体どんなアルバイトなのでしょう。楽しみです。

「もしやりたいんだったら私が姉さんに話しておくよ」

アルバイトの内容は分からない（そもそもなぜそれを亜美ちゃんが話さないのかも不思議な話ですが）ですけど三人一組でできるなんて楽しみです。どこかのクイズ大会にでるのでしょうか？ あ…

…、それだとすでに私たちは年齢オーバーですね。

「はい、私やってみたい」

結衣ちゃん、元気そうに手を挙げました。暗闇の中ですが分かります。

「私もやってみようかな」

内容が分からないのがちょっと気になりますが、亜美ちゃんの姉さんの紹介です。きつといいものに決まっているのです。

「え、二人ともありがとう。早速明日姉さんに話してみるよ」

夜が明け、朝ごはんを食べ終えた私と亜美ちゃんが結衣ちゃんの家を出たのは正午を過ぎた頃でした。

「ねえ、あれ御徒先輩じゃない」

「あ……、お姉ちゃん」

亜美ちゃんに促され見た方向からお姉ちゃんが必死の顔で走ってくるのが見えます。

「お姉ちゃん」

「……」

呼びかけても私を無視して走り去っていきました。気が付かなかったのでしょうか。

「どうしたんだろう、一体？」

亜美ちゃんが既に角を曲がって見えなくなったお姉ちゃんの後姿を目で追います。

「忘れ物でもしたのかな……」

家に帰るとお母さんが困った表情を浮かべながらお昼ご飯の支度をしていました。

「ただいま」

「あら、真耶ちゃんお帰りなさい。真知ちゃん見なかった」

「さっき駅へと必死に走ってったけど」

「そう……」

そう言うとお母さんはため息をついて居間に座りました。

「ねえ、何かあったの？」

「何も無いのよ、『ただお祖父ちゃんが遼くんに会いに行った』と言ったの、それだけ。それなのにあの娘ったら家を飛び出しちゃって」

確かにお母さんの言うとおりでお姉ちゃんが家を飛び出す要素がまったく見られません。やっぱりただの忘れ物なのでしょう。

……と考えていた私はなんて能天気なんだと思ってしまいました。

第二十一話 家族会議

お祖父ちゃんが帰ってきたのは午後六時を過ぎた頃だった。

「一体遼太郎はどこ行ったと言うんじゃ……」

お祖父ちゃんを初め困惑顔する我が家族。

私は知っているけど私の口から言うわけにはいかない。「待って、みんな」と私は二階に上がり携帯電話をとる。

コール音三回でお兄ちゃんが出た。

『もしもし……、真知か……』

「お祖父ちゃん帰ってきたよ。みんな居間に集まってる」

『そうか、すぐに家に電話する』

そう言うとお兄ちゃんは電話を切った。一分もせずに家の電話が鳴る。

「もしもし……」

電話に出たのはお母さんだった。

「えっ！ 遼くん！？」

お母さんの叫び声に家族全員が色めき立つ。

「なに……、今東京にいるの？」

お兄ちゃんは自分の居場所まではばらさない。そんなこと言おうものなら速攻で家に上がりこまれるだろう。

「あ……明日なのね、明日帰ってくるのね」

家族の出方次第なら本当に明日帰ってくることになるだろう。もっともそんなに甘くは無いと思っている。

電話を切るとお母さんが電話の内容をまとめて話した。

「遼くん、東京のどこかにいるんですって。それで……明日家にくるって」

「それは帰ってくるって意味なのか」

お父さんが尋ねると、お母さんは困り顔で。

「そうとは言っていないわ……」

「ううむ……」

お父さんも困ってしまった。

お兄ちゃんは何を話すかは私は大体知っている。けどそんなこと私の口から言えるわけが無い。もっとも余計なことまで言っちゃうかもしれないし。少なくとも、お兄ちゃんが家に来るまでは困り顔の一員になっているのが賢い選択だ。

「明日になれば全てが分かるのじやろう？ 悩んだってしょうがない。理沙さん、飯にしてくれい」

お祖父ちゃんの言葉にお母さんは台所へと向かう。こうして一応御徒家は日常を取り戻した。

翌日――私は朝から胃がキリキリしてならなかった。授業中にもシクシク痛み、しいちゃんから「大丈夫？」と心配される始末。心配してくれるのは嬉しいけど私の家が解決しなければならぬ問題なのよね、これって。

そしてとうとうその日の夜がやってきた。家に来たのはお兄ちゃん一人。幸子さんはかわちゃんと一緒に千石せんごくの家で待機している。

居間には私も含め家族全員がそろっている。この部屋に家族全員が座るなんて数年ぶりなんだけど、こんな形で現実のものとなってほしくはなかった。

「遼太郎、そこに座りなさい」

お祖父ちゃんの指示に従い、お兄ちゃんは私の右隣に座る。

「遼太郎、お前東京に帰って来ているそうじゃないか。それなのになぜ家に戻ってこないんだ。本家に嘘までついて……、一体今どこでどうしているんだ」

お祖父ちゃんの問いにお兄ちゃんは淡々と答えた。

「それは言えない」

お母さんがお兄ちゃんとお祖父ちゃんそれぞれの前にお茶を置くも二人は無反応だ。

「本家が言うにはお前女の人と一緒にだそうじゃないか。そいつと一緒に暮らしているのか」

「ああ、そうだ」

二人の言葉には他者の言葉を挟ませない迫力がある。

「それは目出度いことじゃないか。我が御徒家の跡継ぎに嫁ができるというもの、どうしてその女の人を連れてこないんだ」

お兄ちゃんはためらわずに一気に答えた。というより正確には質問を質問で返した。

「相手が長州の人間でもか？」

居間に訪れる無言の瞬間――。何分くらい経っただろう。とても長く感じられる無言の時間。私がそうおもっているだけで、実際はそんなに経っていないのかも知れない。けど、時計の秒針の音で一分ぐらいいは経っているかも知れない。

沈黙を破ったのはお祖母ちゃんだった。

「チョーテキ!!!」

悲鳴のようなかん高い叫び声を上げるお祖母ちゃん。「チョーテキ」？ ああ、「朝敵」か……。

お祖父ちゃんがちやぶ台を右こぶしで激しく叩いた。お茶が倒れて台を濡らすも誰も拭こうとはしない。

「き、貴様！ 長州の女と一緒に暮らしているじゃと！」

お祖父ちゃんの激高に対し、お兄ちゃんは冷静である。

「そうさ、だからここには帰ってこなかった。別のところで二人で暮らすことにしたんだ」

「遼太郎！ 長州の人間が我々幕臣に対したむごい仕打ちを忘れたわけではないだろうな！」

「そんなこともう昔の話だろう。そもそもなんで薩摩は大丈夫で長州はダメなんだ。同じ討幕派じゃないか」

「ええい、何度も言わせるな！ 薩摩だけは特別なんじゃ！」

簡単に言ってしまうと薩摩は私たちご先祖様の大恩人なのです。詳しく知りたい方は1stの第十三話をご覧ください。

「幸子は確かに長州の人間かもしれないけどな！ あいつが幕府を倒したわけじゃないんだ。もういい加減長州だの土佐だの会津だの出身地で差別するのやめないか」

あ、お兄ちゃん幸子さんの名前言っちゃった。冷静だと思っただのに結構熱くなっているのね。

「それでも長州は朝敵でしょう。朝敵に家の敷居をまたがせるわけにはいかないわ」

間に割り込んできたのはお祖母ちゃんだ。なぜ長州が朝敵かは十六話を参照してね。

長州だけでこの怒り様だから、吉田松陰の子孫だと知ったら卒倒ものだろう。もちろんそんな情報伝えるわけ無い。（お兄ちゃんも知っているかどうか微妙だからね）

「遼太郎、その娘と別れるわけにはいかないのか」

続いてお父さんが口を挟む。この人もやはり頑固な反対派だ。というか明らかにお兄ちゃんの味方になっているものはいない。私はというと、いろいろ内緒にしているモノがあるから、傍観者の立場だ。

「俺は絶対に別れないよ、親父。幸子のためにも、お腹の子のためにも」

お兄ちゃん、ついに言っちゃった！ 幸子さんの妊娠のことを。

「なんと、その長州娘は妊娠していると言うのか！」

お父さんが驚きの声を上げる。

そして放たれたお祖父ちゃんの冷たい言葉。

「墮ろせ！ なんととしても墮ろして別れろ。我が御徒家に長州の血などいらん」

……オロセ……？

お祖父ちゃんは何んてことを言うのだろう。テレビゲームでバトルに連れて行く仲間を決めるわけではないし、人生ゲームで子供の

ピンを車に乗つけるわけではないのだ。これは人一人いや場合によつては二人の命がかかっていることなのに、そんな簡単に墮ろせと言っているものなの？

「ちよつと、お祖父ちゃん！ 言っていることと悪いことがあるんじゃないの！」

我慢ができなくなった私は思わず叫び、ちゃぶ台を叩いた。こぼれたお茶がぬるく感じられる。

「うるさい！ お前はだまっとれ！！」

「黙らないわよ！ 墮ろすって簡単なこと言わないでよ。それでその人が一生赤ちゃん産めない体になったらどう責任取るのよ！！」

私の問いにお祖父ちゃんは答えを用意していたかのように答える。
「金なら払うわ！ 金で長州の血が入るのを防ぐのならそれで十分じゃ！」

お金で解決ですって！ 畑で取れた野菜を持っていって「誠意」って言えば許してもらえらると思っているの！？

「どうやら話は平行線のようにだな。帰る」

お兄ちゃんは立ち上がると

「俺と幸子の仲を認めてもらえるまで俺はこの家にはもう帰らない」
そう言い放って玄関のほうへ出て行った。

「当然じゃ、長州娘と暮らすものなんぞ我が御徒家の敷居は跨がせん！ 跡継ぎも白紙じゃ！！」

お祖父ちゃんの言葉は予想通りだったのだろう。お兄ちゃんは何も反応を見せなかった。

「お兄ちゃん！」

私が追いついたとき既にお兄ちゃんは靴を履いていた。

「真知……、すまない」

私に一言告げると、お兄ちゃんは玄関を空け外へ出て行った。五月の風が玄関に入ってくる。夜風に私は思わず身を震わした。

「理沙さん、玄関に塩を撒きなさい、塩を」

居間からお祖父ちゃんの声が聞こえてくる。しばらくしてお母さ

んが塩を持ってきた。

「お母さん……、撒くの？」

私の問いにお母さんは

「形だけね、形」

と、塩を一つまみして玄関に投げた。

「お母さん……、お母さんはどう思っているの？ お兄ちゃんと長州の人が一緒になること……」

「私は遼くんが選んだ人ならそれでいいと思うけど……」

私は味方がいることに心の中で喜んだ。

「でもね、真知ちゃん。幕府と長州の問題って簡単じゃないのよ。真知ちゃんも知っているでしょ。会津あいづと長州がまだ和解していないこと……」

会津は戊辰戦争最大の激戦地で新政府側に最もひどい目に遭った所である。住民レベルで和解の動きはあるものの、まだ現実には至っていない。

「会津だけじゃなく、江戸に住んでいた幕臣もひどい目に遭ったの。ある日突然屋敷を追い出されて今までの何分の一の給料で暮らせと言われて……、武家の娘でありながら身を売るまで落ちぶれた人もいるらしいわ。そういう人たちも長州や薩摩に恨みを持っているでしょうね」

私の家は薩摩の人に救われたので、幸いにも維新後も一つの財産を保っている。

「私たちは恵まれたほうなのよ」

お母さんの視線の先にはお兄ちゃんが出て行ったばかりの玄関があった。

第二十二話 敵陣突入

お兄ちゃんの仲は認められることなく家族会議は決裂に終わった。結局お兄ちゃんは幸子さんの待つ千石の家へ帰ってしまい、お祖父ちゃんのかんかんに怒っている。

お祖父ちゃんの「墮ろせ！」や、お祖母ちゃんの「チョーテキ！」そしてお母さんの玄関での話を聞くに簡単に解決できる問題ではない。

このままでは本当にお兄ちゃんが跡継ぎの座から落ちてしまう。そしてその責任は長女である私に回ってくる。それはなんとしても阻止しないと。

「ねえお姉ちゃん、入っていい？」

真耶の声だ。

「いいよー」

私が言い終える前に真耶は扉を開けて私の部屋へと入ってきた。

お母さん似のため、目が禿げた落語家さんのように細い妹は、私の前に座るなり

「お姉ちゃん、この前急いで谷中銀座走っていたでしょ」

と、切り出した。

「え、ああ……そうだけど、見ていたの？」

私がお母さんからお祖父ちゃんが愛知に行った事を聞いて、それをお兄ちゃんに知らせようと猛ダッシュで駆け抜けたところを見られたのだ。

「お母さんが『お祖父ちゃんが愛知に行った』って言ったらすぐに走って言っちゃった、って言っていたけどそれと関係あるの？」

「え……、それは……」

真耶は感がするどい。まあここ最近の流れを見る限り鈍い人でも感づいちゃうかもね。

「真耶はどっちの味方なの？ お兄ちゃん？ それともお祖父ちゃ

ん？」

私が尋ねると真耶は「うーん」と暫く唸ったが。

「私はお兄ちゃんの味方かな。長州とか幕府とか関係ないでしょ。もう二十一世紀なんだから昔の恨みなんて無し無し！好きな人を選ばなければいけないなんてうんざりだわ」

真耶は私たちの側か……。私は真耶にお兄ちゃんと幸子さんのことを話すことにした。

「お兄ちゃん……、千石に住んでいるの？　ここから歩いて三十分もしないじゃない」

真耶は驚いた表情を見せる。驚いても目は開かない。

「いい、これは私たちだけの秘密よ。絶対お祖父ちゃんたちに言っちゃだめ、お母さんにも内緒にしている」

「結衣ちゃんや亜美ちゃんたちには？」

「聞かれたら答えるようにして。自分から言わないでね」

「うん、分かった」

真耶は聞き分けのいい子だ。

「あ、そうそうお姉ちゃん。関係ない話だけど私また新しいアルバイト始めるから」

「そう、今度も秋葉原なの？」

「ううん、秘密って言うか私にも今のところ分からない」

アルバイトの内容も知らずによくやる気になるな……。

次の日――私はアルバイトもとい家の手伝いのために店に出ていた。お母さんがレジ係で私が和菓子を袋に入れる役である。

ご近所さんと話しながら仕事をしていると、見知った顔が店に入ってきた。

（幸子さん……！？）

私は思わず叫びそうになったところで、口を手でふさいだ。「お兄ちゃんが一緒に暮らしている女性」の名前が「幸子」であることは家族中が知っているからだ。

「いらっしやいませー」

そんなことは知らずお母さんは幸子さんを普通のお客さんと変わらない態度で迎える。

「えっと、その茶饅頭五個下さい」

幸子さんも普通のお客さんとして接している。自分の結婚を反対されている相手の家なのによくも落ち着いていられるものだ。

「はいはい、バラ売りでいいかしら」

小さいビニル袋に入れるようにお母さんが私に指示した後で幸子さんに尋ねる。

「ええ、そのまま食べますんでそれで結構ですよ」

そう言うとき幸子さんはお腹をさすって

「この子も甘いものが食べたがっているんで」

と、自分が妊娠していることをアピールした。

「まあ、そうなんですか？ おめでとう」

私は初対面の人のように驚いて見せた。

「へえー、赤ちゃんがいるんですか。それなら栄養つけないと」

お母さんは私から袋を取り出して茶饅頭を余計に三個入れる。

「はい、これは私たちからのサービスです。八個だけど五個分の値段で四百円になります」

「うわー、ありがとうございます。はい、これお金です」

幸子さんは笑顔で五百円玉を渡す。

その後も笑顔でお釣りを受け取った幸子さんは店を後にした。

「お母さん、ちょっと休憩に行っていない！」

幸子さんが店を出てまもなく私はお母さんのほうを見る。

「え、ええ……忙しい時間でもないから」

その言葉を聞くや私は店を飛び出した。

「幸子さん！」

店から五十メートルほど離れたところの路地で私は幸子さんに追いついた。

「あら真知ちゃん。こんにちは」

幸子さんは何事もなく笑顔で私を迎えた。

「こんにちは、じゃなくて！」

私は幸子さんに近づき小声で話す。ここは私の家の近所、誰が聞いているか分かったものじゃない。

「どうして家に来たんですか？　うちの家族はほとんどあなたとお兄ちゃんのこと反対しているんですよ？」

幸子さんはちよつと悩んだような顔を見せたが

「うーん……、だからかな？」

「は？」

反対しているから家に来た。あえて敵陣に突っ込んだと言うのだ。「今日の反応を見たところ誰も私が遼くんの手相手だって気づいていないでしょ。気づかないままお客さんと店員さんとして仲良くなっていたら面白いなーと思って」

お母さんや店の人は幸子さんをお兄ちゃんの相手だと知らずに仲良くなっていくという作戦なのである。

「幸子さんその作戦は……」

「上手くいくかどうか分からないけどやってみる価値はあるでしょ」
そう言うと幸子さんは空を見上げて

「遼くんだけ家族の矢面に立たせるわけにも行かないし、私にもできることがあればってね」

「それに……」と幸子さんはお腹をさすった。

「女は赤ちゃんができると強くなるものなのよ」

私は赤ちゃんができたことなんかないので幸子さんの気持ちから分らない。けどかわちゃんの家で見たときのヘタレ加減がないのが感じられた。

幸子さんは微笑みながら谷中銀座のほうへと歩いていった。きっと電車に乗って帰るのだろう。

家に帰るとお母さんがレジを打っていた。

「あら、真知ちゃん。お帰りなさい」

「うん、ただいま……」

幸子さんはこれからここに来ると言っていた。私としてはいつバレてしまうのかどうか気が気じゃない。

どうか次来るときは私のいないときに来てください。と私は心の中で念じた。

第二十三話　なんか氣を使う

六月に入ってもお爺ちゃんたちとお兄ちゃんの対立は解決を見ないまま。幸子さんは何食わぬ顔して週一回のペースで店に来てすっかりお母さんと仲良くなってしまった。

我が家の問題は解決の余地を一向に見ないけど、そればかりに氣を取られてもう一つの問題をすっかり忘れてしまっていた。

そう

「今日も姉小路先輩いないよね？　しいちゃん」

「うん、いないところ見るともうとんかつ定食食べて出て行っただけだね」

はるちゃんの初恋である。

はるちゃん「姉小路先輩はじゃがいも」と頭の中で何度も念じていたけど効果が顕れず、未だに避け続けているという現状だ。

「なーにこそそやってるの？」

私とはるちゃんはいきなり後ろから抱きつかれた。こんなことをする（しかもあえてしいちゃんを避けている）のは一人しかいない

「明石先輩ですか……」

はるちゃんが元氣なく答える。好きな人の元彼女だっただけに複雑な心境なのだろう。部屋の掃除以来二人の関係はなんとなくぎこちないものになっている。

「もう、遥ったら寂しい返事じゃない。こうして可愛い女の子が可愛い女の子に抱きついてるんだからさあ、もっとこう喜ばないと」

明石先輩の抱きつく力が強くなる。ちょっと痛い。

「明石先輩って男には抱きつかないんですよね」

はるちゃんがちよつと苦しそうな声で尋ねる。

「そうだよ、男嫌いだもん」

明石先輩は当然のように答える。まあ予想がついていたけどね。

「どうして嫌いなんですか？ 昔からそうだったんですか？」

はるちゃん機嫌が悪いのかな……？ 明石先輩が突かれたくないところを突っ込んでくる。

「みんなは嫌いな食べ物ってあるかなー？」

明石先輩がはるちゃんの質問に対して質問に答える。質問に質問で答えるなんて爆弾魔のサラリーマンに怒られてしまいますよ。そうして手首だけにされて舐められたり名前を呼ばれたり……。

「えーと、私は納豆が嫌いですね……、あのネバネバした臭いのが許せないです」

「そう、かっちゃん。許せないのってあるよね。私もそんな感じで男が嫌いなよ」

答えになっていないけど上手いこと交わされたような気もする。

「許せたものが許せなくなった……」

はるちゃんが小さく呟く。

「まあまあそんな話は置いといてお昼食べてないんでしょ？ 一緒に食べようよ」

明石先輩はその呟きを聞いてか聞かずともかく私たちを引っ張った。

「分かりました、一緒に食べましょう」

明石先輩と共に食券売り場に向かう私たち。当然のように「とにかく定食」は売切れである。

「今日は私に奢らせて。一社内定が出たのよ」

明石先輩は一個上の四年生。今の時期内定が出てもおかしくは無い。

「そうなんですか？ おめでとうございます。では遠慮なく頂きます」

私は嬉々として「カツカレー」のボタンを押す。

「それじゃあ私も……」

はるちゃんは力なく「定食A」のボタンを押す。今日は麻婆豆腐だ。

「しいちゃんも何か選びなよ。お弁当は作ったけどデザートまでは作っていないでしょ」

「えっ、私もいいんですか？」

お弁当の箱を開けたしいちゃんが喜びの声を上げる。

「当然、しいちゃんだけお弁当だから無し、って言うのは不公平じゃない」

「えーと、それじゃあ……、ホワイトパフェっていうの一度食べてみたかったんですね……」

食堂のデザートのメニューの一つにある「ホワイトパフェ」いたいどういいうものか私は見たことが無い。

「オッケー、ホワイトパフェね」

明石先輩はテンポ良くお金を入れてボタンを押す。

「あ、食券を出すのは後でいいですよ。デザートですから」

「あ、そうだね。それじゃあこの食券はしいちゃんが持つてて」

明石先輩の手からしいちゃんの手へ食券が渡る。

それをなんとなく見つめているはるちゃん。

「ちよつと、はるちゃん元気出してよ。明石先輩に気を使うこと無いでしょ」

私は小声ではるちゃんにささやく。明石先輩と姉小路先輩が付き合っていたのは昔の話で今は恋のライバルでもなんでも無いはずなのだ。それなのに何気を使うことがあるのか。

「うん……、そういうの頭では分かっているんだけど……」

はるちゃんも私が考えていたことを感じたらしい。

私のプレートにカツカレー、はるちゃんのプレートに麻婆豆腐が載せられていく。

「私は今日は定食Bにしようっと」

はるちゃんの隣の明石先輩には鮭フライが載っている。からっと揚げたてだ。

それぞれのメニューを手にした私たちはしいちゃんがあらかじめ取ってある席に向かった。

「遙、鮭フライ食べたかったら私が『あーん』してあげるからね」

「はい……、分かりました」

はるちゃんは力なく答える。

「何よー遙は最近ノリが悪いと言うかおかしいよ？　　いったい何があつたというの？」

何かがあつたのは確かだけどさすがにそれは明石先輩には言えない。だって当事者ですから。

「明石先輩、はるちゃんは将来のダンスサークルについて考えているんですよ」

しいちゃんが助け舟を入れる。

「そうか、遙は部長だもんねサークルのことを考えるなんて関心関心。私はてっきり治らない病に罹っちゃったのかと思ったよ」

治らない病？　それって死に至る病？　はるちゃんの余命は一ヶ月！？　誰か姉小路先輩とはるちゃんの結婚式を挙げてあげてー！

「治らない病っていったいなんですか？」

はるちゃんが淡々と尋ねる。

「いやー、そりゃお医者様でも草津の湯でも治らないと言われている『恋の病』ですよ」

「……！！」

はるちゃんの顔が一瞬にして赤くなった。

「えっ、凶星なの！？　冗談かと思ったんだけど、ほんとに恋？」

はるちゃんの反応に明石先輩が焦りの声を上げる。

「相手は一体誰なのよ。私の大切な遙の心を奪うなんて、許せない！」

明石先輩は身を乗り出す。否定的な態度だ、恋の相手が元カレだと知ったら火に油だろう。

「恋じゃないです！　私はダンスに身を捧げたんです！」

はるちゃんは一生懸命に否定するけど顔がすでにそうではないことを物語っている。「遙ー、修道女のようなこと言わなくていいのよー。素直になりなさいよー」

明石先輩ははるちゃんに頬を摺り寄せる。

「もう、遥のほっぺだったたらあったかいんだから」

「……違うんですってば」

はるちゃんは顔を赤く染めたまま麻婆豆腐をれんげでかき混ぜていく。そのせいか湯気が小さな竜巻に見える。

「まあ相手が誰だかともかく、遥も男に興味を持ったということなのね。さみしいわあ、遥恋したこと無いって言っていたから私の眼鏡にかなった子だったのに」

明石先輩は寂しそうにはるちゃんから離れた。

「まあまあ明石先輩。ここは可愛い後輩の恋を応援しようよ。それより次の授業なんですけど……」

私は会話を逸らすために授業の話をした。次の授業は明石先輩が去年受けたものだ。

「次の授業って高山先生？^{たかやま} あの人自分の応援した球団が勝つ負けるかでもの凄く機嫌が変わるから要注意だよ。機嫌の悪いときはおしゃべり厳禁よ！」

明石先輩から聞かずともその情報は既に私たちのところに入っている。機嫌のいいときなんかいきなり質問に答えただけで「単位」をくれちゃったりするんだから。

こうして昼休みは過ぎていった。今日はなんとかごまかせたけど、はるちゃんの初恋とその相手の件、いつかは明石先輩に分かってしまふことだ。どうすればお互い（はるちゃんと明石先輩）気まづくならずにするのだろうか。そんなとき私にできることはないだろうか。

第二十四話 闘う者たち

梅雨の季節と言うのにそうも思えないほど快晴の中、今日もみんなでかわちゃんの家でお泊りをする事になった。

文化祭の打ち合わせをして以来、たびたび私たち――私、しいちゃん、はるちゃん、亜由美、かわちゃん――はかわちゃんの家に泊まっている。

お酒を飲みながら見る新宿や池袋の夜景は最高だ。

「今日はかわちゃんらしいしいちゃんが買い物当番ね」

「はい、了解しました」

買い物当番とは巢鴨駅前のスーパーへ夕食の材料やお酒を買いに行く役目である。泊まるたびに誰が買いに行くか順番で決めているのだ。

まだ明るい空の下私としいちゃんはスーパーへと向かう。

「今日は何にしようか、しいちゃん」

しいちゃんは「うーん」と首をかしげて

「暑いからねー、何か涼しいものにしようかなーと思うけど」

六月なので暑いと言うか蒸し暑い。そのため私たちの服装は私が半そでのワンピース。しいちゃんが七部袖の服となっている。

スーパーに向かおうと巢鴨駅南口のロータリーを通り過ぎたその時

「見つけたぞ、クラドスポリウム・トリコイデス！」

ん……、クラドスポリウム・トリコイデスだって!?

声のするほうを振り返るとやっていた、ヒーローショーが！しかもまたバスレンジャーだ。でもバスレンジャーの声が去年のそれと違うような……。でもバスレンジャーサン格拉斯みたいなのかっているから顔分らないんだよね。

「かわちゃん、どうしたの？」

しいちゃんが私の袖を引く。

「しいちゃん、面白そうだから見に行こうよ」
後でメニュー決めてパパッと買い物しちゃえばみんな許してくれるよね。

舞台の上ではクラドスポリウム・トリコイデスがゆらゆらと揺れている。ちなみにクラドスポリウム・トリコイデスとはお風呂場でよく見かける黒かびのことである。

「ふっふっふ、殺したと思ったらまた現れるとはしつこいやつだ」
クラドスポリウム・トリコイデスの声はヘリウムガスを吸った声になっている。（実際吸っているの見たことあるし）だから中の人去年と違うかどうかは分からない。

「お前に殺された初代バスレンジャーの無念、晴らしてやる！」

あ、今のバスレンジャーは二代目なんだ。中の人が変わったからなのかな？　しかし初代が殺されて二代目が現れるなんてぬるいストーリーだと思っていたけどいつの間にかシリアスな展開になっていたんだな。

「あー、あの二人去年銭湯で見た」

しいちゃんもバスレンジャーとクラドスポリウム・トリコイデスを思い出したようだ。

「かつちゃん、見よう、見よう」

しいちゃんも夢中になったことだし最後まで見ましようかね。

「ほう……、やはり私が倒したバスレンジャーは死んだのか……」

「そうだ、私は初代バスレンジャーの最後に立ち会った。そして彼女からこの力を託されたのだ」

バスレンジャーの死に立ち会ったことは、その時クラドスポリウム・トリコイデスにさらわれた人質だったのかな。

「ふふふ……、面白い。お前もすぐに初代の元へ送ってやるわ！
くらえ、『黒かびカンタービレ』」

どこからともなく聞こえてくる滑らかなピアノの音。

「うわあっ！」

二代目バスレンジャーはもんどりを打って倒れる。

「みんな、バスレンジャーがピンチよ！　バスレンジャーに声援を！」

どこからともなくお姉さんの声が聞こえる。子供たちは次々に声援を送った。

バスレンジャーは立ち上がろうとしたが……。

「だめだ、声が届かない」

と、再び倒れた。子供の期待を裏切ってどうする。バスレンジャーよ。

「ふふふ……、我もこの三ヶ月間何もしていなかったわけではないのだよ」

クラドスポリウム・トリコイデスがバスレンジャー（長いので二代目は省略）にまたがる。

「マウントポジションだ！」

しいちゃんが叫ぶ。さすが格闘技マニア。

「カビー、カビー」

「カビー」と叫ぶたびに繰り出されるクラドスポリウム・トリコイデスのパンチ。なんか遠慮がちだ。バスレンジャーの中の人を気にしていることだろう。

「うっ、あぐっ」

バスレンジャーの悲鳴がロータリーに響く。

「ふははははっ、これでとどめを刺してやろう。くらえ、『黒かびデスサイト！』」

高々と掲げられたクラドスポリウム・トリコイデスの右こぶしが振り下ろされようとしたその時、

「そこまでよ！　クラドスポリウム・トリコイデス」
ステージの袖から別の声が。

「何者だ、カビー！」

クラドスポリウム・トリコイデスがバスレンジャーから離れて声のするほうを振り向く。

ステージの左側に出てきたのは三人のバスレンジャーだった。な

ぜバスレンジャーって分かるかって？　だって三人とも同じ格好（全身タイツ・頭に風呂桶・サングラス）しているんだもん。

「私は『バスレンジャー森の香り』」叫ぶ。

緑色のタイツを着たバスレンジャーが緑だから森の香りか。

「私は『バスレンジャーゆず』」

続いてオレンジ色のバスレンジャー。

「私は『バスレンジャーラベンダー』」

青紫色のバスレンジャーが最後に叫んだ。

しかしそれにしてもバスレンジャーが四人だなんて……、戦隊モノでもなるつもりだろうか。

「ふふふ……、何人出ても同じことだ。四人まとめて初代の元へ送ってやるわ！」

クラドスポリウム・トリコイデスが三人のバスレンジャーに突進する。

するとその背後から

「今だ！　バスレンジャー光線！」

バスレンジャーが立ち上がり、クラドスポリウム・トリコイデスの背後から必殺技を放つ。正義のヒーローにあるまじき行為だ。勝てば官軍とはこのことか。

「うっ！　後ろから攻撃とは卑怯なり」

クラドスポリウム・トリコイデスはその攻撃をまともに受けたのか、ステージの中央でよろめく。

「今よ！　みんな力を貸して」

バスレンジャーが叫ぶと三人のバスレンジャーがステージの中央へ走る。

「私たちの攻撃をくらいなさい」

「バスレンジャー森の香り」の声が合図となって三人からクラドスポリウム・トリコイデスへパンチが何度も繰り出される。派手なアクションも技の名前も無い。ただのパンチだ。

「うっ、おのれ四人がかりとは卑怯な……、覚えていろ！」

さっきまでの自信満々の発言はどこへやらで、クラウドスポリウム・トリコイデスはステージの袖へと逃げていった。

「大丈夫？ バスレンジャー」

「バスレンジャーゆず」がバスレンジャーを氣遣う。

「危うくやられそうになったが、みんなのおかげで助かったよありがとう」

バスレンジャーもステージの中央へと歩いていく。敵はもういないし最後の決めポーズかな。

「日本のお風呂は我々が守る！ バスレンジャー！」

四人がそれぞれの決めポーズをした後で彼らは走り去っていった。

「……なんか型を打ち壊したようなヒーローものだね……」

しいちゃんが呟く。私はこれを見るのは四度目だからもう慣れている。

しかし新たに現れた三人のバスレンジャーたち、どこかで聞いたような声だったな。

第二十五話 闘う者たち（二）

タイツを脱いでシャワーで汗を流して気分爽快です。

あ、私は妹の真耶です。

今日は亜美ちゃんが言っていた

「もう一つのアルバイト」の初めての日でした。

大勢の人前に出るなんて思ってもみなかったのですが、顔隠したので、あまり緊張しませんでした。

さーて、着替えたことだし帰ろうかなー、と思ったら結衣ちゃんと亜美ちゃんが二人して並んでいます。

「あ、来た来た。そこ並んで」

どうやら私も並ばせられるようです。この頭に風呂桶を乗つけた全身赤タイツのサングラスの女性が、亜美ちゃんの従姉妹の

「姉さん」です。

姉さんはタバコ片手に指示します。

「はい、姉さん分かりました」

というわけで私は結衣ちゃんの右に立ちます。

「三人ともさー、初めてだからしょうがないのかもしれないけど、いまいちやる気が感じられないんだよねー」

私たちの今回の演技に対して姉さんは不満気です。

「えっと、例えばこういうところが……」

結衣ちゃんがおどおどしながら尋ねます。

姉さんはタバコの煙を大きく吐いてから

「真奈美へのパンチ、あれはなんなの？ 三人ともただ黙ってポカポカ殴っているだけで。戦隊モノなんだからさー、なんか技の名前言いなさいよ」

と答えます。真奈美というのは敵役を演じる明石先輩のことです。

「例えばさあ、三人なんだから『バスレンジャー文殊の知恵パンチ！』とか『バスレンジャートリプルボギー』とかいろいろあるでし

よ」

姉さん、「ボギー」はゴルフです。

「とりあえず、三人とも技を叫ぶわよ、『バスレンジャー文殊の知恵パンチ!』」

「バスレンジャー文殊の知恵パンチ!」

私たち三人は一斉に叫びます。

「声が小さい、もう一度叫んで」

「バスレンジャー文殊の知恵パンチ!!」

さっきよりも大声で叫びます。

「声が小さいと言えば……、名乗りの声も小さかったわね。特にあなた……、なんだっけ?」

え? 私ですか。

「えっと……、『バスレンジャーゆずの香り』ですか?」

姉さんのタバコの灰がかなり長くなっています。姉さんはタバコを灰皿に一回置いて。

「そう、それ声が小さい。もっと叫んで、こう『バスレンジャーゆずの香り!!』」

「バスレンジャーゆずの香り!」

「声が小さい!」

「バスレンジャーゆずの香り!!」

これでどうですか、姉さん。

「よし、最初よりマシになったわ」

姉さんは二本目のタバコに火をつけます。

「まったく三人ともアイドルを目指しているんだから、もうちょっと気合を入れて……、たかがヒーローショーだと思ってなめていたら痛い目見るわよ」

アイドル目指しているのは亜美ちゃんだけなんですけど……。

「まあまあ姉さん、初めてなんですからその辺で」

明石先輩がシャワーを浴びて出てきました。六月の最中あんな黒い気ぐるみを着ているので暑さも私たち以上でしょう。

「真奈美はよく頑張っているのにねえ……、やっぱり『あれ』の差なのかしら……」

私たちと明石先輩の違い？ 年の差ですか？

姉さんは再び大きく煙を吐いて

「男を知ったか知らないか」

「……！ な……な……な……！」

明石先輩は顔を真っ赤にして慌てています。こんな明石先輩初めてです。

「いやね、男を知ることとは女にとって重要なことだと思うのよ。新たな自分を知ると言うか、演技に幅ができると言うか……」

姉さんは明石先輩のほうを見て

「真奈美だってそう思うでしょ」

と尋ねますが

「私は男は嫌いです。私が好きなのは女の子です」

と否定します。当然の答えです。

「なに言っているのよ、一度男と別れたぐらいで男嫌いになるなんて可愛いわねえ。『ほにゃらら』もちろんとしたんですよ」

「……！！」

明石先輩の顔がさらに真っ赤になります。あ、姉さんのセリフの途中で「ほにゃらら」となっています。これ姉さんが言ったんじゃないですからね。ほんとは姉さんストレートにいつているんですが、読者の皆さんにお見せできないセリフなのでこっちで「ほにゃらら」に変換したんです。

「そういくとこっちの三人は『ほにゃらら』どころか恋すらしていないって言うじゃない。『ピー』よ、『ピー』。やっぱり『ピー』のままだと女優として限界があると思うのよ」

姉さん、アイドル論から女優論に話が変わりましたよ。

「そう思わない？ 真奈美」

姉さんは明石先輩に同意を求めますが。

「私は知りません、男なんか知らなくても十分やっています！」

とムキになって否定します。ま、当然ですね。

「真奈美ー、もうちょっと自分に素直になりなさいよー」

「これが素直な自分です！」

さらにムキになる明石先輩。こんな先輩を見るのは初めてです。

あ、明石先輩が以前付き合っていた人っでもうお分かりですよ。姉小路先輩です。

「まあ真奈美をからかうのはこの辺にしておいて……、三人とも次からはもっと気合を入れて演じなさいよ。次からは最初から出演だからね」

「はい、分かりました」

私たち三人は一斉に叫びます。

そして帰り道。明石先輩も一緒に家路に着きます。

「姉さんずつと顔隠していたけど素顔はどんな顔なのかな？」

結衣ちゃんが亜美ちゃんに尋ねます。

「そりゃあもうすごい美人さんだよ」

亜美ちゃんは元氣一杯に答えます。

「私も見たことあるけど思わず抱きつきたくなるぐらいの美人さんだわ」

明石先輩が抱きつきたくなるならよっぽどの美人さんなのでしょう。そんな美人さんなのにもサングラス姿なのはもったいないです。

「あ、私忘れ物をした取ってくる」

コンビニの前で私は三人に告げました。

「じゃあここで待ってるから」

「うん、すぐに戻るから」

忘れ物をしたと言いましたが、これは嘘です。本当は今なら姉さんが素顔を晒しているかもしれないと思って戻ってみたのです。

テントの中に入るとそこにいたのは……、バスレンジャー姿の姉さんでした。

「うん……、忘れ物？」

姉さんはタバコを銜えながら尋ねます。もうこれで何本目でしよう。

「ええ、忘れ物をしたような気がしたんですが……、気のせいでした」

「そう、気をつけなさいよ」

「はい、姉さん。お疲れ様でした」

姉さんの素顔見たかったのに……。残念です。

第二十六話 初体験なのです

七月に入って蒸し暑い日々が続いています。

しかし私たちはその蒸し暑さに負けて入られないのです。

あ、前回に引き続き妹の真耶がお送りしています。

何に負けられないかというと大学生の七月といえばレポートとテストです。一年生の私たちにとっては初めての体験です。

すでに何度も体験しているお姉ちゃんたちにとってはどうってことないのでしょうが、初めての私たちから見たら大事です。一年なので受ける授業数も多いので、レポートやテストもはんばない量です。

「もう、三時限連続レポートなんてやってられないーい」

結衣が両手をバンザイして床に寝転びます。

「こらー、結衣ちゃん諦めたらそこで試合終了だよ」

亜美ちゃんがシャープペンシルで結衣ちゃんをつつきます。まるでバスケット部の先生みたいです。「茂木先生、レポートが書きたいです……」と泣きながら言えがいいのでしょうか。

私たち三人は結衣ちゃんの家でレポートを書いているところです。結衣ちゃんの家ってことはお姉さんの真智先輩がアドバイスをしてくれるのかと思いきや

「レポートは自分の力でやるのが一番だよ」

そう言っアアルバイトに行ってしまいました。私のお姉ちゃんも「あ、それは慣れよ、そのうち慣れていくから」

どこかへ行ってしまいました。二人とも薄情です。悔しいです！「なんでこんなに変になる授業の取り方しちやっただろう……」結衣ちゃんが起き上がります。確かに私たち授業を選ぶのは適当だったかもしれません。お姉ちゃんが

「単位認定するのに楽な授業を選びなさいよ」

と、言っていたのを思い出します。もっと真剣に選べばもう少し

楽になれたのかもしれませんが。

「そんなこと言っても今更しようがないじゃない。今年苦勞した分来年以降は楽になるかもよ」

亜美ちゃんの言うことももっともです。

「そうだよ、来年は絶対楽しようよ」

気合を入れなおしてシャープペンシルを握る手の力を強めます。

「ちょっと気分を変えにお茶入れてくる」

結衣ちゃんが立ち上がって台所に向かいます。

「あ、私はブラックでお願い。眠気覚ましたいから」

亜美ちゃんが結衣ちゃんに声をかけます。

「私は両方入れて欲しいなー」

私たちのお願いに結衣ちゃんは手を振って答えます。しばしコーヒーブレイクです。

「はー、幸せー」

コーヒーを飲む結衣ちゃんの目が細くなります。エアコンが効いている部屋に温かい飲み物を飲むと体も心もあったまったような気がします。

「なーんかこのまま外に買い物に行きたいって感じ」

結衣ちゃんの行動が脱線しそうです。

「とりあえずこのレポート片付けたらねー」

亜美ちゃんが結衣ちゃんを元に戻します。

「うー、分かったよ……、やらなきゃいけないのね」

「ずーっとレポートとかテスト勉強ばかりだったからさ、これだけやったら本当にどこか行こうよ。近場だけどさ」

頭の中がほんの文字ばかりの日々が続いたので、たまには頭の中を違うものにしたいです。

「え、それじゃあ後楽園ホール行こうよ。確か今日キックボクシングの試合が……」

「それは却下」

結衣ちゃん、全部言い終わる前に亜美ちゃんに遮られてしまいま

した。

「後樂園ならやっぱりジェットコースターでしょ」

亜美ちゃんがシャープペンシルを回します。後樂園のジェットコースターってビルのギリギリのところまでコースターが走るんですよ。さらにビルの一部をトンネルにして入っちゃうんです。

「ジェットコースターに乗って思いっきり叫べたまった鬱憤も晴れるってものよ」

「えー、それならキックボクシング見たほうが……」

「だからそれは却下」

「同じ叫ぶんだったらカラオケ行こうよー、ジェットコースターは一瞬でしょ」

最近歌いたい曲が配信されたので、私はカラオケに行きたいです。

「同じ叫ぶんだったらキック……」

「だからそれは却下だって」

亜美ちゃん、三度目のツッコミです。

「そんなこと言い合っていたらいつまでたってもレポートが終わらないじゃない」

そうでした。亜美ちゃんの言うとおりです。目の前のレポートを片付けるのが先決です。

「えー、でも気合入れるためにぶら下げるニンジンを何にするか決めるのも重要じゃない」

結衣ちゃんが話を元に戻します。

「それはそうだけど、そのためにレポートができなからったら本末転倒でしょ。どこにもいけやしないわよ」

「どうせキックボクシングが見られないならそれでもいいー!」

結衣ちゃんが再び床に寝転びます。キックボクシングを要求するなんてまるでストライキです。

「キックボクシングなんて家のDVDで十分見られるでしょ」

亜美ちゃんの言うとおりで結衣ちゃんの部屋の本棚は本よりもキックボクシングの試合を録画したDVDが多く入っているのです。

「やだやだー、生の試合が見たいー」

結衣ちゃんが両手をジタバタさせます。これじゃあまるで駄々っ子です。

亜美ちゃんが自分のコーヒーカップを結衣ちゃんの上に掲げました。

「いい加減にしないとコーヒーかけるよ！」
もう脅迫です。

「それは勘弁してー」

結衣ちゃんが亜美ちゃんのコーヒーカップを捕まえます。

「結衣ちゃん、亜美ちゃんにコーヒーかけられたくないならレポートやらないきゃ」

結衣ちゃんが一回床に寝転がってから既に三十分が経過しています。そろそろやらないとまずいです。

「むー、分かったから亜美ちゃんそれどかして」

「はいはい、ちゃんとやるのよ」

亜美ちゃんがコーヒーカップを手元に戻すと結衣ちゃんは起き上がりました。

「よーし、どこに行くか分からないけどやるよー」

「オーッ！」

こうして私たちはレポートを再開したのです。でも終わったときはすっかり日も暮れてどこへも行けなくなってしまいました。悔しいです！

「ま、今日どこか行くはずの分は、全部終わったときのためにとっときましょ。ということで今日は解散！」

亜美ちゃんの意見に反論する力も無く（といっても今更どこかへ出かける体力も無いのですが）私は家に戻りました。

「お帰りー、真耶……、ってすっごい疲れているけど大丈夫？」

お姉ちゃんが心配そうに私の顔を覗き込みます。

「いやー、レポートが片付かなくてさー、お姉ちゃんもあるんでし

よ？ レポート」

「あー、それならささつとやっちゃったわよ。慣れよ慣れ」
私が疲れている原因を知るとお姉ちゃんはさっさと二階へと上が
ってしまいました。

早くお姉ちゃんの境地に達したいものです。

第二十六話 初体験なのです（後書き）

すみません、三週間遅れの更新です。

初めての方へ今更ながらの人物紹介

おかげさまで御徒町シリーズも三つ目に入り、通算百二十話を達成しました。

ここらでこれまでの主な登場人物のおさらいをしようかと思えます。

この回は女性編をお送りします。

登場シリーズの三はこのシリーズの第二十一話までです。従って二十一話以降に登場する可能性があります。

御徒真知^{おかち まち} 登場シリーズ…全て

…全シリーズを通しての主人公。身長百六十三センチ。髪型はセミロング。東京都文京区^{ぶんきょうく}出身。和菓子屋の長女。あだ名は「かつちゃん」

苗字と名前を続けて発声すると山手線^{やまのて}の駅名「御徒町^{おかちまち}」になるため、それがきっかけで幼少期いじめに遭う。大学一年までコンプレックスを抱いていたものの、ある出来事をきっかけに克服。自らネタにするまで成長した。

二年生のときは文化祭実行委員になり、イベント企画・当日のメイン司会を担当する。

絵が下手で納豆が大嫌い。得意のはったりをかまして窮地を逃れることがしばしば。物事を例えるのに元ネタがあるものをよく利用する。

親友三人組の中では冷静な突っ込みに回るかノッかるかは状況による

椎名真智^{しいな まち} 登場シリーズ…全て

…御徒真知の親友の一人。身長百五十二センチ。髪型はロング。山形県米沢市^{やまがた よねざわ}出身。あだ名は「しいちゃん」

苗字と名前を続けて発声すると西部池袋線の駅名「椎名町」になるが、いじめられた経験が無いせいか本人は気にしていない。なお、御徒真知と名前が一緒だが、それにはある秘密のつながりがある。格闘技特にボクシングをこよなく愛し、それが昂じて自ら体を鍛えたためそのパンチ力や成人男子の平均値をはるかに超える。料理が得意でプロの腕前を持つ。口癖は「もう」

二年生では文化祭実行委員になり、イベント企画・当日のメイン司会を担当する。

親友三人組の中では一番のお姉さんでまとめ役。

伊井国遥 登場シリーズ…全て

：御徒真知の親友の一人。身長百七十二センチ。髪型はうなじまでのショート。東京都豊島区出身。あだ名は「はるちゃん」

大学教授である父親（後述）の名前にコンプレックスを抱いている。また彼と進路について反発しあったものの和解。ダンスサークルに所属し、三年では部長を務める。

足技が得意で右のハイキックに自信を持つ。自分でもできないのにできるふりや知らないのに知っているふりを見せる。右腰に手を当てるときはそういうサイン。父親の仕事のせいか日本史に詳しい。親友三人組の中では引っ掻き回し役。大学三年まで恋を知らなかったが……。

明石真奈美 登場シリーズ…全て

：御徒真知の一つ上の先輩。身長百六十八センチ。髪型は胸の辺りまでのロング。東京都北区出身。

ダンスサークルに所属し、三年では部長を務める。いつも笑顔のお姉さん。

かわいい女の子が大好きで、それを見るや有無を言わずに抱きつくという困った習性を持つ。二年まではその範囲は女子高生どまりだったが、三年になって女子大生にまで範囲を広げる。しかし椎名

真智にだけはある出来事以降抱きつかない。

靈感が鋭く霊がよく見える。男嫌いだが実は……。

バスレンジャーの敵役、クラドスポリウム・トリコイデスの中の人。

浅野いのり（あさの いのり） 登場シリーズ…全て

：御徒真知の二つ上の先輩。身長百六十七センチ。髪型は男並みのヴェリーショート。

さいたま かわぐち
埼玉県川口市出身。

自身の名前にコンプレックスを抱いているため、「御徒町」を知っている上で初対面の御徒真知に対して優しく接した唯一の人。

頼りがいのあるお姉さんで、三年時にはダンスサークルの部長を務める。

卒業後フ○テレビにアナウンサーとして入社。実は初代バスレンジャーの中の人。

おかち まや
御徒真耶 登場シリーズ…全て

：御徒真知の二つ下の妹。百六十センチ。髪型は胸の辺りまでのロング。東京都文京区出身。

目がものすごく細く、驚いてもその目が開かれることは無い。姉と同じ文京大学ぶんぎやうに入り、この時点では一年生。第三シリーズでは姉とともに主役を務める。

物事を例えるのに元ネタがあるものをよく利用し、その解説は姉より詳しい。

アルバイトはメイド喫茶とバスレンジャー「ゆずの香り」の掛け持ち。

一年三人組の中では冷静に物事を見守るタイプ。

しいな ゆい
椎名結衣 登場シリーズ…二・三

：椎名真智の二つ下の妹。身長百七十五センチ。髪型は腰の辺りまでのロング。山形県米沢市出身。

姉と同じ格闘技好きだか、こちらはキックボクシングが主流。自ら体を鍛えているため、キック力は成人男子の平均値をはるかに超える。料理はそんなに得意ではない。

アルバイトはメイド喫茶とバスレンジャー「ラベンダー」の掛け持ち。

一年三人組の中では周りを引っ掻き回すタイプ。

茂木亜美^{もてぎ あみ} 登場シリーズ…三

：御徒真耶の親友の一人。身長百五十七センチ。髪型は胸の辺りまでのロング。よくポニーテールになる。東京都大田区^{おおた}出身。

大学で勉学に励みつつアイドルを目指す努力者。

アルバイトはメイド喫茶とバスレンジャー「森の香り」の掛け持ち。

一年三人組の中ではリーダー役。

真田亜由美^{さなだ あゆみ} 登場シリーズ…二・三

：御徒真知の友人の一人。身長百五十九センチ。髪型は肩の辺りまでのセミロング。三重県桑名市^{みえ}出身。あだ名は「亜由美」

いつも眠たそうな顔をしている。このシリーズの時間軸内における「明石真奈美抱きつき」最初の被害者。どうも唇も奪われたらしい。

誰に対しても親密度の濃さを問わず敬語を使う。冷静な突っ込みで時には人を傷つけることも。

二年では文化祭実行委員を務め、三年では自治会副会長。

河原真値^{かわら まち} 登場シリーズ…二・三

：御徒真知の一つ下の後輩。身長百五十五センチ。髪型はへその辺りまでのロング。滋賀県大津市^{しが おおつ}出身。あだ名は「かわちゃん」

苗字と名前を続けて発声すると京都にある地名「河原町^{かをらまち}」になるため、高校生までからかわれ続けコンプレックスを抱く。

統率に関しては能力・志望ともにあり、一年ながらも文化祭実行委員を務め、二年では自治会書記。

彼氏（後述）を「ダーリン」と呼び、バカップルぶりを周囲に振りまく。

吉田幸子 よしだ さちこ 登場シリーズ…三

：御徒真知の兄（後述）の婚約者。年齢は真知の二つ上。身長百六十三センチ。髪型は胸の辺りまでのロング。山口県萩市出身。先祖は吉田松陰。

どこか抜けているように見えるが実はしたたか者。口癖は語尾に「だもん！（もん！）」

姉さん（ねえさん） 登場シリーズ…三

：茂木亜美の従姉妹。バスレンジャー二代目の中の人。

素顔は美人らしい。現時点でのこのシリーズ男女通じて唯一の喫煙者。

御徒理沙 おかち りさ 登場シリーズ…全て

：御徒真知・真耶の母。身長百五十三センチ。髪型は胸の辺りまでのロング。静岡県静岡市出身。

目がものすごく細く、驚いてもその目が開かれることは無い。

人の出身地に関してはあまりうるさくないが、家族の決定には従う傾向にある。

御徒勝代 おかち かつよ 登場シリーズ…全て

：御徒真知・真耶の祖母。身長百五十四センチ。髪型は天然パーマで、丸まっている。東京都八王子市出身。

趣味は犬の散歩とアイドルの追っかけ。人の出身地に関してはかなりうるさい。

初めての方へ今更ながらの人物紹介（二）

前回に引き続き、登場人物のおさらいです。

この回は男性編とその他（用語など）をお送りします。

登場シリーズの三はこのシリーズの第二十一話までです。従って二十一話以降に登場する可能性があります。

町田イラケン（まちだ いらけん） 登場シリーズ…一・二
：ボクシングミドル級の選手。身長百九十二センチ。東京都北区出身。日本人とタイ人のハーフ。椎名真智が大ファンの選手で、御徒真知とは時々会う仲。

苗字と名前を続けて発声するとある大物俳優（モデルは松○健）になるため、幼少のころからいじめられた。そのため、名前にコンプレックスを持っていたが、ある出来事をきっかけに克服。
ボクシング世界戦に勝利し、現時点では世界チャンピオン。御徒ペル（後述）との触れ合いを日課としている。

高見勝太（たかみ かつた） 登場シリーズ…二・三

：御徒真知の友人の一人。身長百七十八センチ。青森県大間町出身。年齢は真知の一つ上だが、一年休学したため同級生。あだ名は「タカビー」

二年では文化祭実行委員長を務め、三年では自治会会長。
がっちりとした体格だが、それに反して日和見をすることもある。

姉小路頼綱（あねがこうじ よりつな） 登場シリーズ…二・三

：御徒真知の一つ上の先輩。身長百七十三センチ。長野県松本市出身。

いつも御徒真知憧れの「とんかつ定食」を食せる「選ばれし者」。
戦国大名と同姓同名だが、そのマイナーさゆえに気にしていない。

三年では自治会会長。

現在彼女はいないが……。

大井桂馬^{おおい けいま} 登場シリーズ…二・三

：御徒真知の友人の一人。身長百七十センチ。滋賀県^{しが}大津市^{おおつ}出身。あだ名は「けーま」

苗字と名前を続けて発声すると大井競馬場と混同されるため名前にコンプレックスを抱いている。三年では自治会会計。

河原真値とは恋人同士で自らは否定しているもののなかなかのカップルぶりを周囲に振りまく。

チャウワ・スケベニンゲン（ちゃうわ すけべにんげん） 登場シリーズ…一、二

：ボクシングミドル級元世界チャンピオン 身長百九十四センチ
タイのバンコク出身。

町田イラケンとの試合に敗れてチャンピオンの座を離れる。一年後の再戦も敗れた。

名前が日本語だといやらしい意味だが、日本人じゃないので気にしていない。家族思いの気さくな一面を見せる。

御徒寛太^{おかち かんた} 登場シリーズ…全て

：御徒真知の父親、御徒和菓子店の現当主。身長百六十八センチ。東京都文京区出身。

時代劇を見るのが大好きで江戸時代のものには登場人物に思い入れが激しい。

人の出身地にはかなりうるさい。

御徒泰蔵^{おかち たいぞう} 登場シリーズ…全て

：御徒真知の祖父。身長百七十二センチ。御徒真知の名付け親。東京都文京区出身

人の出身地はかなりうるさく、倒幕派側（薩摩を除く）の土地の人間に対しては厳しい。

家訓のほとんどはこの人が決めた。

御徒ペル（おかち　ぺる）　登場シリーズ…全て

…御徒家の飼犬。雑種。猫好き。

用語編

ぶんきょうだいがく
文京大学

…御徒真知たちが通う大学。東京都文京区はくさんの白山にキャンパスを持つ。

モデルは昨年の不祥事を乗り越え箱根駅伝はこねえきでん初制覇を果たしたあの大学。

敷地面積は狭いため、そのほとんどが建物の面積に占められている。そのため建物は縦に長く、地下も深い。周囲に高いビルが無いため、二号館の屋上近くのレストランは夜景スポットになっているらしい。

バスレンジャー（ばすれんじゃー）

…このシリーズに登場する正義のヒーロー。正式名称は「お風呂戦隊バスレンジャー」

最初は東都大学とうと（東〇大学）の文化祭でのヒーローだったが、いつの間にか地元商店街とタイアップし、ヒーローショーにまで発展。中の人はみんな女性。

ヒーローショーとは思えないぬるい展開が地味な人気を博しているらしい。ぬるい一面を見せつつも、初代バスレンジャーが殺されるなど時にはシビアになる。

第二十七話 海へ行こう（前書き）

二ヶ月ぶりの更新ながら、季節はずれのネタです。

第二十七話 海へ行こう

「みんなー、夏休みですよー！」

「はいー」

私、御徒真知は自宅の居間で妹三人組に対して夏休みの始まりを宣言する。

「夏休みといえば、何ですかー？ 真耶から言ってみよー」

私が指差すと、真耶はすぐさま答えた。

「アルバイトです」

「アルバイトです」

「アルバイトです」

続けて結衣ちゃんと亜美ちゃんも同じように答える。なんなんだこの三人。アルバイトの亡者か？

「ちょっとー、いくらなんでも三人同じ答えは無いんじゃない？」

私が半ばあきれ声を出すと亜美ちゃんが三人を代表して。

「でも、みんなが遊んでいるときにこそ働けば二文の得というじゃないですか。商人の知恵ですよ」

へ、商人の知恵？

「祭りのときに遊ばないから一文の得。その時お金を稼ぐから一文の得。二つ合わせて二文の得です」

なんか昔の名奉行のお裁きみたいな話だな。

「そんなせっかくの夏休みなんだから。みんなでどこかへ出かけようよ」

しいちゃんが助け舟を入れる。

「どこか行て行くあてはあるんですか？」

よくぞ聞いてくれた結衣ちゃん。

「みんな、女子アナウンサーになった浅野先輩のことは知っているわよね。その浅野先輩がボーナスを支給されたのよ」

この前年に一度放映される一日中生番組のエンディングでは一番

初めに提供読みをやっていた。

「そこで、そのボーナスで車を借りて泊りがけで海へ行こうって話になったのよ」

「海ってお台場ってオチじゃないよね、お姉ちゃん」

「海ってものすごく定番すぎです」

「海ってスカウトの人いるのかしら」

妹三人組は口々に海について語りだす。

「というわけで、みんな水着とお泊りの準備を用意!!」

焼ける砂浜、差し込む真夏の日差し、そして流れてくる潮風!

「みんなー、海だよー、海ー」

海なんて来るの久しぶりだな。小学校のころ家族と一緒に行ったとき以来かしら。

「お姉ちゃん、そんなにはしゃがないでよ恥ずかしい……」

真耶がしぼんでいるビーチボールを片手につぶやく。

適当なスペースを見つけてビニールシートを敷き、パラソルを開く。

「さーて、みんな荷物を置いてー」

私の合図にみんながそれぞれ荷物を置く。

「それじゃあ誰が最初に荷物番をするか決めましょうか」

荷物を置いた亜由美が冷静に右手でチョキを作る。せっかくの海なのに、荷物番になるのはいやだなあ……。

「いいねー、ここは公平にじゃんけんで決めようか」

浅野先輩はすっかり乗り気だ。

「それじゃあ行きますよ、最初はグー、じゃんけーん……」

みんな楽しそうに海で遊んでいるなー。はい、ナレーターは荷物番の御徒真知でお送りしています。

なんで私一人だけグーで、他のみんながパーだったのだろう……。

九人もいてじゃんけんが一発で決まるなんてどんな確率よ!?

あー、明石先輩すごく目がキラキラしているなー。視線が水着の美女を次々と追いかけている。何人の女性が犠牲になるのだろう…。あ、亜由美が早速捕まった。美女を抱きしめたいところを亜由美で我慢しているのかな？ 亜由美がおそらく悲鳴を上げているんだろうけど、何しゃべっているんだか聞こえないや。

結衣ちゃんは何をしているんだろう。波に向かってキックの特訓かな？ ものすごく海水がはねているんですけど。

亜美ちゃんは一人で何をやっているんだろう、いろいろポーズをきめて。グラビアのポーズの練習かな？ そんなのこっちでもできるじゃん。

ああ、潮風が生ぬるい……。

「お姉ちゃん、何だらしな顔しているのよ」
上から真耶が、コーラを片手にたしなめる。

「いや……、みんな海で楽しそうだなあと……」

「そんなに一人で荷物番しているのが嫌なの？」

真耶が私の隣に座る。

「はい、これお姉ちゃんの分」

「あー、ありがとう」

私には青いスポーツドリンク。汗をかいている私にはちょうどいい。

「ところで真耶は泳がないの？」

「なんかみんな一人で思い思いのことやっているからさ、こっちへ来たの」

確かにみんなの行動はバラバラだなあ。しいちゃんとはるちゃんは「競争だ」とか言って沖の方まで行っちゃったし。浅野先輩は？

姿が見えないけどどこへ行ったんだろう。

「お姉ちゃん、あれ見て」

「うん？」

私は真耶が指し示す方向を振り向いた。そこにはテレビカメラの

前に立つ浅野先輩の姿が！

「え！ テレビ！？」

浅野先輩はテレビでよく見る猿顔のコメディアンに激しくヒップアタックをくらっている。浅野先輩のいるお台場のテレビ局の番組収録なのだろうか。あのテレビ局はスタッフがしゃしゃり出ることが結構あるからね。

「浅野先輩……、あれじゃあすっかりコメディ路線ですよ……」

一年目でバラエティ番組に出演していたらまず真面目なニュース路線にはいけないだろう。

「まあもともとその素質はあったからねえ」

普段は頼れるお姉さんの存在なのだが、怒るとアイアンクローをかましたり、カラオケでは絶叫系を歌ったりなど変わったところのある人だ。

あんまり見ていると私たちも巻き込まれるかもしれないので、視線を海へと戻すと、こっちへ向かって泳いでくる二人が、しいちゃんとはるちゃんだ。いや正確にはその二人が誰か一人を引き連れてこっちへ泳いできている。

みんなその様子を見て二人の周りに集まってきた。

「真耶、荷物任せたよ」

私もその群れの中に行ってみることに。

「沖で足が攣っちゃったんだって」

しいちゃんが息切れ一つせずに右足を引きずる男性を左肩にくんで砂浜に上がってきた。

「まったく、素人なのに沖に出ようとするから……」

はるちゃんが男性の右側であきれた声を出す。いやいやしいちゃんもはるちゃんも素人でしょ。人のことはいえないじゃない。確かに女性に助けられる男性はまぬけだけどさ。

「私たちのように体力に自信がある人じゃないと沖に出てはいけませんよ」

しいちゃんも説教をする。確かにしいちゃんの体力は半端じゃな

いね。

三人でおぼれかけた男性を海の家へ連れて行くと、私たちの荷物が置かれているところに残りの六人が集まっていた。

「かつちゃんばかり荷物番もかわいそうだから、そろそろチェンジしよう」

ああ……、浅野先輩。その言葉待っていました。これで私も海で泳げるわけですね。

「公平に八人全員でじゃんけんよ、じゃーんけーん……」
へ？ 私も！？

……潮風が気持ちいいなあ……。

なんで私一人だけパーで、他のみんながチヨキだったのだろう。

これって何かの策略？ 誰かがチヨキを出せと合図をしたの？

私を除くと八人だから、みんなは四対四に別れて波打ち際でビーチバレーをしている。これじゃあさっきの真耶のように私のところには来てくれないか……。

「あれ、かつちゃんじゃないか」

え？ 誰！？ 一人寂しげにいる私に声をかけるのは？

声をするほうを振り向くと、そこにはタカビーと姉小路先輩が。
うわー、なんかめんどくさい展開になりそう……。

第二十七話 海へ行こう（後書き）

以前感想の返信コメにも書きましたが、生活が激変し、以前のように毎週更新というわけにはいかなくなりました。

よってネタが思いつき次第の不定期更新とさせていただきます。
これからも御徒真知と愉快な仲間たちをよろしくお願いいたします。

第二十八話 気まずい再会だこと（前書き）

半年ほど離れていました。工場長です。これを機にまた書き続けられたらと思います。どうぞよろしくです。

第二十八話 気まづい再会だこと

砂浜へ一人たたずんでいるところに現れたTシャツ姿のタカビ―と姉小路先輩。波打ち際にははるちゃんと明石先輩が！

姉小路先輩とこの二人を会わせる訳にはいかない！ 面倒な展開になるに決まっている！

「どうしたんだ、一人でたそがれて」

タカビ―は私のそんな気持ちも知らずにのん気に尋ねる。

「みんな海に來たから荷物番ですよー」

「みんなか、他にもいるのか」

姉小路先輩が辺りを見回す。

まずい、姉小路先輩に明石先輩の姿を見せるわけには……………。

「あー、喉乾いちゃった」

……………来ちゃった。

お互いの存在を認めた明石先輩と姉小路先輩の間に沈黙が流れる。私には非常に重苦しいこの沈黙。心なしか陽射しも痛い。タカビ―はというと焼きそば買いに逃げてしまった。なんて頼りない。まるでヘタレな国のようだ。

「あらら、姉小路君。一人で寂しく海ですか？」

明石先輩が満面の作り笑顔で尋ねる。

「そんなわけなからう。たまたま今一人なだけだ」

「えーと、お二人は知り合いなんですか？」

付き合っていたことは知っているけど、当人に対してはそれを知らないことにしている。だから私は当たり障りの無い発言を試みた。（事情を知っているから充分当たりも障りもあるんだけど）

「そりゃあ、なあ」

姉小路先輩が頷くと明石先輩も続いて

「片や大学自治会長、片やサークルの部長だもん、嫌でも顔を会わ

せる機会はあるわよ」

嫌そうに答える。姉小路先輩は平気な様子だけど、明石先輩の周囲が重い空気に包まれている。どうやら恨みは明石先輩にのみ残っているようだ。

「こんなところで一人でつつ立っていいの？ 連れが迷子になるんじゃない？」

「高見のことなら大丈夫だろう、たぶんここに来るだろうし」

明石先輩の笑顔が引きつる。

「女の子だらけの楽園に男がいるのは非常に困るんだけどなあ」

「相変わらずだな、お前の男嫌いも」

姉小路先輩が「やれやれ」と言った表情を浮かべる。

「あなたに『お前』と言われる謂われはないんだけどなあ。どうしてそういうことを言うのかな？ かな？ かな？」

明石先輩が不機嫌の余り、「お社様モード」に入っているようだ。下手な嘘をついたら鉋で全身を切り刻まれかねない。

しかし重いなあ、この空気。これから解放されたら物凄く強く、そして速くなれるんじゃないのかな。はるちゃん以外の誰かが来てくれたら少しは空気も和やかになるんじゃないかと思うけど……。はるちゃんだったら火に油状態だ。

「焼きそば買ってきたぞー」

タカビー、屋台よりただ今帰還。これでちようとは流れが変わるか？

「それじゃああっちで食おうぜ」

姉小路先輩はタカビーを連れて道路の方へと去っていった。

明石先輩はその後ろ姿を恨めしそうに見つめていたが

「あれ、誰かいたの？」

しいちゃんとはるちゃんが来るや

「ううん、私とかっちゃんだけだよ」

と、いつもの笑顔に戻った。その直後に笑顔のまま私の方を向いて（誰もいなかったよね！）

と、視線で訴えてきた。顔は笑っているが、目は笑っていない。まるで最近役者としても活躍されている落語家さんのようだ。

「そ、そうですね……、誰もいませんでしたね」

逆らったら後で殺される。そう悟った私は素直に明石先輩に同意する。

「あーあ、誰もいなかったのねー。これで知り合いの男性だったら、ちよっとロマンチックだったのに」

うわー、はるちゃん。なんで正解を言うの？ 姉小路先輩に会いたいの分かるけど、なんでこの人の前でそんなことを言うの？

「あらー？ 遥は女の子だけじゃ不満なのかしら？」

明石先輩がはるちゃんに抱きつく。心なしかその力はいつもとより強い。機嫌が悪い時にさらに煽るようなこと言われたら当然か。

「い、いやー、何気ない日常にもちよつとしたスパイスを、つてことですよ。ねえ、しいちゃん」

はるちゃんに代わり、私がフォローを入れる。はるちゃんに聞いたら否定されそうなので、ここはしいちゃんに同意を求める。私はしいちゃんに思い切り目で訴える。

「う……、うん。そういうことですよ、明石先輩」

よし、私の思いはしいちゃんに通じたようだ。さらにしいちゃんにはるちゃんの右腕を軽くつつく。

「え、ええ……。ちよつとしたスパイスがあれば日常のありがたみが分かるじゃないですか……。つてそろそろ痛くなってきたので、離してもらえませんか？」

はるちゃんも空気を読んだようで、痛みをこらえながら答える。

「えー、そんなスパイスなんていらないよー。何も無いからこそ日常はありがたいんだよー。どっか異世界に連れて行かれたり、宇宙人と戦わされたり、生放送の番組で過去の罪を急に暴かれるなんてスパイスいらないよ」

三つとも「スパイス」どころではないです。それにしても最後のだけやけに詳しく現実的であること。

まあ異世界につれて行かれそうになったらその世界を滅ぼしてでも拒否するけどね。どうして向うの世界のエゴでこんなに楽しい今の世界から離れなければならぬのか理解できない。

「そんなおかしいこと考えないで早く海に戻ろう」

明石先輩がはるちゃんから離れながら提案をすると、

「そうですね、ちょっと荷物の無事を確認に来ただけですし」

「そうだね、戻ろうか」

と、三人は海へと戻っていった。あれ……、自然に私荷物当番に……。

「どーして海に来たのに一度も泳げないの！」

辺りはすっかり夕焼け色に染まり、砂浜にいた人もまばらになっていく最中、私は充分と泳ぎを堪能したであろう八人に叫んだ！

「じゃんけんに負けるのが悪いんじゃないんですかー」

亜由美がもっともな正論を吐く。

「言っておくけど私もそんなに泳げたわけじゃないからね」

はいはい、浅野先輩はテレビに出ていましたからね。

「私も泳いでないよー。女の子追いかけていたから」

泳いでいなくても好きなこととしていたってわけですね、明石先輩。「とりあえず、みんなが楽しんでいたのに私一人だけ義務に縛られていたのが不満なの！」

国民の義務とかいう言い訳はいらない。言われそうだから先に言う。

「まあ、かっちゃん。これから浅野先輩が予約した旅館に行くからそこでのんびりしようよ」

しいちゃんが優しくスポーツドリンクを差し出す。

「え、旅館って温泉旅館！？」

「そう、露天風呂もあるんだって」

しいちゃんはいつもの可愛い笑みで頷く。

「そうよ、殺人事件の起こる温泉旅館よ！」

はるちゃん、そんな不吉なことをいいながらなぜ張り切る。

「いや……、そんなことは起きないんじゃないんですか。だってここには自称名探偵の子供とかいないんでしょう」

「警察官僚を兄に持つルポライターもいませんね」

「窓際部署にいる二人の刑事もいませんし」

妹たちよ……、そんな人たちがいるように見えて殺人事件は起こるのだよ、いや起こって欲しくないが。

そんな不安を抱えながら、私たちは浅野先輩が運転するワゴンに乗り、約十分車に揺られて予約していた旅館へとたどり着いた。

「浅野様ですね。お待ちしておりました」

涼しげな藍色の着物を身に纏った女将さんが私たちを迎えてくれた。九人で予約だからそのような扱いを受けるのかな。靴を脱ぎながら私はカウンターの辺りを見回す。どうやら事件が起こるたびにお姉さんに手紙を書きそうなホテルマンはいない。あ、ホテルじゃないから当たり前か。

九人は三人一組のグループに分かれて泊まる。当然のことながら、

「私・しいちゃん・はるちゃん」「浅野先輩・明石先輩・亜由美」

「真耶・結衣ちゃん・亜美ちゃん」の三組となった。

さて、旅館でお泊りか。誰も死なな……、いやいや何も起きなきやいいのだけど。

第二十九話 死亡率上昇中

温泉に入ろうかと思ったら、先に夕食の時間が来てしまった。

旅館だからなのか夕食は他のお客さんも交えて宴会部屋でまとめて食べることに。

部屋の広さは……、畳十数枚分の部屋を二つ三つ開けて一つにしました。と言っているようで、修学旅行でよく見る百五十くらいの人が一気に座れるような広さじゃない。まあ旅館だしね。旅館にしては広いほうか。

「知らない人同士が集まって宴会と言うものね……」

真耶が微妙な気持ちを口に出す。

「まあ、普段会わないような人と知り合うきっかけになると思えばいいんじゃないの」

亜美ちゃんがポジティブに部屋を見回す。

既に学生っぽい男女の二人組がいる。特に挨拶するわけでもなく私たちは彼らの隣に座る。私は彼らより離れて座ったけど、近くに座った真耶達には二人が話している内容が聞こえているみたい。そのうちなんだか三人が騒ぎ始めたぞ。

「どうしたの、一体？ 亜美ちゃん顔青くなっているし」

「えっとですね……」

結衣ちゃんが隣の二人に聞こえないように、私に近寄って小声で話す。

「あの男の人、名探偵の孫だそうです」

へえ、名探偵の孫なのか……、ってそれって！

名探偵やその孫を名乗る人と同じ屋根の下で夜を明かそうとする死亡率が高くなるのは有名な話だ。ここに来る前から心配していたことが現実に近い付いている！

「だ、大丈夫よ……、別に私たち悪いことしていないし」

過去にやましいことがあった人は死亡率がさらに倍になる。

「こちら、その二人。あくまでも漫画や小説の中の話でしょう。私がチョイスした旅館でそんなことがあってたまるものですか」

向かいに座っている浅野先輩がたまりかねた様子で声を上げた。この旅館を選んだ手前、一番「そんなこと」が起こって欲しくない人であろう。

「えーっ、そういう危険があつてこそ世の中面白いんじゃないんですか」

はるちゃんが楽しそうな顔で浅野先輩を見つめる。

「私は可愛い女の子がいればそれだけで楽しいけどね」

明石先輩は脈絡もなく持論を展開する。

「名探偵の孫がいるからって、気にしていたら余計に死亡率が高くなりますよ」

亜由美の言うことももつともだ。下手に生き延びようと変な事したら大変なことになりかねない。

「もう、浅野先輩の言うとおりみんな気にし過ぎだって……、これから美味しい夕食が来るのに、楽しめなくなるよ」

しいちゃんは他のお客さんよりも料理を気にしている。まあそれが全うな考えなんだろうけど。

うるさい足音がすると思っていたら男性が二人部屋に入ってきた。一人は紺色の着物でフェルト帽を持ち、ぼさぼさ頭をやたらとボロボロ書いている。

もう一人は目が青く外国の方だろうか。痩身で鷺鼻、口にパイプを咥えている。

……この二人、どう見ても名探偵だ。

「しいちゃん、名探偵が二人も来たよ」

私が怯えながらしいちゃんに小声で話す。

「えーっ、別に探偵が二人来てもいいじゃない。何も起こらないよ」
いや、どう見てもその可能性が増えたでしょう。

「いやー、ここまで事件を呼ぶ人たちが来ると楽しいね、今度は誰が来るのかな？」

死亡率が高くなったのにも関わらず、はるちゃんはワクワクしながら開かれた障子を見る。はるちゃんはきつと何が起こっても自分は死なないと思っているのだろう。

はるちゃんの期待に応えてか、また男性が二人入ってきた。背広姿のサラリーマン二人組みって感じで、特に名探偵的な特徴は無い。

「よし、どんな人か私が聞いてくるか」

「えっ、はるちゃん!？」

私が止める間もなく、はるちゃんはその男性に駆け寄っていった。明石先輩が面白そうとそれに続く。私としいちゃんは二人を止めようと席を立っていた。

「こんばんは、私文京大学の伊井国遙と言います」

はるちゃんが恭しく頭を下げると、眼鏡をかけた方の男性に挨拶をした。ちなみにこの二人、身長も容姿も似ていて、眼鏡の有無で違いが分かるだけ。双子だろうか。

「これはこれは、私警視庁『美しい国係』の山城賀茂やましろ かも。隣は双子の弟で、山城桂やましろ かつらです」

へー、双子で警視庁の刑事さんか。どうりで似ているわけだ。それにしても「美しい国係」って一体何をする係なんだろう。

「あのー、すいません。『美しい国係』ってどんな事件を担当する係なんですか？」

しいちゃんに先を越される。兄の賀茂さんが答える。

「はい、この国を『美しい国』にしようと努力する係です。数年前時の内閣総理大臣がこれをスローガンに掲げて、国政に取り組んだのはご存知ですね？」

そういえばそんなこともあったな。いろいろな省庁の方々を集めて「美しい国」にさせようとする係を作ったってニュースでやっていたな。警視庁にもそんな組織があったのか。

「……それで『美しい国』って言うのはどういう国なんですか？」

あ、そうそう。私もそれを気になっていた。またしいちゃんに先を越されてしまった。賀茂さんは首を傾げて

「それが……、はっきりと分からないのです」

「え!？」

答えを聞いて私やしいちゃんだけではなく、はるちゃんや明石先輩も驚いたようだ。

「なんせ『美しい国』がどんな国かはつきりせぬまま総理大臣が辞めてしまいましたからねえ……、残された私たちはしょうがないから、それぞれが思う『美しい国』を探そうってことにしているんです」

「それじゃあ毎日『美しい国』を探しているんですね？」

明石先輩が尋ねると、賀茂さんは首を振って

「いえ、普通に事件の捜査や解決をしているだけです」

「それじゃあ『美しい国係』の意味ないじゃん!」

しまった。私としたことが思ったことをつい口に出してしまった。

そんな私のツッコミにも賀茂さんは顔色一つ変えずに

「はい……、私もそう思うのですが、なぜか上がなかなか元の部署に戻してくれないので……。しょうがなく二人きりで『美しい国係』をしている毎日です」

それって……、ただの左遷・いわゆる窓際部署じゃない？

「窓際部署の二人の刑事……」

そういえば真耶が海で「そんな人たちいないから大丈夫」って言うていたが、見事に来てしまったな。そうそう、弟の桂さんは終始無言。話すのは兄に任せているのだろうか。

名探偵の孫・本物の名探偵二人・そして窓際部署二人の刑事、見事に殺人事件を呼び起こす人たちが一つの旅館に来てしまった。

席に戻った私はしいちゃんに呟く。

「しいちゃん……、私たち死ぬかもね」

しいちゃんは私だけではなく、妹達にも聞こえるように

「だからそんなに心配すること無いって。だってここには探偵・刑事役の人しかいないじゃない」

うん? どういうこと?

「つまり探偵や刑事だけじゃ事件は起こらないってことよ。あと被害者と加害者がいるでしょ。もしかっちゃんの心配どおり、被害者が私たちになるとしても、加害者がここにはいないじゃない」

そうか、あと加害者役か……。

「旅館での殺人事件だから、そうね……。いかにも犯人っぽいけどそうじゃない人と、普通そうに見えて実は犯人の最低二人は必要ね」
そう言うとしいちゃんは妹達やはるちゃんを見回して。

「だから、何度も言うように今夜は何も起こらないの。心配しない」

「はーい、分かりましたよ……」

はるちゃんがつまらなさそうに答える。

気がついたら、三人組の男性が部屋に入っていた。

これと言った特徴はなし。もっともしいちゃんの話に基づいて考えると「実は犯人役」の方々なのだが……。

「は、はは……、いかにも怪しい人なんているわけないよね」

なんて言っていたら入り口から人の気配が！

第三十話 黄昏のはるちゃん

ま、また誰か入って来た!?

その人は大きく「天上天下」と書かれたTシャツを身に纏い、顔は目だけを残して白い包帯で隠したいかにも怪しい男だった。

「あ、怪しい……」

そう思ったのは私だけではないようで、探偵役の方々も、普通の人たちもその男を注視している。怖がって目を背けている人もいたな。

「探偵／刑事役」・「普通に見えて実は犯人」・そして「いかにも怪しく見えて実は犯人じゃない人」。しいちゃんの言う「推理ドラマに必要な人物」全てがそろってしまったのである。

気がつけば私の手元に何か書かれたメモが一つ。

『なんとしても生き残るのよ』

誰が書いたのだろう、と辺りを見回すと、浅野先輩が真剣な眼差しを私に向けていた。真剣と言うか泣きそうだ。自分が選んだ宿でこんな状態になってしまい責任をすごく感じているのだろう。

せっかくのお刺身や蕎麦だが美味しくいただけられない。調理場のみなさん、ごめんなさい。

「こんな飯食えるか! 私は近くのコンビニで食う!」

普通の人グループから男性が一人大声を上げながら立った。

「落ち着いて下さい部長、一体どうしたのです?」

部長と呼ばれた人は、辺り（私たちも含む）を指差し

「こんな殺人事件が起こりそうな面子と一緒に飯が食えるかって言うんだ。ひょっとしたらこの夕食に毒が混じっているかもしれない」

死亡率上昇を気にしているのは私たちだけじゃなかったんだ……、
ってこのご飯に毒!?

「えーっ毒!?!」

亜美ちゃんの悲鳴が上がる。気がいたら亜美ちゃんの蕎麦が半

分ほど消えていた。いつの間に食べ始めていたのだろうか。

「大丈夫ですよ。今のところ異常は無いですから」

亜由美は淡々とご飯を頬張っている。なかなか大胆な二人だ。

「ぶ、部長！」

大胆ではいられない部長さんは部屋を出て行ってしまった。

「あの部長さんが被害者かもね……」

はるちゃんが蕎麦をすすりながら部長さんを横目に見る。こういう状況において積極的に独りになった人間が殺されやすい。

「じゃあ、もう誰も殺されないのかな？」

真耶は不安と期待が入り混じった目を向ける。不謹慎な発言だが、自分や友達の命がかかっている問題なので、つい口に出してしまっただろうか。

「とりあえずは、ね」

捜査が進み、事件が解決すれば被害者は一人で済む。しかし捜査が進んで誰かが怪しいとなった場合、犯人が捜査の目を自分から背けるため、もしくは誰かに（この場合、いかにも怪しい人が対象となる）向けるためにさらなる被害者を出す可能性がある。

「もう、みんなあの部長さんが殺されると決まったわけじゃないんだから！」

しいちゃんの語尾が強い。少々本気だ。

「私たちはいつもと変わらずみんなで仲良く行動しましょう。仮にこの旅館が異常であった場合、それが生き残れる道ですから」

亜由美が二膳目のご飯を盛りながら呟く。

「そうよ、気にしないで普段どおりに楽しめばいいのよ」

しいちゃんも同意する。向かいの浅野先輩はまた泣きそうな目を見せながら頷く。

その隣の明石先輩、しいちゃんの隣にいるはるちゃんは楽しそうにご飯を食べている。この二人はいつも楽しそうだ。男性関係以外では……。

結衣ちゃんはどうだろう？

彼女もおかしな素振りは見せていな

い。さすがしいちゃんの妹か。

ここで今回の事態に対するそれぞれの気持ちと言うか態度をまとめてみる。

死亡フラグだ！ 死にたくない……私・真耶・浅野先輩

そんな馬鹿なこと起きてたまるか！……しいちゃん・結衣ちゃん
なんだかワクワクしてきたぞ！……はるちゃん、明石先輩

別にどうでもいい……亜由美・亜美ちゃん

浅野先輩はさっきも言ったけど、この旅行の責任者として誰も死んで欲しくない。結衣ちゃんはしいちゃんの妹だからって理由で二番目のグループで。

幸い夕食に毒は混じっていなかった。

「うん、ここの調理師さんは腕がいいね」

しいちゃんが満足気にデザートのアイスを口にしていたけど、私はそれどころではなかった。この時ほど「お毒見役」の方を雇いたいと思った事は無い。労働基準法とか派遣労働何ちゃら法とかに引っかけりそうだけど。

夕食の後はこの旅館のメインの温泉タイム！ 全員でお風呂場に向かう。元々みんなで行こうって決めていたことで、今回の事態に対するの集団的自衛権の発動ではない。

お風呂は町角の銭湯によくあるような富士山などの風景画ではなく、高所から街を見下ろせる窓が私たちの正面および右側を囲んでいた。ちなみにマジックミラーなので外側からは見えないとの事。

もう暮れちゃったけど日が出ている時間帯だと本物の富士山が見られるとか。明日の朝早速入ってみるか。

湯船に身を沈めるとどういう成分が含まれているのか知らないけど実に気持ちがいい。九人全員は入れる広さだけど、それぞれのお風呂の過ごし方があるわけで、体を洗っている人もいるしサウナに

入っている人もいる。

「はぁー、さすがは温泉。嫌なことも忘れるねえー」

「そうだねー、さっきまでの『死ぬかも』って気分が無くなっちゃうねー」

はるちゃんは楽しそうに足を伸ばす。

「もう、せっかくだしい気分になっているのに……。はるちゃん、次から『死』って言うのは禁止ね」

しいちゃんが優しく注意すると

「分かりました。もう 0302（し）ぬなんて言いません。0302（し）はないってことを 0302（し）んじてこれから過ごしていけば、0302（し）ぬって不安から 0301（さ）わやかな気持ちに変わるんじゃないかと思います」

うん、確かに「死」って言って無いね。

ところがしいちゃんは鋭かった。

「はるちゃん、NGワード以外の『し』も変換されているよ。調子に乗って『さ』まで変わっているし。そんなに話し相手を見つけたいの？ でも私は期待に応えられないからごめんね」

しいちゃんのツツコミを受けてはるちゃんが寂しそうに黄昏る。たそがれ

こんなやり取りができるのも亜由美がカラオケで歌ってくれたおかげだ。

「そんな話をしていたら三十秒も経っちゃったじゃない」

私の右隣にいる明石先輩が私の頬をつねる。

「キヤーッ！」

洗い場にいた真耶の悲鳴が！

「えっ！」

半ば冗談、半ば本気で「死ぬ」なんて考えていたけどなんか本当に起こりそうって言うか……。起きちゃっているっていうか……。

「かっちゃん、落ち着いて。真耶ちゃんに何が起こったかなんてまだ分からないんだから」

そうだよね、悲鳴だけで「死んだ」なんて広間での出来事を引っ

張りすぎだ。お風呂場で悲鳴なんてもっと定番の展開があるじゃないか……。

「痴漢ー！」

側にいたか駆けつけたかと思われる亜美ちゃんの声。そうよ、これが聞きたかったのよ。あ、痴漢がいるのも嫌だけど「死ぬ」に比べたらマシって話ね。

私たちが駆けつけると真耶たち妹三人は入り口に背を向け、両手で大切なところを隠していた。よかった。怪我は無いようだ。

「どうしたの？」

浅野先輩が冷静に尋ねると。

「入り口に黒い影がいて、中をじっと覗いていたみたいなんです」
真耶が怯えながら答える。お風呂場・覗く・黒い影って……。

「ま、まさかクラドスポリウム・トリコイデス!!」

「えっ？ そんなわけないでしょ！」

私の仮定をなぜか明石先輩は即座に否定した。ちなみにクラドスポリウム・トリコイデスとはお風呂場にいる黒かびのことである。

「私も明石先輩に同意見です。彼女ではありません」

結衣ちゃんも明石先輩に同意。

「そうだよ、かっちゃん。いくらクラドスポリウム・トリコイデスが過去にお風呂場を覗いていたからって、ここまで来ているわけが無いじゃない」

そうだよね、しいちゃんの言うとおりだよね。クラドスポリウム・トリコイデスなわけじゃないよね。

って、あれ……？ 明石先輩と結衣ちゃんはなんでクラドスポリウム・トリコイデスのこと知っているんだ？ しかも結衣ちゃんは「彼女」だなんて女性であることを明らかに知っているような言い方だ。私の知らないだけで、あの「ヒーローショー」もどきは結構行われていたのだろうか。

「亜由美じゃないの？」

浅野先輩が辺りを見回して言う。

そういえば亜由美だけこの場にいない。

つまり、亜由美が覗いていた可能性があるし、そうじゃなかったら亜由美がもっとヤバイことになっているかも……。

「はい、呼びました？」

私の嫌な予感を亜由美の落ち着いた声が追い出した。

「亜由美！ どこにいたの？」

しいちゃんの声にちよつと悲鳴が混じっているのは私と同じことを考えていたのだろう。

「ずっとサウナにいましたけど……」

サウナは洗い場より入り口から離れているので、亜由美が覗いたとは考えられない。

と言うことは本物の痴漢……！！

第三十一話　ひとつのかげら

お風呂場を覗いたのはクラドスポリウム・トリコイデスでもこの中の誰でもない。つまり本物の痴漢がさっきまでここにいたことになる。

「なんとも物騒ね……」

浅野先輩の顔がちょっと青い。

「部屋が危ない可能性があります。早く戻ったほうがいいでしょう」
しいちゃんが浅野先輩を促す。

「えーっ、嫌だ！ 私お風呂に入ってない！」

亜美ちゃんが駄々をこねる。

「私も入ってないし……、ひとまず落ち着きたい」

真耶が少し涙声だ。

「それに本当に部屋が危なかったらもうやられているかもしれないしね……」

明石先輩がさらっと恐ろしいことを言う。気がつけばまた湯船に入っているし。

「私も明石先輩に賛成。ダメならダメで楽しむことは楽しまないと」
はるちゃんもそれに続く。いやー、部屋の心配をしつつお風呂を
楽しむって割り切ることなかなかできないと思うけどなー。

結局全員一度は湯船に浸かろうってことになった。実際入ってみ
ると、うん、気持ちがいい。お風呂で癒されるというのはこういう
ことなのだろうか。真耶もさっきまでの怯えがすっかり消えている。

しかしそのいい気分も脱衣所にて一蹴される。

脱衣所で私たちを待っていたのは壁一面にマジックか何かで書き
なぐられた一連の文字。

殺してやる　殺してやる　殺してやる　殺してやる　殺してやる

殺してやる 殺してやる 殺してやる 殺してやる 殺してやる
殺してやる 殺してやる 殺してやる 殺してやる 海賊王に俺
はなる

複雑な寒気が私たちを襲った。

「こ、これは殺人予告……」

「最後に将来の夢も語っていますね。就職難ですからこの選択も悪くは無いですね」

亜由美が眠そうな目を文字に向ける。

「これは量産型にやられたドイツ人少女が叫んだセリフね」

明石先輩が淡々と文字を眺める。正確にはドイツと日本、両方の血が混じっているのだが大方合っているってことで。まあそれは置いておこう。

なるほど、これからやる側の人の言葉じゃなくて、やられた側の言葉なのか。やられた側って私たち？ ……だとしたら、何がやられたんだ？

「へ、部屋！ 部屋が危ない！」

私はそう叫ぶと脱衣所の出口へ向かった。人が無事ならやられたのは持ち物しかないじゃない！

「かっちゃん！」

しいちゃんの悲鳴と彼女との圧倒的な力の差に私の動きは止まった。

「なによ、しいちゃん！」

「落ち着いて！ 服を着て！」

……あ、裸のまま駆けて行くこうとしちゃった。裸足で外を駆けていった愉快的主婦どころじゃない。

幸いにして部屋は荒らされた跡も何者かが侵入した形跡も無かった。

「あー、よかったー。部屋がなんともなくて……」

「そうだね、あんなことがあったんだもん、何も無くてよかったよ」
「うーん、ちよつとがっかりと言うか……」

しいちゃんが安堵の息を出している中、はるちゃんが少々不謹慎な発言をする。

三つの部屋の確認を終えて、それぞれの部屋に戻ろうとしたその時――

「うわーっ！ 死にたくないー！」

どこからか男性の悲鳴が。

「今度は一体何？」

「ちよつと行ってみよう！」

しいちゃんが声の方向へ走り出すとはるちゃんも続いた。廊下に出ているのは私たち三人だけ。妹や先輩達は既に自室に戻っている。ここで一人残るのは危険だし他の人たち呼ぶのも悪いので、しょうがなく二人の後を追う。

「嫌だー、死にたくないー！」

「おい、平井^{ひらい}落ちつけ！」

廊下の角を一度曲がると平井と呼ばれた人が泣き叫んで暴れているのを他の三人が抑えているところに出くわした。

「一体何があったんですか？」

「そ、それが……」

はるちゃんの質問に、三人のうちの一人が答えようとする

「ちよつと失礼します」

と山城兄弟が部屋の中に入って行った。

「部屋に入ったほうが分かりやすいみたいね」

はるちゃんが質問したばかりの四人を無視して部屋に入る。部屋に入るのはちよつと怖い気もするけど刑事が二人いるし、何よりしいちゃんもいるから安全か。

しかし、部屋に入ってみたら余計分らないことになった。緑色のテーブルになにやら白い棒とか白くて四角い何かがいっぱい散らばっているのだ。その中で四角い何かが横一列綺麗に並んでいるの

がある。賀茂さんはこれを見るや。

「これを平井さんが和了あがったのですね」
まだ外にいる四人に尋ねた。

「はい、第一ツモでした」

誰かが答える。何のことやら。

「え……、どういうことですか？」

しいちゃんが尋ねると賀茂さんは

「地和四暗刻単騎大四喜字一色です」

と何やらお経のような言葉を唱えた。

「はあ……」

私たちの生返事に賀茂さんはちよつと考え込んだ後で

「麻雀……と言っても分かりませんね……。そうですね、例えば宝くじが当たったときなど思いがけも無い幸運が舞い込んできた時、これは不吉なことが起こる前兆ではないかと不安になりませんか？」

「そう言われるとその通りですね……」

去年、タカビーの勧めで初めて馬券ばけんと言うものを買ったとき、百円が七十万円近くになってしまい怖い思いをしたことがある。

「ありますか、平井さんはその四倍の体験をしたのです」

百円が二百八十万になったのか……、不吉だな。

「四暗刻単騎と大四喜はダブル役満やくまんと決めていました」

まだ廊下にいる男の人から声が、いい加減中に入ってきててもいいのに。

「なるほど、つまり四倍じゃなくて六倍ですね」

「つまり、思いがけない幸運が一気に六つ重なって平井さんにやってきたと言うことですね」

しいちゃんの問いかけに賀茂さんは頷き。

「ええ、これは明らかに死亡フラグです」

事も無げに言い放った。刑事が言っているものなのだろうか。さすが窓際部署だ。ちなみに弟さんは終始無言である。

「そんな……、俺この旅行が終わったらあの人にプロポーズしようと

思ったのに……」

平井さんが自ら新たなる死亡フラグを重ねる。

「一つ屋根の下に何か事件が起こりそうな客が多くいる中で、これほどの死亡フラグ、何かが起こってもおかしくないですね」

「それで……」

「すね」と言おうとしたであろうしいちゃんが言葉に詰まった。そうだった、もう既に起こっているのだった。

「いや、実はもう起こっているんです。この部屋ではなく会議室でもなく女場で」

はるちゃんも同じことを思っていたらしい。余計な一言を付け加える。

「な、なんだってー!!」

驚いたのは賀茂さんではなくて、弟の桂さんのほうだった。桂さんの声初めて聞いたが、見た目の想像よりかなり高い。

「それは大変、すぐに行きましょう」

窓際部署所属とは言え一応警視庁の刑事である二人に、先ほど私たちが見た脱衣所の落書きを見てもらうはずだった。

「こちらです」

「これが女湯ですか……」

賀茂さんは別に興奮するわけでもなく、脱衣所を眺める。

「そんなことよりこの落書きを」

「ただの綺麗な壁ですが？」

「!？」

私としいちゃんとはるちゃんは同時に落書きのあった壁を見る。

賀茂さんの言うとおりでそこには何も書かれていなかった。

「え……?」

「う、嘘でしょ……」

脱衣所から出て、またここに来るまで十分〜二十分ぐらいしか経っていないのだがその間に壁の落書きが全て消えてしまったのだ。

「か、海賊王になれたから消しちゃったのかな……」
いつものはるちゃんのジョークも少々冴えない。

第三十二話 解決編

壁の落書きは消されていた。

「たったの十分二十分で文字が消える……？」

呆然とする私たちにとは対照的に賀茂さんは興味津々の表情を見せている。仕事柄驚きで何も出来ないと言うわけには行かないからだろう。

「『文字を消す』と言いますが、『消す』にもいろいろな方法がありますからね……、今回のケースでいうと、消えやすい物で書いたのか、それとも……」

「それとも……？」

しいちゃんが尋ねると賀茂さんは一瞬口を開いたが、それを閉じて視線を壁に移す。しばらく間置いた後で、

「いえ……、なんでもないです」

と、私たちのほうへ体を向けた。

「ここは後で調べるとして、とりあえず部屋に戻りましょう。何かあるといけませんから私たちが部屋まで付き添います」

桂さんが無言で頷く。お兄さんの意見に同意するってことだ。

部屋へと戻る廊下を歩きながら私は何か嫌な視線を感じた。さっき通ったときには感じなかったのに。しいちゃんやはるちゃんだけだったら、変に不安がらせるだけだけど、刑事さんがいれば何か力になってもらえるかもしれない。

「何かさっきから誰かに見つめられているような気がするんですが……」

「あー、私もそれ思った」

「私もそうだよ」

あ、二人ともそうだったんだ……。幸い誰も足音が一つ余計に聞こえることはなかった。

「ああ、これですね」

賀茂さんはあっさりと視線の正体を示してくれた。それは廊下の角につけられた監視カメラだった。

「おそらく防犯用に付けられたものでしょう」

「今まで歩いていて全く気がつかなかった……」

防犯カメラがずっと付いていたということは最初から私たちに視線を送っていたことになる。それに今さら気がつくなんて、壁の一件で臆病になったせいだろうか。もしくは、前にここを通ったときはそんな視線どころではなかったからという逆の理由かもしれない。ともかく防犯カメラが存在するということは「何かが起こる」ことへの予防となる。もっとも事件がおこる典型的なパターンで言えばこんなカメラは一撃で壊されるのだが。

女湯から二回ほど角を曲がれば私たちの部屋に着く。最後の角を曲がったところで、部屋の一つ奥にある部屋の扉が閉じられたのが見えた。あれは妹達の部屋だ。

「単独行動は危ないって言うのに……」

刑事さんがついているとはいえ部屋の外を歩く私たちも人のことは言えないのだが。

「三人一緒ならば問題ないんじゃないかな」

そうか、三人一緒ってことは結衣ちゃんもいるのか。姉であるしいちゃんの言葉に自信と結衣ちゃんへの信頼が伺える。考えてみればしいちゃんがいるのなら殺人犯の一人くらい大丈夫なのかもしれない。例えば首を掻き筆りながら鉈を振り回す少女が相手でも充分太刀打ちできそうだ。

あ……、でも「ただの殺人犯」なら逆に犯人の身の安全は保障できないし、しいちゃんが「過剰防衛」になっちゃうかもしれない。うん、刑事さんがいてよかった。

そこまで考えるとさっきまでの不安がなんだか馬鹿らしくなってきた。もっとも油断は禁物だが過敏になるのも返ってよく無いだろう。

刑事さんと別れて部屋に入る。特に変わった様子は無い。

安心したのか一気に疲れが出てしまった。私は布団も被らずそのまま突っ伏した。

「いやー、今日はいろいろあったなー」

「何言ってるのよ。これから何か起こるかもしれないじゃない」

はるちゃんの声がちよつと楽しそうだ。

「もう、はるちゃん。何も起こるわけが無いでしょ」

しいちゃんがちよつと呆れ声で突っ込む。

「何もないよー、壁の落書きも誰かのいたずら。刑事さんたちが何とかしてくれるからさっさと寝よう」

「そうだね。ちよつと早いけど旅館で寝るのもお泊りの醍醐味だし」

「えー、つまんなーい。布団に入って何か話をするのも旅の醍醐味じゃなーい？」

寝たいわたしとしいちゃんに対してはるちゃんが抵抗を見せる。

「よーし、じゃあ恋の話をしようか？」

「うん！ 寝ようー！！」

せつかくはるちゃんの願いを叶えようとしたのに、はるちゃんは布団も頭から被ってしまった。

「なによー、はるちゃん。『帰ったら姉小路先輩に告白する』とかいうプランはないの？」

「もう、かっちゃん。それ死亡フラグだよ……」

しいちゃんに言われて気がついた。これも立派な死亡フラグだ。

「明日こそ先輩に告白する」と決意した少女が明け方、最終兵器に殺されたのは有名な話だ。それをコンビニで立ち読みしていた私は「三角関係の修羅場にならなかった」という少しの安堵を覚えたっけ。

「というか、一番心配して無いしいちゃんが『死亡フラグ』の指摘って何？」

はるちゃんが布団から顔を出して突っ込む。

「だから、何も心配して無いからこういう冗談が言えるんじゃない」

私たちは声を出して笑った。広間での異様なお客さんも、覗きも壁の落書きもすっかり話のネタの一つになっていた。

しかし、何かは起きていた。

朝食も昨夜と同じ広間で摂る。私たちを不安がらせたメンバーが次々と現れる。途中で単独行動をとった部長さんも、「地和なんたら」言うのを和了^あがった平井さんも来ている。

でも一人だけ足りない。そう、「天上天下」のTシャツを着た包帯の男が。

その事実が気がついたとき私の心に昨夜の不安が蘇った。

(ま、まさかあの男が殺された……)

推理物の場合、怪しい包帯男がいなければ最低でももう一人いないはずである。そう、後者が殺され前者が犯人(と当初は思われていて実は被害者)。しかし今回は包帯男一人だけ。セオリーは少々外れたとは言え彼の身に何かが起こり、その事情を知っている人間がこの中にいる可能性はきわめて高い。

不安が蘇ったのは私だけではなかった。

「ねえ、しいちゃん。何か起こっちゃったようだよ……」
はるちゃんが囁く。そこに楽しそうな声色は覗えない。

「う……、うん……。どうしたんだろうね」

しいちゃんもこの事実を否定する要素が見つかっていないようだ。
「包帯巻くのに手間取っているだけじゃないんですか？」

亜由美はこの状況下でもまだ活路を見出そうとしている。

そんな不安も解けぬまま、お膳を整える仲居さんから驚きの言葉が飛び出した。

「今回の優勝者は、『御徒真知』さんです！」

どこからか現れては一斉に「おめでとう！」と拍手をする従業員達。それにつられて拍手をするお客さんたち。

何がなんだか分からない。とりあえず笑えばいいのだろうか。つ

いでに「私はここにいていいんだ!」って叫んだらこの物語はここで終わってしまいそうだ。

「え、あ、はあ……」

とりあえず適当に会釈を何度もしてみる。

「ごめんなさい、何のことだかわかっていないでしょう」

女将さんが拍手を辞めて私のほうへと歩み寄ってきた。

「ええ、はっきり言って」

私の言葉に女将さんは「そうでしょ」と笑顔を浮かべる。

「実はね、昨夜からいろんなおかしいことあったと思うけど、あれみんなうちでしかけた『ドッキリ』なのよ。お客さんの反応をみんなでチェックして、一番怖がっていた人に、「おめでとう」と怖がらせたお詫びの気持ちとして、今回の宿泊費タダにしているの」

「ドッキリ」……? 一体どこからどこまでが?

「え? じゃあお風呂場の覗きとか、壁の落書きとか……」

今朝も落ち着きの無かった浅野先輩の表情から不安が消えていく。
「ええ、あれはうちの仲居の仕業です」

一人ではなく仲居さんが数人ならあの落書きは短時間で書くことも消すことも可能だろう。もっとも何度もやっているからマニュアルというものも用意していたりして。

あ、そうか廊下のカメラも防犯って言うよりドッキリ用なのかもしれない。だとすれば……!

「そ、それじゃあここにいらっしゃるお客さんは……」

しいちゃんが私の代わりに尋ねると、女将さんはちょっと困った顔をして

「今回は偶然お客様に刑事さんとかそういう方が多かったけど……、あの包帯男はうちの運転手ですね」

「はあ……」

私を含めた何人かがため息を漏らした。全ては旅館が仕掛けた「ドッキリ」だったのだ。

人騒がせだけどまあいいか。そのおかげで旅費が一人分浮くんのだ。

歸りに何か美味しいもの食べようかな。

「いいえ、これは立派な事件です」

そのような幸せな雰囲気をぶち壊す言葉に私たちは驚いた。それを言ったのは賀茂さんでもその他の探偵でもなく亜美ちゃんだ。知って更に驚いた。

第三十三話 本当の解決編

「いいえ、これは立派な事件です」

亜美ちゃんの発言に広間がざわめく。

「何をいい加減なことを言っているのだ！」

この発言は探偵さんから出たもの。本来なら逆なはずだ。

亜美ちゃんはそんなのを無視して自身あり気に続ける。

「最初は『ただのドッキリ』だったんです。『最初は』」

「最初は」？ いつから「ドッキリ」じゃなくなったんだ？

「あ、『最初は』って言っても昨夜からの話じゃなくて、この旅館が『ドッキリ』イベントを始めた頃という意味での『最初は』ですからね」

「証拠はあるのか!？」

だから探偵の言うセリフじゃないでしょ！

「証拠はこのノートです」

亜美ちゃんはお膳の下から水色のノートを取り出した。

「あ……!」

従業員の中から声が漏れる。持ち主だろうか。

「一番初めの記事は三年前の八月です。内容は『女性三人入浴、二人の胸は合格』と書かれています」

うん？ この記事は……。

「続いて同じ八月です。『人妻が子供を連れて入浴。既に人の物だし少々年もいていたが体の線が細く、満足した』と書かれています」

入浴した人の様子を書いているって覗きじゃないか！

亜美ちゃんがノートを閉じると辺りを見回して。

「分かりましたか。これは『女湯を覗いた感想』が書かれた日記なんです」

「つまり、昨日の私たちも日記に書かれているってこと!？」

明石先輩が怒りの声を上げる。男に裸を見られたことが許せないのだろう。

「このノートが彼の元にあったら書かれていたでしょうね。しかし幸いなことに彼は昨夜のことを書く前にノートを廊下に落とし、それを私たちが拾った。と言うわけです」

「なるほど、覗きは本当にいたとしましょう。それで『最初は』と言うのは？」

賀茂さんが眼鏡を光らせて尋ねる。

「おそらく彼も最初は『ドッキリ』の仕掛け役に徹していたのかもしれません。しかしある時、『ドッキリなら自分でも女湯を覗けるだろう』と思ってしまった。そして実際に覗いてしまった。旅館のお客様へのサービスのつもりが、本当の覗きになってしまったという訳です」

「そ……、そんな……！」

さっきまで私の前で笑顔だった女将さんが泣き崩れる。そりやそうだ、よかれと思ってやったことが「従業員の犯罪」を生み出してしまったのだから。

「それで、このノートの持ち主は……」

賀茂さんの問いに亜美ちゃんたけちは頷くと

「犯人はあなたです。武市洋平さんようへい」

亜美ちゃんは「武市」がどんな顔をしているのか分かっているけど、私には分からない。板前姿や掃除係の制服を着ている従業員の顔を見ているうちに本人が教えてくれた。彼は後のほうから出てきた。

「ふっ……、ふははははっ！」

出てきたのはスーツ姿のサラリーマンだった。フロントや事務所にいる人だろうか。

「そんなことで全てを知ったと思っているのか？ 馬鹿娘が！」

「な……、私は馬鹿じゃないわよ。馬鹿って言う方が馬鹿なんだからね。この馬鹿！」

結局二人とも馬鹿になってしまった。

武市は鋭く亜美ちゃんを睨む。

「お前は二つの間違いを犯している」

「ま、間違いですって……、それも二つ……？」

決して長くは無い発言の中で間違いが二つあったら致命的じゃないか？ でも犯人は亜美ちゃんの言うとおりの武市ようだし……。

「順番が違うんだよ、順番が」

「じゅんば……？」

「うわーっ！！」

なぜか女将さんの悲鳴が大きくなった。

「『ドッキリ』があったから俺が女湯を覗いたんじゃない。俺が女湯を覗いたから『ドッキリ』が生まれたんだ」

はあ？ なぜ女湯を覗いたからドッキリになるんだ？

「つまりあなたの『覗き』を旅館ぐるみで隠蔽するために『ドッキリ』を考えた。そう言いたいのですね」

賀茂さんが亜美ちゃんと武市の間に入ると、武市は満足そうに微笑んだ。

「そうだ、お前は頭がいいな。刑事のお前はもう知っていると思うが、俺はこの旅館の跡取り息子だ」

跡取り……、この女将さんはその母親だろうか？ 年は四十から五十辺りに見える。その息子となると彼は少なくとも二十代……、スーツ姿だから年を取っているように見えるが、下手をすると私たちと同じってことか。

「跡取り息子が女湯を覗いたことが世間に知られたら、旅館としてはお終いですからねえ」

終わってしまうほどいけないことをしているのにも関わらず、周囲は止めるどころか隠蔽するほうに回ったわけだ。最近小学校などで貧乏でも無いのに給食費を払わない家庭があるそうだが、たぶんこういう家庭なのだろう。

「女湯を覗いて、それを『ドッキリ』で誤魔化したせめてものお詫

びのつもりで宿泊代をサービスするってことね。全く呆れた話だね」
こんなんじゃサービスされても嬉しくない。

「御徒さんの言うとおりです。宿泊費をサービスしようが、覗きは立派な犯罪です」

賀茂さんが武市にゆつくりと近付く。

「刑事さん、先に『犯罪』って言ったのは私だからね」

亜美ちゃん、大丈夫。その点は認識できる人だから（他の探偵は分からないけど）。

武市は更なる笑みを浮かべる。

「ふははははっ、お前らはもう一つの間違いを理解していないようだな」

言うや否や武市は平井さんたちの方へ走ると、そこにある窓の手すりに飛び乗った。

「あっ！」

「ま、まさか!？」

私と亜美ちゃん。それだけじゃなくて、この広間にいるほとんどの人は武市がこれからやろうとしていることを予想した。しかもそれは当たっていたのだ。

「そうだ、俺がここで捕まるってことだ！ 生き恥を晒すくらいなら、ここから飛び降りて死んでやる！」

武市の体が窓枠の向うへと移る。同時に桂さんの姿も窓枠の向うへと――

「いやあああああっ！」

「うわあああああっ！」

次々と口から放たれる悲鳴！ 私もその一人だ。

一つ屋根の下に事件が起こりそうな人物が集い、次々と出る死亡フラグ・犯行予告。それでも死人は一人も出なかった。事件モノのパターンから逃れることができたと思っていたのに……。

――聞いてもないところまで話した後で犯人は自殺する――

このパターンからは逃れられなかった。断崖絶壁ではなく、旅館

の広間だったので安心していただけなかった。

指の隙間から武市と桂さんが飛び降りた窓を見る。……あれ、二人の姿がまだ見えるぞ。浮いているのか？

「ここは一階ですよ」

賀茂さんの落ち着いた声が聞こえた。

こうして、一時は死を覚悟した旅館での一夜が終った。

「武市さん！」

「武市さあん！」

「武市坊ちゃん！」

従業員の泣き叫ぶ声に囲まれながら武市は三人の警官にパトカーへと引っ張られる。

その様子を輪の外から見守る二人の刑事と私たち。

「犯人を捕まえたのは桂さんなのに、手柄は別の人なんですね」
しいちゃんが賀茂さんたちを見上げる。

「ええ、こういう軽微な犯罪は所轄に任せた方が後々面倒にならないでしょう」

そう言いながら賀茂さんは私たちを見回して。

「壁の落書きの一件、最初は正直言ってあなた方のいたずらかと思っただですが、実は旅館ぐるみのいたずらだったのですねえ。それならあんな短時間で全てが消えていたのが納得できます」

なんと、私たちに疑いをかけていたのか。全てを疑うのは刑事の職業病なのだろうか。

「ま、でも私のおかげで無事に解決って訳ね」

亜美ちゃんが誇らしげに両手を腰に当てる。

「一つ忠告しておきたいことがあります」

賀茂さんは亜美ちゃんの顔を見るや人差し指を立てた。

「は、はい？」

「素人が事件を解決しようとして勝手に動き証拠を掴む、これも立派な死亡フラグですよ」

そうだった。それで犯人が特定できたかのようなセリフを吐けば効果は倍増だ。

「ま、そういう人が事件を解決するのも事件モノのパターンの一つなんですけどね」

賀茂さんの見上げた先には「土砂金^{どろごちん}」と薄い墨で書かれた看板が寂しそうに風に揺れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6331f/>

御徒町フィーバー3rdStation

2010年10月8日12時02分発行